SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

平成 27 年度指定 スーパーグローバルハイスクール

# 研究開発実施報告書

## 第 5 年次

令和 2 年 3 月

岩手県立盛岡第一高等学校

# 岩手県立盛岡第一高等学校スーパーグローバルハイスクール（ＳＧＨ）研究開発構想

◆目的　グローバル課題を発見し、原因を探り、解決法を探究・議論し、その成果を本国のみならず、世界のパイロットモデルとして発信する一連の取組みを通して、21世紀の理想的なグローバル社会を開拓し得る人材の育成を目指す。

◆目標
- グローバル課題の解決方法を探究し、その成果を世界へ向けて発信するとともに主体的に課題解決に向けた実践を行う姿勢を養う。
- 世界の諸国・諸地域の実態と抱える課題への関心を高めるとともに、論理的思考力、課題解決能力、積極性、行動力を養い、主体的な学びを醸成する。
- 他者との相互理解・協業に必要な傾聴力、共感力、質問力、説得力を育成し、自分の考えを分かりやすくかつ説得的に伝える力を身に付ける。
- 上記3つの目標を十分に達成するに足る実践的な英語力を習得する。

## イーハトーブ世界の開拓者の育成

- 東日本大震災からの復興
- 著しい高齢化
  世界各地で発生が懸念されるグローバル課題が先鋭的に存在
- ＩＬＣ誘致活動
  宇宙の誕生の解明

### ＳＧ課題研究Ⅲ（3年普通科全員）

- 岩手から国内および海外へ研究成果を発信
  - 英文による論文作成
  - 英語による成果発表

### ＳＧ課題研究Ⅱ（2年普通科全員）

- 論理的思考力、問題解決能力の育成
- 課題研究のテーマ　『岩手が抱える6分野の諸問題をグローバルな視点で解決する探究活動』

①２１世紀型地方都市の探究
②ローカルな魅力を活かしたグローバル観光モデルの探究
③“Made in Iwate”ブランドの確立へ向けた探究
④グローバルスタンダード教育モデルの探究
⑤グローバルな知の拠点の創造へ向けた探究
⑥世界を支える地域医療の探究

- 課題研究発表会
- 連携大学や企業との共同研究
- SG海外研修（台湾）
- SG講演会

### SG課題研究Ⅰ（1年全員）

- 問題発見能力、コミュニケーション能力の育成

フィールドワーク、グループワーク、ディベート、プレゼンテーションという一連の取り組みを通じてグローバル課題の抽出からその解決法の模索までの探究活動

- 実践的な英語力の育成
  「グローバルコミュニケーション英語」
- 国際時事問題に対する関心と専門性の育成
  「グローバル現代社会」

### 連携

**岩手大学、岩手医科大学、東北大学** など
- 指導プログラム開発への助言
- 講義（講師派遣、サテライト授業）
- TA（大学生、大学院生の派遣）
- 留学生とのディスカッション

**企業、国際機関、海外の大学海外の高校** など

◆これまでの取組み
◇国際交流事業（S55～）
- 海外派遣研修（のべ483名）
- 外国人高校生受入（のべ232名）

◇理数科振興プログラム
- 課題研究（連携：岩手大学等）
- つくば研修
- 施設見学実習

### 課題研究以外の取組み

**海外派遣研修「白堊の翼」**
- 約1か月の本校独自の海外派遣事業

- グローバル研究会
- 外国人高校生招致
- SGH、SSH校との合同発表会
- 英語版学校案内
- 英語部の活動充実
- 外国大学進学研究

SG 課題研究全体発表会

台湾研修・田中マラソンボランティア

はじめに

「スーパーグローバルハイスクール事業　～最終年度を終えて～

岩手県立盛岡第一高等学校
校　長　　佐　藤　　有

本校が平成 27 年度に文部科学省からスーパーグローバルハイスクール事業（以下「SGH 事業」）の指定を受け５年が経過し、最終年度の取組を終えました。この間、本校は「イーハトーブ世界（万民の幸福を追求するグローバル社会）の開拓者の育成」を研究開発名として、本県が抱える６分野の諸課題（21 世紀型の都市、観光、地元ブランド、教育、ILC 誘致に伴う知の拠点化、地域医療）の解決をグローバルな視点から目指す探究活動である SG 課題研究と海外フィールドワークをその中心に据え研究開発に取り組んで参りました。

最終年度の実践においては、「生徒に身につけさせたい資質・能力」を「主体的に課題解決に向けた実践を行う姿勢」に焦点化し、アクションプランの提示にとどまらず、その具体的な実践を課題研究の柱に据えました。その結果、多くの探究班が、作成したアクションプランを学校から社会へ出て実践しました。特に、知的障がい者が働く福祉事務所の商品を県内の温泉旅館で販売した班の取組、地域の酒造の酒粕を使ったクッキーを試作し、商品化を目指す班の取組は、「実践を行う姿勢」の現れとして評価できます。

海外フィールドワークは、昨年に引き続き台北を中心とした台湾で実施しました。地域行事に参加する体験型の研修、政治大学での講義の受講やプレゼンテーションの実践、学校交流等を通じて、生徒たちは大きく成長しました。また、盛岡市と友好協定を締結する花蓮市を訪問し、両市の友好促進の一助となりました。今後は訪問だけでなく、受け入れも行い、双方向の交流となるよう発展させていく予定です。また、ネットワークを通じての海外の高校生・大学生たちとの対話や交流も促進したいと考えているところです。

令和４年度から本格実施の新学習指導要領では、「探究」がキーワードになっており、「自ら問いを立て、問題解決に導き、新たな価値を創造していく力」の育成が重要な課題になっています。そこには多様な価値観をもった他者との連携・協働が必要になります。５年間の SGH 事業で構築された、国内外の多様な機関、地域の教育資源との協力体制を活かしながら、「総合的な探究の時間」、「理数科課題研究」等の探究活動の充実を図り、その成果を発信していきたいとも考えています。

結びに、本事業に真剣に取り組んでくれた本校の生徒諸君並びに指導にあたった教職員の奮闘に敬意を表しますとともに、ご支援いただいた岩手県教育委員会をはじめ、関係の皆様に衷心より感謝申し上げます。今後もより一層のご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げ、巻頭の挨拶とします。

# 令和元年度スーパーグローバルハイスクール
# 研究開発実施報告書・５年次
# 令和２年３月
# 岩手県立盛岡第一高等学校

巻頭言

目　次

Ⅰ　令和元年度岩手県立盛岡第一高等学校 SGH 事業概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅱ　ＳＧ課題研究Ⅰ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18

Ⅲ　ＳＧ課題研究Ⅱ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24

Ⅳ　ＳＧ課題研究Ⅲ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41

Ⅴ　令和元年度ＳＧ海外フィールドワーク台湾研修・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50

Ⅵ　グローバルコミュニケーション英語・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・72

Ⅶ　グローバル現代社会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・87

Ⅷ　ＳＧＨとＩＣＴ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・89

Ⅸ　英語ディベート・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91

Ⅹ　生徒海外派遣事業「白堊の翼」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・92

Ⅺ　運営指導委員会議事録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・94

巻末資料

## 平成２７年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要

<table>
<tr><td rowspan="2">指定期間</td><td>ふりがな</td><td colspan="4">いわてけんりつもりおかだいいち</td><td rowspan="2">②所在都道府県</td><td rowspan="2">岩手県</td></tr>
<tr><td>27～31</td><td>①学校名</td><td colspan="4">岩手県立盛岡第一高等学校</td></tr>
<tr><td rowspan="2">③対象学科名</td><td colspan="5">④対象とする生徒数</td><td colspan="2">⑤学校全体の規模</td></tr>
<tr><td>１年</td><td>２年</td><td>３年</td><td>４年</td><td>計</td><td colspan="2" rowspan="3">1 年…普通・理数科 7<br>2 年…普通科(文系)3, (理系)3･理数科 1<br>3 年…普通科(文系)3, (理系)3･理数科 1</td></tr>
<tr><td>普通科</td><td>284</td><td>240</td><td>248</td><td></td><td>772</td></tr>
<tr><td>理数科</td><td>-</td><td>0</td><td>0</td><td></td><td>0</td></tr>
<tr><td colspan="2">⑥研究開発構想名</td><td colspan="6">イーハトーブ世界（万人の幸福を希求するグローバル社会）の開拓者の育成</td></tr>
<tr><td colspan="2">⑦研究開発の概要</td><td colspan="6">地域のグローバル課題を題材とした課題研究を、総合学習を活用し、学年の進行に応じて段階的に構成することにより、グローバル・リーダーが備えるべき素養を涵養するプログラムを開発する。それと並行して、既存の科目の発展的再構成を中心に、教育活動全体を通じてこれを下支えすることで得られる成果の最大化をはかる。</td></tr>
</table>

**⑧研究開発の内容等**

**⑧-1 全体**

**(1) 目的・目標**

＜目的＞

グローバル課題を発見し、原因を探り、解決法を探究・議論し、その成果を本国のみならず、世界のパイロットモデルとして発信する一連の取組みを通して、21 世紀の理想的なグローバル社会を開拓し得る人材の育成を目指す。

＜目標＞

・グローバル課題の解決法を探究し、その成果を世界へ向けて発信するとともに主体的に課題解決へ向けた実践を行う姿勢を養う。

・世界の諸国・諸地域の実態と抱える課題への関心を高めるとともに、論理的思考力、課題解決能力、積極性、行動力を養い、主体的な学びを醸成する。

・他者との相互理解・協業に必要な傾聴力、共感力、質問力、説得力を育成し、自分の考えを分かりやすくかつ説得的に伝える力を身に付ける。

・上記３つの目標を十全に達成するに足る実践的英語力を習得する。

**(2) 現状の分析と研究開発の仮説**

本校は平成 26 年に創立 134 周年を迎えた全日制普通高校で理数科を併設する。ほぼ全員が大学に進学しており、その多くはスーパーグローバル大学に進学している。開校以来国内外で活躍する人材を数多く輩出してきた。文武両道を校是とし、部活動においても全国大会での活躍が目立つ。但し日々の授業や部活動に追われ、グローバルな視点から自らが生きる社会を学ぶための機会が十分に得られているとは言い難い。一方で約半数の生徒は留学や国際的業務への就職を希望するという現状にあり、こうしたニーズに応えるためにも、地域社会はもとより国内外でグローバル世界を牽引するグローバル・リーダーに必要な資質を涵養し得る教育プログラム開発は急務となる。

本研究開発は、２段階に大別される課題研究を学年の進行に応じて発展的に構成するとともに、教育活動全体を通してそれを支える方途を開発するという３つの研究開発単位を有機的に関連付けていくことにより、アウトカムを効果的かつ効率的に最大化し得るという仮説に基づいて構想・構成されている。

**(3) 成果の普及**

ホームページ上で取組内容や研究成果を報告するほか、生徒の課題研究は、課題研究発表会、県内教育団体・国際交流協会主催のセミナー等で成果を発表し普及を図る。

| | | |
|---|---|---|
| | ⑧-2 課題研究 | **(1) 課題研究内容**<br>１学年では「岩手発 グローバル課題の探究」をテーマに、２年次にSG課題研究Ⅱで取組む６つのカテゴリー(下掲)に関連した岩手県が抱えるグローバル課題の実態把握とその解決に向けた方向性についてフィールドワークを行い、探究的学習の素地を養うとともに基礎的な手段や手法を学ぶ（SG課題研究Ⅰ）。２学年では岩手県が抱える様々なグローバル課題について解決策を追究するとともに、具体的な行動へと移す能力を高めるため、喫緊かつ普遍性の高い６つのカテゴリー（「２１世紀型地方都市の探究」「ローカルな魅力を活かしたグローバル観光モデルの探究」「"Made in Iwate"ブランドの確立へ向けた探究」「グローバルスタンダード教育モデルの探究」「グローバルな知の拠点の創造へ向けた探究」「世界を支える地域医療の探究」）を設定し、外部機関と一層密に連携し探究的学習に取り組む（SG課題研究Ⅱ）。３学年では一連の取組の集大成として、研究成果について英語を活用し広範に発信する方法を探究する（SG課題研究Ⅲ）。<br>**(2) 実施方法・検証評価**<br>「SG課題研究Ⅰ」では岩手県内および西日本(研修旅行を活用)で行うフィールドワークを中心としながら、その前後に外部講師による講義、プレゼンテーション、ディスカッションを配置し、特に課題発見能力、コミュニケーション能力の育成に注力した探究的学習を構成する。「SG課題研究Ⅱ」は６分野のテーマでグループ毎に文理両面からの探究を行い、外部機関との密な連携の下、論文作成、研究発表を行う。その過程において特に意欲のある生徒を対象に世界各地で実地調査や発表を行い、その成果は続く「SG課題研究Ⅲ」において、外国人教員の指導を受けつつ日本語と英語の報告書にまとめ発表する。なお平成27年度の海外研修はアメリカのボストンで実施予定である。<br>一連の取組の成否は、発表会での相互評価や岩手大学等の第三者による客観的評価及び事業実施前と実施後の生徒、教員等の意識調査によりその変容を比較し検証する。<br>**(3) 必要となる教育課程の特例等**　　特になし |
| | ⑧-3 上記以外 | **(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価**<br>ア 国際レベルで情報の発信と受容ができる実践的英語力を向上させる指導法の研究<br>１学年を対象とした「コミュニケーション英語Ⅰ」について、特に《四領域の言語活動を有機的に関連付けつつ総合的に指導を行う》ことに重点を置き、実践的英語力育成のための指導法（外国人講師との協同等）と教材を開発する。一連の取組の成果はGTEC（平成27年度以降毎年実施予定）等の外部試験を活用しながら検証する。<br>イ 社会課題に対する深い関心と高度な専門性を育成する指導法の研究<br>１学年を対象とした「現代社会」の授業を通して社会の諸課題に対する関心を喚起し、望ましい解決の在り方について主体的に探究・考察する力を養成するための指導法の研究と教材の開発を行う。取組の成否はルーブリック等で検証する。<br>**(2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等**　　なし<br>**(3) グローバル・リーダー育成に関する環境整備，教育課程課外の取組内容・実施方法**<br>ア 海外派遣研修「白堊の翼」(昭和55年から実施している海外研修、1･2年生対象)<br>海外の大学、国際機関、研究施設等の見学やフィールドワーク、同世代の生徒とディスカッションを主な内容とした研修を学校独自予算で実施する。<br>イ グローバル研究会（課題研究をより深化させるための課外活動の立ち上げ）<br>ウ 外国人高校生の短期招致(昭和57年からの実施、これまで232名を受入れ)<br>エ SGH、SSH実践校との合同発表会<br>オ 英語部の活動充実<br>カ 外国大学進学研修会（教員による外国大学進学推進のための検討会の立ち上げ） |
| ⑨その他特記事項 | | 特になし |

（別紙様式３）

令和２年３月１９日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長　殿

住所　岩手県盛岡市内丸１０－１
管理機関名　岩手県教育委員会
代表者名　　教育長　佐藤　博　　印

令和元年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を，下記により提出します。

記

１　事業の実施期間
平成 31 年４月１日（契約締結日）～令和２年３月 31 日

２　指定校名
学校名　　岩手県立盛岡第一高等学校
学校長名　　佐藤　有

３　研究開発名
「イーハトーブ世界の開拓者の育成」

４　研究開発概要
本校の研究開発は、大きく分けて、グローバル・リーダーに求められる諸資質の涵養を目指し、１年生から３年生の３年間にわたり、総合的な学習の時間（総合的な探究の時間）を活用して探究的学習に取り組む SG 課題研究と海外フィールドワークの二本柱である。

今年度は指定最終年であり、ポスト SGH に向けた取組に力を入れた。この５年間の課題研究を通して得た一番の成果は、国内外の多様な機関との連携、および地域の教育資源との協力体制の構築である。限られた人的・時間的・予算的リソースの枠内で、バランスの取れた能力の伸長を図るプログラム開発を行ない、持続可能な本校オリジナルの探究学習モデルが完成しつつある。今年度は盛岡市との提携をベースとして連携機関を拡大していった。また TOLIC（東北ライフサイエンス機器クラスター）のように、世界展開を視野に入れている組織や機関との連携を深めていくことにより、生徒たちのアクションを一層グローバルなものへと高めていくことができた。

海外とのつながりという面では、台湾フィールドワークも２回目をむかえ、政治大学や同大学附属高級中学をはじめとする台湾の組織・機関との連携も恒常的なものとなってきた。

課題研究を通して、国内外の多様な機関と協力、連携が進んでおり、この関係は SGH 指定終了後も、本校の探究的な学習の根幹を成すものとなると思われる。

5　管理機関の取組・支援実績

（1）実施日程

| 業務項目 | 実施日程 | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
| 学校訪問 | ○ | | | ○ | | ○ | | | | | ○ | |
| 文科省会議参加 | | | ○ | | | | | | | | | |
| 運営指導委員会 | | | | | | | | | | | ○ | |
| 行事視察等 | | | ○ | | | | | | | | ○ | ○ |
| 課題研究支援 | | | ○ | | | | | | | | ○ | |

（2）実績の説明

４月１日（月）運営指導委員の今年度委嘱及び委嘱状送付

４月３日（水）学校訪問（今年度SGH事業運営について管理職・担当者と協議）

６月28日（金）スーパーグローバルハイスクール他合同連絡協議会参加（盛岡一高担当者と同行）

７月４日（木）盛岡一高SG課題研究英語発表会対応（発表会の視察、指導助言等）

９月25日（水）雲南省教育関係者訪問団視察受入れ対応（視察の同行、SGH事業内容の共有）

12月22日（日）全国高校生フォーラム（発表会資料の作成支援）

２月27日（木）盛岡一高SGH２学年課題研究発表会対応（発表会の視察、指導助言等）

２月27日（木）盛岡一高SGH運営指導委員会対応

※　上記の他にも、電子メールや電話等により連絡をとり対応したもの。

6　研究開発の実績

（1）実施日程

| 業務項目 | 実施日程 | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
| ＳＧ課題研究Ⅰ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| ＳＧ課題研究Ⅱ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| ＳＧ課題研究Ⅲ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | | |
| グローバルコミュニケーション英語 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| グローバル現代社会 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |

（２）実績の説明

□各学年の課題研究

| | １学年≪ＳＧ課題研究Ⅰ≫ | ２学年≪ＳＧ課題研究Ⅱ≫ | ３学年≪ＳＧ課題研究Ⅲ≫ |
|---|---|---|---|
| 4月 | 11 日　エンカウンター①<br>12 日　エンカウンター②<br>23 日　エンカウンター③ | 17 日　一斉ガイダンス<br>24 日　先行研究調査 | 19 日　ガイダンス<br>26 日　英語プレゼン準備 |
| 5月 | ９日　SG 講演会、海外派遣報告<br>23 日　地方創生プログラム フェイズ１ | 15 日　SG 講演会 | （英語の授業等でプレゼン練習） |
| 6月 | ４日　地方創生プログラム フェイズ２<br>11 日　地方創生プログラム フェイズ３ | 5 日　Start up Day 1 with カタリバ<br>26 日　Start up Day 2 with カタリバ | 24 日　発表リハーサル<br>26 日　クラス別発表会 |
| 7月 | ２日　GTEC for STUDENT 受験<br>９日　夏季フィールドワーク事前準備<br>**夏季休業期間　フィールドワーク** | 2 日　GTEC for STUDENT 受験<br>10 日　Start up Day 3 with カタリバ | ２日　GTEC for STUDENT 受験<br>４日　学年発表会<br>18 日　ＳＧ講演会（村尾隆介氏） |
| 8月 | 20 日　夏季フィールドワークのまとめ<br>**31 日・1 日　文化祭におけるポスター発表** | 28 日　ポスター作成 | |
| 9月 | 10 日　ポートフォリオ作成１<br>24 日　中間発表会（地方創生プログラムまとめ） | 4 日　ポスターセッション<br>25 日　ふりかえり | |
| 10月 | ８日　ポートフォリオ作成２<br>15 日　関西フィールドワーク ガイダンス<br>**6 日～20 日　SG 海外フィールドワーク** | 2 日　秋季アクションへの注入 with カタリバ<br>16 日　探究活動 | |
| 11月 | ５日　関西フィールドワーク事前準備２<br>12 日　関西フィールドワーク事前準備３<br>26 日　関西フィールドワーク事前準備４<br>29 日　関西フィールドワーク（研修旅行期間） | 6 日　中間発表会の準備<br>20 日　中間発表会の準備 | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 12月 | 10日　関西フィールドワーク<br>報告書作成 | 4日　クラス別中間発表会<br>11日　クラス代表中間発表会<br>20日～22日 関東フィールドワーク、SGH全国フォーラム参加 | |
| 1月 | 14日 ＳＧ課題研究Ⅰ発表会準備１<br>ポートフォリオ作成<br>21日 ＳＧ課題研究Ⅰ発表会準備２ | 15日　一年間のふりかえり with カタリバ | |
| 2月 | ４日　ＳＧ課題研究Ⅰテーマ別発表会<br>17日　ＩＬＣ講演会<br>18日　ＳＧ課題研究Ⅰ全体発表会 | 5日　ポスターセッションの準備、次年度の内容に関するガイダンス<br>16日 マイプロアワード岩手大会<br>19日 ILC成果交流会主催<br>27日 課題研究発表会 | |
| 3月 | | 7日 東北地区SGHフォーラム（中止）<br>22-24日　SGH甲子園参加（中止） | |

※対象生徒数　１学年：７クラス284名　２学年：６クラス240名　３学年：７クラス279名
（表中に人数の特記がない場合、上記の学年毎生徒数全員を対象としたものである。）

□成果普及のための取り組み

・成果発表

(ｱ)課題研究発表会（各学年）

(ｲ)SGH・SSH校との合同発表会

世界最先端の素粒子物理学の実験施設であるILC（国際リニアコライダー）の誘致は岩手県が掲げる県政課題の一つであり、その実現に向け、８つの県立高校（内SSH２校、SGH１校）をモデル校に指定し、各校毎に特色ある取組を促すことで若年層における機運の醸成と、国際的なプロジェクトの担い手の育成に努めてきた。

モデル校指定事業の２年目を迎えた今年度、指定校の一つであった本校が主管となり、岩手県科学ILC推進室と連携して、指定校の生徒が一堂に会し、取組の成果と課題を共有する成果交流会を実施した。ILCというテーマと対象を限定した形ではあるが、複数のSGH校およびSSH校が、取組の成果を指定校以外の学校との間で共有し合う機会を設けることができた。

指定終了後も、今回の経験を土台として、より大規模かつ持続的な、探究的学習を行っている高校生同士の成果交流の場の形成に努めていきたい。

(ｳ)東北地区SGH課題研究発表フォーラム（開催中止）

(ｴ)岩手県教育研究発表会での教員向け発表

「盛岡一高SGH指定５年間の歩み」～その成果と課題、そしてポストSGHに向けて～

というテーマで発表した。総合的な探究の時間についてどのように取り組むのか、一つのモデルを県内の教員に対して提示した。

(ｵ)行政機関との意見交換

(ｶ)マイプロジェクトアワードでの発表等

7　目標の進捗状況、成果、評価

□目標設定シートに基づく事業評価

「目標設定シート」における調査項目に関連する事項について、全校を対象とした意識調査を 12 月に実施した。さらに技能別の英語能力の推移については全校受検を開始した GTEC for STUDENT を指標としている。本項では特に目標設定シートの調査項目に関する経年変化について述べる。

| 評価項目 | H26 | H27 | H28 | H29 | H30 | R1 | 到達目標 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （凡例） | 全校 840 名中 | 上段＝ＳＧＨ対象生徒≒760 名中 | | | | | |
| | | 下段＝ＳＧＨ対象外生徒≒80 名中 | | | | | |
| (1)自主的に社会貢献や自己研鑽に取り組む生徒数 | 82 人 | 209 人 | 210 人 | 263 人 | 322 人 | 366 人 | 152 人 |
| | | 30 人 | 26 人 | 30 人 | 24 人 | 29 人 | 8 人 |
| (2)自主的に留学または海外研修に行く生徒数 | 22 人 | 40 人 | 36 人 | 25 人 | 45 人 | 40 人 | 30 人 |
| | | 6 人 | 6 人 | 5 人 | 6 人 | 4 人 | 5 人 |
| (3)将来留学をしたり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合 | 52% | 54% | 47% | 46% | 49% | 53% | 70 人 |
| | | 67% | 51% | 42% | 55% | 59% | 60 人 |
| (4)公的機関から表彰された生徒数、グローバルな社会またはビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数 | 13 人 | 43 人 | 50 人 | 103 人 | 68 人 | 64 人 | 15 人 |
| | | 8 人 | 7 人 | 16 人 | 5 人 | 3 人 | 5 人 |
| (5)卒業時における生徒の４技能の総合的な英語力として CEFRB1～B2 レベルの生徒の割合 | 61% | 63% | 16% | 12% | 12% | 60.8% | 70% |
| | | 66% | 25% | 25% | 25% | 88.9% | 65% |
| (6)課題解決のための探究的な学習を好む生徒の割合 | 53% | 68% | 68% | 70% | 71% | 77% | 70% |
| | | 89% | 87% | 85% | 85% | 87% | 55% |
| (7)課題研究に関する国外の研修参加者数 | 10 人 | 10 人 | 10 人 | 10 人 | 12 人 | 29 人 | 20 人 |
| (8)課題研究に関する国内の研修参加者数 | 320 人 | 561 人 | 563 人 | 559 人 | 565 人 | 564 人 | 560 人 |
| (9)課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数 | 0 校 | 1 校 | 6 校 | 9 校 | 4 校 | 3 校 | 3 校 |
| (10)課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ人数 | 8 人 | 17 人 | 55 人 | 36 人 | 98 人 | 28 人 | 32 人 |
| (11)課題研究に関して企業または国際機関等の外部人材が参画した延べ人数 | 3 人 | 5 人 | 92 人 | 265 人 | 421 人 | 144 人 | 6 人 |
| (12)グローバルな社会またはビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数 | 29 人 | 39 人 | 70 人 | 72 人 | 45 人 | 40 人 | 39 人 |
| (13)帰国・外国人生徒の受入れ者数（県内留学生を含む） | 3 人 | 9 人 | 2 人 | 7 人 | 12 人 | 10 人 | 14 人 |
| (14)先進校としての研究発表回数 | 2 回 | 3 回 | 6 回 | 9 回 | 13 回 | 15 回 | 5 回 |
| (15)外国語によるホームページの整備状況 | 未整備 | 一部整備 | 一部整備 | 整備済 | 整備済 | 整備済 | 整備済 |
| (16)国際的素養を高めるための講演会の実施回数 | 2 回 | 5 回 | 7 回 | 8 回 | 15 回 | 10 回 | 5 回 |

(1)自主的に社会貢献や自己研鑽に取り組む生徒数

５年続けて好ましい回答が増えてきている。全体に対しグローバル課題解決のためのアクションを促した結果、課題研究を通して主体的な態度が身につくとともに、地域に貢献しているという自己肯定感も増したと考える。「利他性」を研究開発の柱に掲げる本校にとって、何より好ましい成果の一つである。

(2)自主的に留学または海外研修に行く生徒数

３年連続で、高校卒業後台湾の大学へ進学する生徒がみられた。また、高校在学中に海外を体験したいという思いの生徒が多く、各種の海外派遣事業に積極的に挑戦した。

(3)将来留学をしたり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合

指定期間を通じて高い数字を示している。実際に在学中に留学する生徒は増えてきている。

(4)公的機関から表彰された生徒数、グローバルな社会またはビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数

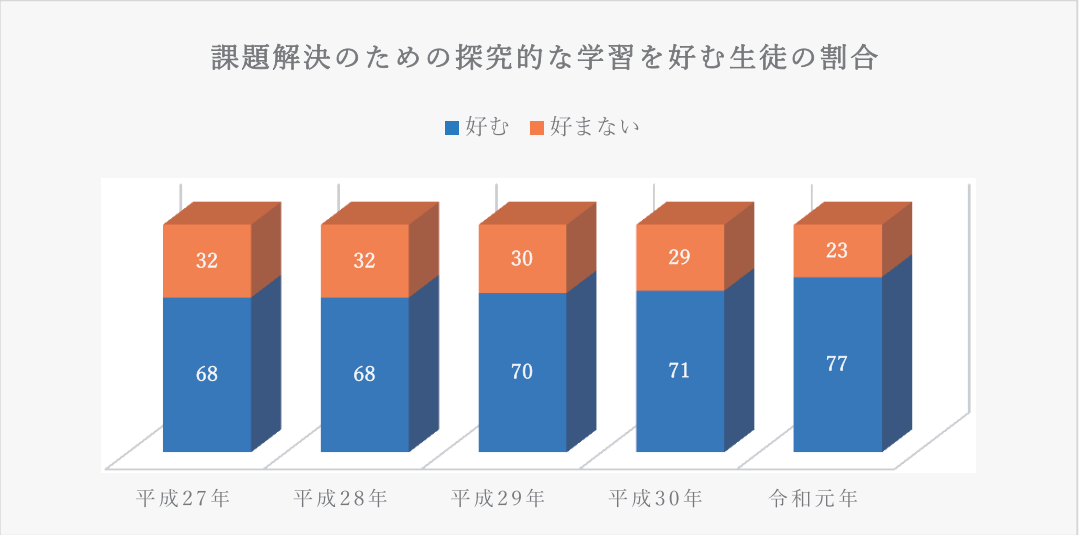
目標値の妥当性については検討の余地があるが、目標値は大きく超えている。SGH の成果を活用した大会にも、昨年同様積極的にエントリーしている。

(5)卒業時における生徒の４技能の総合的な英語力として、CEFRB1～B2 レベルの生徒の割合

昨年度までベネッセが示していたGTECとCEFRの換算表の妥当性に、これまで疑問を抱いていたが、大学入試への外部検定試験導入の一連の流れの中で、ベネッセがその換算表を見直した結果である。一見大幅に伸長したようであるが、実際は例年並みである。

(6)課題解決のための探究的な学習を好む生徒の割合

本校ではSGHの課題研究に取り組みながら、探究活動を好む意識が生徒の間でも定着してきている。また、研究成果を外部で発表することにより、充実感や達成感を得る生徒が増えてきた。５年間一貫してその割合を上げており、プログラムの充実度と関係が深いと考えられる。




(7)課題研究に関する国外の研修参加者数

研修地をボストンから台湾へ変更し２年目となる。12 名の生徒が参加した。また本校独自の海外研修事業である「白堊の翼」においても、10 名の生徒が事前の課題研究に取り組んだ（派遣事業は中止）。岩手県主催の海外派遣事業に参加した生徒も複数おり、海外に目を向ける生徒は着実に増えている。

(8)課題研究に関する国内の研修参加者数

１・２年生全員が一度は国内研修（フィールドワークを含む）に参加することを念頭に置き目標値を設定し、計画どおりに実施できている。本校の研修スタイルとして定着した。独自に県内外のフィールドワーク先に複数回赴く研究グループもかなり増えてきており、延べ人数はかなりの増加が見られる。

(9)課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数

本項目では、今年度の海外フィールドワークで実際に訪問し、生徒達がプレゼンテーションと議論及び交流を行なった台北の政治大学、政治大学附属高級中学、慈済大学附属高級中学の３機関を計上した。現地高校生及び大学生と、共通のグローバル課題をディスカッションした他、帰国後も情報交換するなど、一過性ではない継続的な関係を構築できた。

(10)課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ人数

前年度に比べ大幅に減少した。今年度は生徒と岩手大学の学生及び留学生との交流の機会はあったものの、生徒の研究テーマの関係から、大学の教員の指導を受けるというよりは、地域資源との連携が強くなったためである。

(11)課題研究に関して企業または国際機関等の外部人材が参画した延べ人数

今年度も、課題研究において企業や公的機関等、外部の方に関わっていただいた。３年目となった盛岡市との共同プログラム、夏季休業中と関西フィールドワークで直接出向いて調査を行った際に応対していただいた数値、及び 2 年生のアクション遂行上の提携先を中心に計上している。

(12)グローバルな社会またはビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数

今年度も目標を上回っている。マイプロジェクトアワード 2019 には、2 年生の課題研究の成果発表の場として多くの生徒が応募した。また、SGH フォーラム、SGH 甲子園、東北地区 SGH 課題研究発表フォーラム、英語ディベート大会、科学の甲子園などに応募した。

(13)帰国・外国人生徒の受入れ者数（県内留学生を含む）

留学生の受け入れをし、今以上に増やす必要がある。特に台湾の高校生との関係では相互交流の観点からも積極的に増やす必要がある。グローバルに開かれた学校環境整備に努めたい。

(14)先進校としての研究発表回数

１，２学年の文化祭、課題研究発表会、３年生の英語プレゼンテーションコンテスト、また SGH フォーラム、東北地区 SGH 課題研究発表フォーラム、ILC 推進校成果交流会など計 15 回計上した（主なものに限る）。また、高校をはじめとする県内教育機関を対象に、岩手県教育研究会において発表し、成果の普及と共有をはかった。

(15)外国語によるホームページの整備状況

昨年度から SG 課題研究の内容だけでなく英語版の学校ホームページを整備した。今後も生徒の課題研究の成果について英語を用いて公開し、国際的な発信力を一層高めていく予定である。

(16)国際的素養を高めるための講演会等の実施回数

学年単位で行った校内講演会として以下の 10 回を計上した。この他コースやグループ単位でも専門家からまとまった時間の講義や指導を受けている。

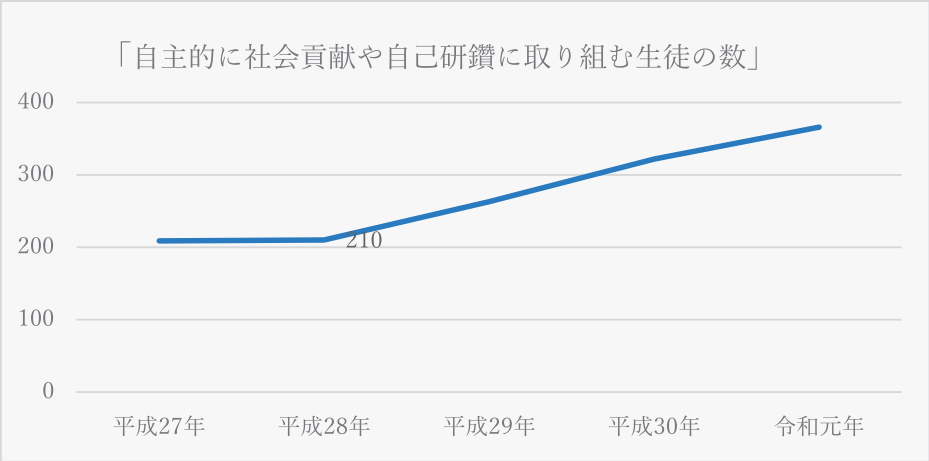
１年生：達増 拓也氏（岩手県知事・元外交官）　出野 紀子氏（東北芸術工科大学講師）
　　宇佐美 徳子（高エネルギー加速器研究所）
２年生：山崎 友子氏（岩手大学名誉教授）　廣田 淳氏（盛岡商工会議所参与）
　　渡邊 洸氏（NPO 法人カタリバ）　鈴木 胡美氏（NPO 法人カタリバ）
　　浦崎 太郎氏（大正大学教授）　村尾隆介氏（スターブランド株式会社）
３年生：村尾隆介氏（スターブランド株式会社）

□中間評価において指摘を受けた事項についての改善、対応状況

【中間評価の結果より】

・「これまでの努力を継続することによって、研究開発のねらいの達成がおおむね可能と判断されるものの、併せて取組改善の努力も求められる。」
①探究のプロセスにのっとって事業が展開されており、習得したことを自分の生き方や社会に生かそうとしている姿勢は評価できる。
②構想の実現のため、生徒に身に付けさせるべき資質・能力や卒業時点での生徒像を明確にする視点が弱いため、改善が望まれる。
③また、学校体制としては整えられているが、個々の教員のさらなる連携強化を期待したい。

【改善・対応状況】
②に関して
中間評価を受ける前半３年間の実践では、課題研究の内容が、アクションプランの提示や、政策提言までは到達するものの、それを具体的な行動に移すことができない探究班が少なからず見られた。そこで、４年目、５年目は本校の研究開発構想の目標の一つである**「主体的に課題解決に向けた実践を行う姿勢」**を、生徒に身につけさせたい資質と考え、そのことを意識したアクションプランの実践を課題研究の柱に据えた。
目標設定シートに基づく事業評価でも「自主的に社会貢献や自己研鑽に取り組む生徒数」が４年目、５年目と確実に増えている。社会課題解決のためのアクションを促した結果、課題研究を通して主体的な態度が身につくとともに、地域に貢献しているという自己肯定感も増したと考える。実際の多くの探究班が社会に飛び出し、高校生である自分たちができる実践を通して、社会とのつながりを実感できた。




③に関して
昨年度の反省にも、「課題研究Ⅰ・Ⅱは外部の協力者も増え、年々研究内容も充実しているものの、その分外部での発表の場も増え、その指導に当たっては担当者の負担が増す一方である。指定期間終了も迫っており、今までのシステムでは対応しきれなくなる。」という意見が上がっている。
担当者だけが負担が大きくなることを改善するため、今年度は二つの取組を行なった。一つは、年度初め目の５月に職員研修として大正大学の浦崎太郎氏を招聘し、探究的な学習についての考え方についての講演会を実施したこと。新しい学力観にそった指導としての探究的な学習の必要性を認識するとともに、全職員で関わっていかなければならないということを共有できた。
もう一つは、課題研究Ⅱにおいて学年団の教員がメンターとして、今まで以上に生徒と関わる仕組みを構築したことである。学年担当者の企画のもと、最前線は学年団の教員という形で、年間通

して課題研究を行なえたことは、次年度からの総合的な探究の時間においても、職員の連携という点で一つの方向性を示すことができた。

7　５年間の研究開発を終えて

（１）教育課程の研究開発の状況について

□教育課程表や時間割上の工夫

本校の SG 課題研究は教育課程を変更することなく総合的な学習の時間（総合的な探究の時間）で実施している。SGH 関連の学校設定教科・科目はないが、1 年時で行う「コミュニケーション英語 I」を「グローバルコミュニケーション英語 I」、「現代社会」を「グローバル現代社会」と称して取り組んでいる。「グローバルコミュニケーション英語 I」では中学校で獲得した英語の基礎知識と高等学校で新たに学ぶ文法表現等を四つの領域にまたがった言語活動において活用することに力点を置いた指導法の開発、「グローバル現代社会」ではグローバル社会の諸問題を課題探究型の学習にするための、教材と指導法の開発をはかっている。

□海外研修等について

平成 27 年度から 29 年度まで、ボストンをフィールドに 3 回の海外研修を実施した。国際的な機関等との定常的な連携については一定の成果を得てきたところであるが、今後はより生徒個々が取り組む課題研究と連動した海外における現地調査等を重視するため、平成 30、令和元年度は日本と同様のグローバル課題を多く抱えるアジア圏の台湾に研修先を変更し実施した。SGH 指定終了後も継続的に海外研修を実施できる環境を模索することも変更理由の一つである。

(ｱ)台湾研修が事業計画に及ぼす影響及び効果

本校が設定した課題研究の 6 つのカテゴリーに関連した岩手県が抱えるグローバル課題についての研究は、台北の政治大学との連携により、ボストン以上に深めていくことが可能である。また、現地におけるフィールドワークや現地高校生との共通のグローバル課題を通じたディスカッション等により、主体的、対話的で深い学びが可能となるものと捉えている。

(ｲ)研修目的

1)生徒個々の課題研究の深化と持続可能な交流

岩手県が抱えるグローバル課題についての研究を、台北の政治大学との連携により深める。(大学の教授による指導を受ける)。生徒個々が取り組む課題研究と連動した海外における現地調査を実施(台湾の留学生と協同でフィールドワークを行なう)

2)一過性の交流ではなく一生続く関係の構築

現地高校生との共通のグローバル課題を通じたディスカッション(慈済大学附属高級中学、政治大学附属高級中学との交流)

(ｳ)研修成果

実際の台湾フィールドワークでは事前にアポイントメントを取る調査は難しいということで、街頭でのアンケート調査が中心となったが、生徒の主体的な取組と留学生の協力により、実現できた。海外における現地調査を研究に反映させるという目的は達成できた。

花蓮市の慈済大学附属高級中学校との交流は、グローバル課題を通じたディスカッションなど交流プログラムも充実したものであり、1 日というわずかな時間でありながら、別れ際では涙を流す生徒が出るほど、密度の濃い交流ができた。海外の協力校との継続的な関係構築についても、成果があった。今度は受け入れ側として、国際交流に積極的にかかわる必要があると考えている。

参加した生徒が、積極的に研修に取り組み、課題研究の内容、プレゼンにおいても成果を挙げ、生徒個々人が大きく成長したことが何よりの成果である。

（２）高大接続の状況について

・SG 課題研究 II での指導

2 年次で行なう SG 課題研究 II は研究開発構想「論理的思考力、問題解決能力を育成する指導プログラムの開発」の中核となるものであり、岩手県が抱える様々なグローバル課題を発見し、多角的な視座からその原因と解決策を追究するものである。大学の教員を中心に、外部の専門機関と密に連携して課題研究に取り組んできた。設定した 6 コースの外部指導者は下記のとおりである。

(ⅰ) 21 世紀型地方都市の探究　指導者: 南正昭氏（岩手大学）

(ⅱ) ローカルな魅力を活かしたグローバル観光モデルの探究　指導者: 山本清龍氏（岩手大学）→廣田淳（盛岡市商工会議所）

(ⅲ) “Made in Iwate”ブランドの確立へ向けた探究　指導者: 吉川博史氏（ジェトロ盛岡）

(ⅳ) グローバルスタンダード教育モデルの探究　指導者: 山崎友子氏（岩手大学）

(ⅴ)グローバルな知の拠点の創造へ向けた探究　指導者: 成田晋也氏（岩手大学）

(ⅵ)世界を支える地域医療の探究　指導者: 齋野朝幸氏（岩手医科大学）

・SG 課題研究 I の関西フィールドワークにおいて大阪大学の小野田正利氏を訪問し、働き方改革についての指導を仰いだ。

・台湾でのフィールドワークにおいて台北市の国立政治大学の先生からの指導を仰いだ。

・大学の単位履修制度の設置は実施していない。

（３）生徒の変化について

□生徒の意識調査から

「構想の実現のため、生徒に身に付けさせるべき資質・能力や卒業時点での生徒像を明確にする視点が弱い」という中間評価の指摘を受け、指定４年目（H30）は**「主体的に課題解決に向けた実践を行う姿勢」**を、生徒に身につけさせたい資質と定義し、そのことを意識したアクションプランの実践を課題研究の柱に据えた。本校の課題研究のメインである SG 課題研究Ⅱの取組を通して生徒の能力、資質にいかなる質的変容が生じたか、毎年同じ調査項目で実施しているアウトプットに関する意識調査を通して行なった。平成 30 年の 2 年生（現 3 年生）が平成 30 年度に回答した結果を、平成 29 年度（1 年次）に同一の調査項目で行った際の回答状況と比較したものを掲げる。

| 質問項目 | 回答 | H29 | **H30** |
|---|---|---|---|
| 1　自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組んだか | Yes | ３３％ | ６１％ |
| | No | ６７％ | ３９％ |
| 2　自主的に留学や海外研修を行ったか | Yes | ４％ | ９％ |
| | No | ９６％ | ９１％ |
| 3　将来留学したり国際的な仕事に就きたいか | Yes | ４２％ | ５１％ |
| | No | ５８％ | ４９％ |
| 4　公的機関から表彰されたか。またはグローバルな社会課題・ビジネス課題に関する大会で入賞したか | Yes | ９％ | １２％ |
| | No | ９１％ | ８８％ |
| 5　探究的な学習活動は好きか | Yes | ６９％ | ７３％ |
| | No | ３１％ | ２７％ |

| | | | |
|---|---|---|---|
| ６　課題研究を通して自分の進路はより明確になったか | Yes | ３７％ | ２８％ |
| | No | ６３％ | ７２％ |
| ７　課題研究を通して国外の機関や専門家と連携したか | Yes | ０％ | ６％ |
| | No | １００％ | ９４％ |
| ８　グローバルな社会課題・ビジネス課題に関する大会に参加したか | Yes | ５％ | ５％ |
| | No | ９５％ | ９５％ |
| ９　高校卒業後、海外の大学へ留学・進学するか（予定を含む） | Yes | ５％ | １１％ |
| | No | ９５％ | ８９％ |

平成 29 年度と平成 30 年度の実践で大きく異なる点は視点の一層のグローバル化、そしてアクションの重視である。前者について、調査項目 2・3・7・9 でポイントがいずれも向上しているのはその所産であろう。ただし、7 について、現状は決して好ましい数字とはいえない。特に提携を開始した台湾の大学や高級中学を念頭に置き、希望すればすべての班がフランクに照会・連携できるような関係の構築を進めていく必要がある。

一方、後者のアクションの重視については、質問項目の 1 に如実にその影響が見て取れる。SG 課題研究Ⅱの取組が、多くの生徒たちの社会との関わりの端緒となったことは明白であり、かつ前年度以上に多くの生徒がそれを好意的に受け止めていることは何より好ましいことである(質問項目 5)。

ただし、その取組が生徒の進路意識に必ずしも結びついていないことは、残された課題の中で最も大きいものの一つである。質問項目 6 についていえば、たとえば、取組を通して新たな分野の知見を得た結果、取組以前想定していた進路との間で迷いが生じることとなった場合、生徒の進路意識に正の方向で影響を与えているのであろうが、回答としては否定的な「No」となる可能性もあることから、進路意識への影響の有無については、別な問いを立てて捕捉する必要がある。質問項目 4・8 のように、自分たちの取組が持つ価値を外に向けて問いかけていく中で、彼らの取組に対する認識をより社会的にプラクティカルなレベルへと昇華させていくことができるのではないかと考える。

□教員から見た生徒の変容

SGH に関する教職員アンケート（令和 2 年 1 月実施、職員 51 人回答）

| 質問事項 | 大いに | ある程度 | それほど | 全く | 肯定的 | 否定的 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ＳＧＨの様々な取組は、生徒の「国際的な対話力」向上に寄与したと思いますか。 | 14 人 | 30 人 | 6 人 | 1 名 | 86.3% | 13.7% |
| ＳＧＨの様々な取組は、生徒の「課題解決力」向上に寄与したと思いますか。 | 22 人 | 28 人 | 0 人 | 1 人 | 98.0% | 2.0% |
| ＳＧＨの様々な取組は、生徒の「情報発信力」向上に寄与したと思いますか。 | 39 人 | 11 人 | 1 人 | 0 人 | 98.0% | 2.0% |
| ＳＧＨの様々な取組は、生徒の学習意欲の向上に寄与したと思いますか。 | 9 人 | 30 人 | 11 人 | 1 人 | 76.5% | 23.5% |
| ＳＧＨの様々な取組は、生徒の進路決定に対して寄与したと思いますか。 | 5 人 | 31 人 | 13 人 | 2 人 | 70.6% | 29.4% |

(1)令和 2 年 1 月に実施した教職員アンケート（全員が回答）では、本校が SGH 事業を通じて生徒に身に付けさせたい３つの力である「国際的な対話力」、「課題解決力」、「情報発信力」の３項目に関して、いずれの項目についてもほとんどの教員が、SGH 事業がそれぞれの力の向上に寄与していると考えていることが分かる。
(2)学習意欲の向上及び進路決定に対する寄与については、否定的な見解を持つ教員が２割～３割程度おり、SGH 事業での学びが教科の学びや学びに向かう意欲につながる工夫や、進路決定に対する視点がさらに求められるところである。
（以下，自由記述欄から抜粋）
・発信力がついていると思う。
・生徒同士の議論が活発になったと思う。
・生徒の取り組み方に温度差があることが気になる。
・一人でも自分の興味で掘り下げる姿勢の生徒が少なからずいて、頼もしく感じた。
・これまでより確実に視野が広がっている。地域に転がっている身近な問題に目を向けるなど、SG が大きなきっかけになっていたように感じる。
・SGH によって生徒が既に持っていた興味、関心が顕在化したのかもしれないし、生徒が取組によって獲得したのかもしれず、SGH だからと言い切るのは難しい。
・社会問題（地方都市の抱える課題）に関心を持つようになっている。

（４）教師の変化について

SGH に関する教職員アンケート（令和 2 年 1 月実施、職員 51 人回答）

| 質問事項 | 大いに | ある程度 | それほど | 全く | 肯定的 | 否定的 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ＳＧＨの様々な取組は、本校の教育活動に役立っていると思いますか。 | 20 人 | 30 人 | 0 人 | 1 名 | 98.0% | 2.0% |
| ＳＧＨの様々な取組は、自分自身の授業改善につながっていますか。 | 3 人 | 30 人 | 16 人 | 1 人 | 66.0% | 33.0% |
| ＳＧＨの様々な取組にかかわることは、教員としてのモチベーションの高まりにつながっていますか。 | 3 人 | 31 人 | 16 人 | 1 人 | 64.7% | 35.3% |
| 質問事項 | 肯定感 | 変化なし | 否定感 | | 肯定的 | 否定的 |
| ＳＧＨの様々な取組に初めて関わった時点と現在で、ＳＧＨ事業に対する意識に変化はありましたか。 | 29 人 | 21 人 | 0 人 | | 100%<br>＊変化なしを除く | 0%<br>＊変化なしを除く |

教職員の意識について考察する時、SGH 事業が本校の教育活動に役立っているというのは全員が一致した見解である。しかし、それが教職員にどのような影響を与えているかについては、その意識はさまざまある。ただし、教科の SGH 化を目指、生徒に身に付けさせたい資質・能力を意識した授業改善が進む中、7 割近い教職員が自身の授業改善に多少なりともつながっていると回答していることは、意義あることと考える。

それまで関わったことのなかった SGH 事業に実際に関わってみて、変化なしの 42%回答を除けば、全員が、肯定感が高まったと回答しており、否定感を持つ教員は一人もいなかった。これは多くの教職員が、SGH 事業での生徒の変容を目の当たりにして、そこに肯定的な意義を見いだした結果であると捉える。

（５）学校における他の要素の変化について（授業、保護者等）

・各教科の授業の変化

2 学年におけるコミュニケーション英語Ⅱ、地歴公民科の授業においてもいわゆる「授業の SGH 化」は着実に進展している。

コミュニケーション英語Ⅱにおいては、ディベートやプレゼンテーションなどの活動が一年を通して散りばめられており、その成果は、英語部の英語ディベート県大会優勝や、2 年連続の全国大会出場という形で如実に現れている。

一方、地歴公民科では、昨年度、岩手大学の留学生をゲストスピーカーとした特別授業を、2 学年の全てのクラスを対象に実施した。世界史の枠内で、留学生の出身国の歴史や地理、現状についてプレゼンテーションを行っていただいた後に、質疑応答を行うというもの。この授業が呼び水となり、SG 課題研究におけるアクションにもお手伝いいただくなど、継続的な交流へとつながる一面も見られた。さらに日本史 B の枠内で人文科学的フィールドワークの手法を習得するため、盛岡市内に所在する文化財の調査を行い、得られた情報をポスターにまとめ、ポスターセッションを行い、共有・深化させるという新しい実践も試みられた。その成果については、2019 年 2 月 8 日に行われた岩手県教育研究発表会において報告を行った。地理 A の授業では、地域のハザードマップを検証し、地域の災害についての認識を深め、災害時における行動の在り方について、プレゼンした。各教科においても、課題解決的な探究型の学習が根付いて来ている。

また数学の授業では現代社会の授業とコラボし、年度ごとの国民所得のデータを片対数方眼紙にプロットさせ、オイルショック以降で成長の傾きが鈍ることを認識させたうえで、指数関数、対数関数を理解させる授業実践も行なわれた。

・令和元年 6 月の中高懇談会より

中学校の先生方から、「SGH の説明をいただき、その授業も見たいと思った。」や「探究活動を好む生徒が多いという点も、高校選択のアドバイスをする際に活用できると感じた。」など好意的な意見をいただいた。SGH の取り組みは、確実に本校教育活動の一つとして定着してきている。

（６）課題や問題点について

SGH に関する教職員アンケート（令和 2 年 1 月実施、職員 51 人回答）

| 質問事項 | 次第に構築 | 変化なし | 次第に衰退 | わからない | 肯定的 | 否定的 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ＳＧＨ事業が年を重ねていく中で、協力体制に変化はありましたか。 | 27 人 | 10 人 | 1 人 | 13 名 | 96.4% | 3.7% |
| 質問事項 | 是非継続 | 継続も可 | 継続に疑問 | やめるべき | 肯定的 | 否定的 |
| ＳＧＨに近い取り組みを、今後も継続していくべきと考えますか。 | 17 人 | 32 人 | 2 人 | 0 人 | 96.1% | 3.9% |

教職員アンケートからは、前述のとおり、SGH 事業が本校の生徒にとって大変意義ある取組であるという点での一致は見て取れるし、同様の取組を今後も継続していくべきかについても、ほとんどの教職員が継続すべきと考えている。しかし、それに疑問を持つ教職員も若干存在する。その最大の理由は担当教員の負担が大きすぎるという点である。やはり、中間評価において指摘を受けた事項についての改善が今後も課題である。前述したとおり、いろいろな取組を行い改善に努めてきたが、職員アンケート自由記述には以下の指摘があった。

・あれもこれも学校がやるでは無理がある。継続するには専門の担当者が必要と思う。

・サポートしてくれる外部の方とのつながりを増すと同時に、「連携しやすさ」も必要と感じる。

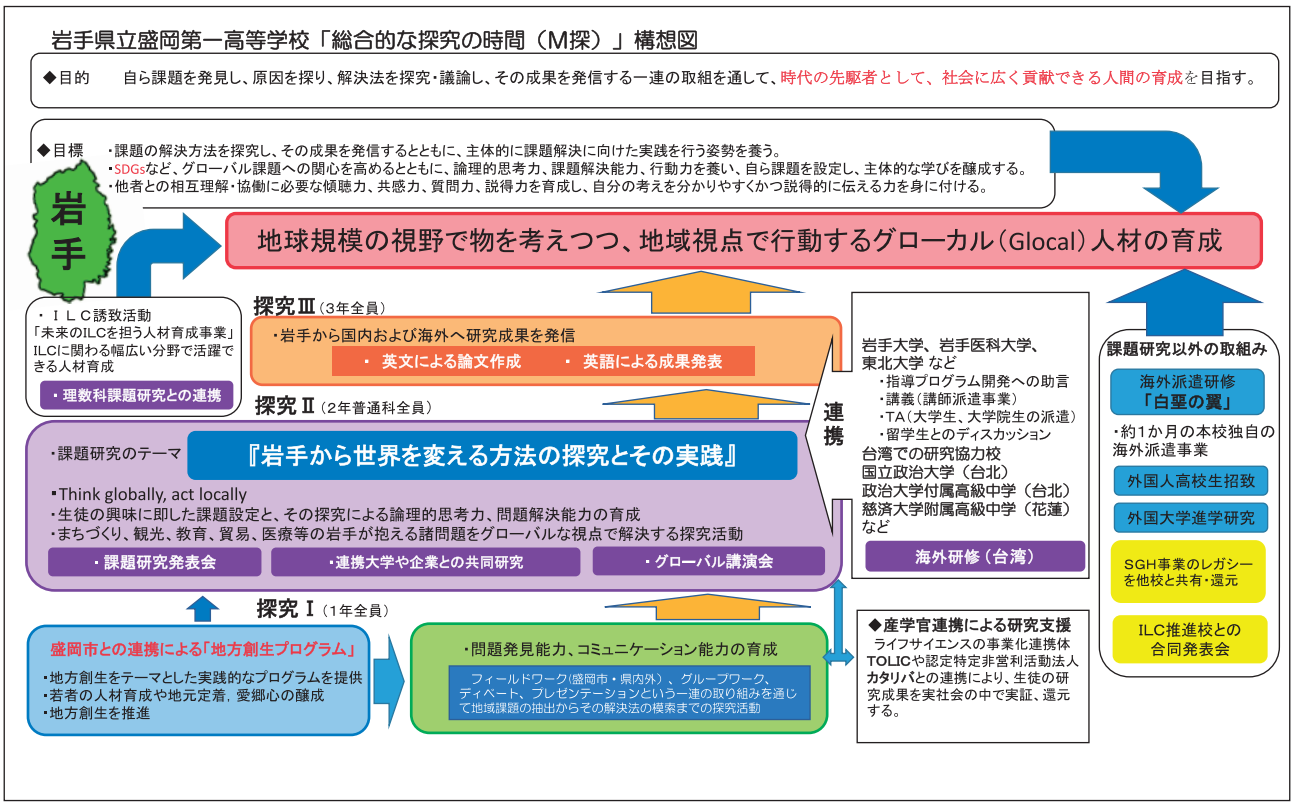
・もっと積極的に取り組んでいくためには、もう少し環境づくりが必要。取り組むことで教科の指導

力ＵＰと生徒たちの学力向上が体感できるのならベストなのだが。
・担当者個人の裁量が大きすぎると感じている。もっと周囲を巻き込んで取り組んだほうが学校全体としていい方向へ動くと思う。
・担当者の負担が非常にあるので、現状は能力のある先生が各々普通にやっているが、私だと火が吹く。
・全職員でやるという意識が希薄。課員にまかせっきりである。
・全体ビジョン（最終モデル）が明示されると取り組みやすいのではと感じた。

このことからも取り組むべく課題は以下の二点である。

**①個々の教員間の連携強化**
**②生徒に身に付けさせたい資質・能力（3 年間見通したビジョン）の職員間での共有**

この問題を次年度から始まる新たな探究的な学習では解決すべく、まずは全職員が共有できるよう探究の構造図を作成した。




令和 2 年度は、年度始めの職員会議で探究活動のゴールを共有した上で、新しくスタートを切りたい。

（7）今後の持続可能性について

限られた人的・時間的・予算的リソースの枠内でよりバランスの取れた能力の伸張を図り得るプログラムを構築することで、持続可能な本校オリジナルの探究学習モデルの完成を目指していきたい。3 年間を見通した課題研究、海外フィールドワークについては関係機関との連携により、実施の目途がたった。

盛岡市との連携を機に、地域の教育資源の発掘は着実に進展している。また、ライフサイエンスの事業化連携体 TOLIC のように、世界展開を視野に入れている組織や機関との連携を深めていくことによ

り、生徒たちのアクションを一層グローバルなものへと高めていくことができるものと考える。さらに認定特定非営利活動法人カタリバとの連携により、生徒の研究成果を実社会の中で実証、還元する仕組みができつつある。

一方、昨年度から開始された台湾フィールドワークによって生まれた政治大学や同大学附属高級中学および花蓮市の慈済大学附属高級中学など台湾の組織・機関との連携を恒常的なものにすべく、本校同窓会の支援をうけて継続していくことが決まった。また、盛岡市と台湾花蓮市が友好都市協定を締結したことから、これからもこの関係は発展していけると考えられる。

SGH 事業の指定終了に伴い、県教委の管理機関としての関わりは終了するものの、要請に応じて訪問指導や研修、講義等による支援を行うことになる。

課題研究を通して、国内外の多様な機関と協力、連携が進んでおり、また地域の既存の教育資源も大いに活用できた。この関係は SGH 指定終了後も、本校の探究的な学習において大いに役立っていくと思われる。

【担当者】

| | | | |
|---|---|---|---|
| 担当課 | ＳＧＨ推進課 | ＴＥＬ | ０１９－６２３－４４９１ |
| 氏　名 | 佐藤　幸久 | ＦＡＸ | ０１９－６５４－４２２７ |
| 職　名 | 教諭 | e-mail | ptf2-yukihisa-sato@iwate-ed.jp |

## Ⅱ　SG課題研究Ⅰ

### １　はじめに

今年度の活動は、スーパーグローバルハイスクールに指定され5年間積み上げてきた内容を踏襲した。

大きな柱は２つ。「盛岡市との連携による地方創生プログラム」と「関西フィールドワーク」。２つの活動後に各班がアクションプランを提案、そして実践に繋げる事をゴールとした。

昨年度と同様に、課題研究に臨む際、アクションをふんだんに盛り込んだ形で*PDCA サイクルを何度も回せるように、今年度のうちから「アクションの重要性」と「アクションプランの具体化」に関する生徒の意識を高める点、そして効果的に生徒の活動を記録できる「ポートフォリオの作成」も行った。

*PDCA サイクル: Plan（計画）→Do（実行）→Check（評価）→Action（改善）の４段階を繰り返すことによって、業務を継続的に改善する手法。

### ２　活動報告

SG 課題研究Ⅰは１学年が総合的な学習の時間（以下、「総合学習」）を活用して、１年間をとおして取り組む探究的学習である。３年間にわたり展開する SG 課題研究の導入に当たるＳＧ課題研究Ⅰでは、とりわけ「課題の発見」を重視し、本校が所在する岩手県というローカルな視座からグローバル課題をまなざし、それに関わる社会人と交わることを通じ、課題発見から調査、そして解決策のプレゼンテーションという一連の探究のメソッドを習得することを目的としている。

#### （１）　地方創生プログラム

［フェイズ 1］　令和元年５月 23 日

地方創生をテーマとした探究学習への導入として、基調講演とトークセッションを行い、今後 1 年間かけて展開する探究学習のレディネス形成をはかった。

まずコミュニティ・デザインを専門とする東北芸術工科大学講師の出野紀子氏より、「新しい時代の高校生のちから」という基調講演をいただき、日本や地域が抱える課題に対して視点を深めるとともに、「地方創生」に取り組む高校生の具体的な実践事例をご紹介いただいた。

また、トークセッションでは出野先生がコーディネーターを務め、盛岡市都市戦略室の佐藤俊治さんをコメンテーターとしてお迎えし、昨年度、ＳＧ課題研究Ⅰ発表会およびＳＧ課題研究Ⅱ発表会で最優秀賞を受賞した班、盛岡市主催の地域人材育成講座に参加した先輩たちをパネラーとして迎え、「課題研究に取り組む意義」を意見交換した。

出野さんの円滑で建設的な進行のおかげで、1 年生の生徒達からも言葉足らずで拙いながら、視点の鋭い良い質問がたくさん生まれ、会場は大きな盛り上がりを見せた。盛岡市の抱える課題の一つを「自分事」として捉え、先輩方の発表は、その解決に向けて自分なりに行動していることへの誇りや主体性、積極性が感じられ、1 年生の生徒達にとって素晴らしいロールモデルとなった。

［フェイズ 2］　令和元年６月４日

続くフェイズ 2 では、盛岡市を拠点として「地方創生」に向けた様々な取組に実際に携わられている社会人の方々をゲストスピーカーとしてお迎えし、８つのテーマからなる分科会を開催した。人選や内容に係るコーディネイトは盛岡市によるものである。生徒は１人当たり２つのテーマを選びミニ講義を聴

講する。昨年度と同様、聴講したい内容を聴かせるのではなく、無自覚な関心を掘り起こしたいという意図から、機械的に各生徒にミニ講義をあてがった。

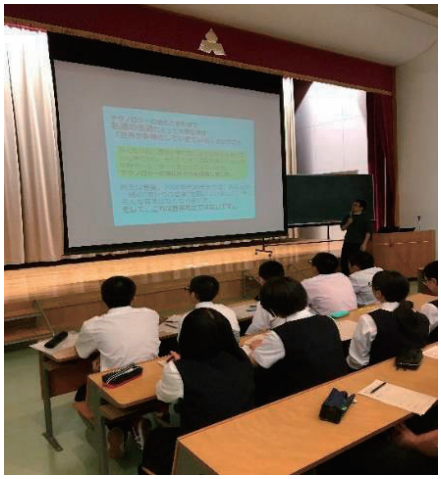
開講したテーマは以下のとおりである。

1　結婚・子育て支援
2　子どもの貧困対策
3　ワークライフバランス
4　仕事とキャリア形成
5　食と農の連携
6　盛岡ブランド・交流人口対策
7　都市機能の強化・地域教育
8　共生社会と国際化社会

分科会では、講師の方々の熱意のこもった講義のおかげで、生徒達は盛岡市が抱える課題を共有し、「高校生として自分にできることはないか」と主体的に考えるきっかけを得られた。

＜今年度ミニ講義を受け持っていただいた団体＞

・一般社団法人日本結婚支援協会
・NPO 法人いなほ
・NPO 法人インクルいわて
・NPO 法人フードバンクいわて
・ジョブカフェいわて
・藤村農園
・株式会社いわて若江農園
・もりおかワカものプロジェクト
・紺屋町かいわい町並み協議会
・岩手移住計画
・Sora Stars 株式会社
・フキデチョウ文庫
・ふるさとアンバサダーキッズ



［フェイズ 3］　令和元年６月 11 日

フェイズ 3 では各教室で、前回ミニ講義で学んだ内容を共有し、その後で班毎に夏季フィールドワークで取り扱いたいテーマを一つにしぼる話し合いを行った。

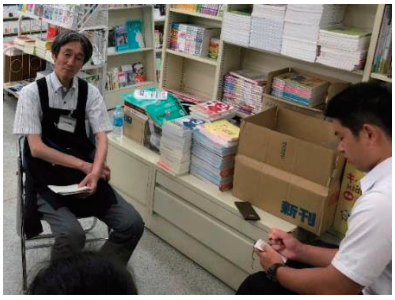
機械的にミニ講義を各自にあてがったため、この共有作業は盛り上がった。他の班員のために、ミニ講義の内容を紹介する生徒は責任をもって伝えなくてはならない。時折質問も出され、深い学びが生まれた。

［フェイズ 4］　夏季休業中

フェイズ2･3で取り扱った８つのテーマの中から、グループ毎に最も関心を持ったものを一つ抽出し、班毎に独自に設定した課題を解決すべく、夏季休業中にフィールドワークを行った。

過去 2 年間と同様にフィールドワークでは、基幹テーマとして「地域創生」を掲げたほか、調査先の斡旋と、内容の調整を盛岡市に担当していただいた。事前に先行研究調査として、自分達が選んだテーマ

について、昨年度のSG課題研究Ⅰで先輩達が研究した内容を読み、発展深化させたい項目を精選していたため、インタビュー活動は、内容の濃いものとなった。



＜夏季フィールドワーク訪問先＞

福田パン、サンフレッシュ都南、いわて若江農園、白龍、フレスキッシマ、株式会社悳PCM、M進本校、SoRa塾（SoRa café）、炉何煎、インクル子ども食堂、特定非営利法人フードバンク岩手、わらしゃん丼、盛岡ワカものプロジェクト、柳屋、拉麺厨房ゼロワン、食道園、ふじむら農園、東屋本店、IGRいわて銀河鉄道、イオン盛岡南店、マックスバリュ盛岡駅前北通店、結婚支援サポートセンターiサポ、ジョブカフェいわて、赤坂さんさ、anecco.、岩手×東京株式会社wakey、光源社、放課後児童クラブ「おべんとうばこ」、ふるさとアンバサダーキッズ、特定非営利活動法人未来図書館、白沢せんべい店、一般社団法人ふたば、おでんせ館、＜映画の力＞プロジェクト、岩鋳鉄器館、SoRa Stars株式会社、ホテル紫苑、さわや書店、盛岡生活文化研究室、LITERS、盛岡市役所観光交流課、盛岡市役所観光交流課、盛岡市保健所、盛岡市役所「まちの編集室」、東北農政局、岩手県農業研究センター園芸技術研究部果樹研究室

［地方創生プログラムのまとめ：中間まとめ発表会］

令和元年9月24日は、地方創生プログラムや夏季フィールドワークでお世話になった方々をお招きし、地方創生プログラムから夏季フィールドワークにわたるこれまでの取り組みを総括するため、「中間まとめ発表会」を行った。テーマ別に教室に分かれ、夏季フィールドワークの成果をまとめたポスターを用いてプレゼンテーションを行い、ゲストからは主に関西フィールドワークに向けた指導助言をいただいた。

報告した内容は、「夏季FWの概要」、「夏季FWで気付いたこと」、「関西FWの方針」の三点である。

ゲストのコメントによって、生徒達はこれまでの探究活動を批判的に振り返り、また関西フィールドワークに向けてより効果的、実践的な計画を練るための材料を得られた様子で、大きな学びの機会となった。

＜お招きしたゲスト＞

盛岡市都市戦略室　佐藤俊治さん、畠山高樹さん、子ども未来課企画　服部まゆみさん、藤原夏紀さん、ジョブカフェいわてキャリアカウンセラー　藤倉寛恵さん、盛岡市食と農の連携推進室　菊地知樹さん、盛岡市都市戦略室地域興し協力隊　中島航さん、ソラカフェ代表　山崎智樹さん

（２） 関西フィールドワーク

令和元年 11 月 28 日（木）から 12 月 4 日（月）にかけて、１学年が広島及び関西地区をフィールドとする研修旅行を実施した。2 年前から、これまで盛岡市と連携して取り組んできた「地方創生」をテーマとしたフィールドワークを、関西地方においても実施している。

事前学習として、生徒達は県内で行った夏季フィールドワークの成果と課題を踏まえ、先行研究に目を通した上で、適切な訪問先を検討し、調査受入の可否を打診した。多くの機関や事業所、専門家の方々に快くご協力いただき、充実したフィールドワークを遂行することができた。

大都市圏を数多く有する関西地方において、関連する事例について調査を行うことで、岩手県内における調査を通じて模索した地方創生に関わるアクションプランについて、より地方に寄り添った提言をする手がかりを得られたようだ。また、関西地方で先進的に行われているアクションプランについても知ることができ、生徒達はそれを地方に適合させた形で実践するアイディアも数多くいただいた。

＜関西フィールドワーク訪問先＞

ぐらんまーぶる、格致つどいの広場、じねんと市場、株式会社坂ノ途中、エヴァンタイユ、祇園抹茶 Café、こえどーなっつ、なごみ宿都和、株式会社京進、ぎをん小森、新京極商店街振興組合、亀屋良長、山科青少年活動センター、NPO 法人フードバンク京都、京都大学、浄土真宗本願寺派みんなの笑顔食堂、有限会社アーキテクトタイタン、緑寿庵清水、京野菜～和～ラーメンいたや、一保道茶舗、TANTAN らんくらいどじむきょく、嵯峨青果食品、山科醍醐こどものひろば、株式会社 SAMURAI、人力車のえびす屋、京都子育てピアサポートセンター、京都 style 婚活 WEB、鶴屋吉信、京都府農業会議農人材育成センター、ハピネス子ども食堂、nikiniki、昇苑くみひも、NPO 法人京都子育てネットワーク、京都市役所、京都市国際交流協会、NPO 法人こどもセンターののさん、おたべ本館、株式会社マイファーム、京都府庁農林水産部、塩芳軒、辻利宇治本店、株式会社キッズコーポレーション、建都潤沢販売株式会社、株式会社京都駅観光デパート、中村藤吉本店、株式会社白川書院、株式会社センスタイムジャパン、富坂綜絖店、京都市観光協会、京都市ユースサービス協会、京都錦市場商店街振興組合

（３）SG 課題研究Ⅰ発表会

令和２年２月４日（火）５，６，７校時にテーマ別発表会及び代表選考会を実施。夏季フィールドワークから関西フィールドワークを経て得られた知見をもとに、アクションプランを提案するという発表内容の性質上、テーマを同じくする他の班の発表を聴き評価する機会、質疑応答を通じて、自らのアクションプランに対するフィードバックができるという利点に鑑み、テーマ別に会場を設定し、発表を行った。

令和２年２月 18 日（火）５，６，７校時に全体発表会を実施。代表 10 班により成果の共有をはかる全体発表会である。また、盛岡市や保護者の方々に一年間の成果を見ていただき、一年間の活動の総決算とした。どの班も各テーマの代表とあって、夏季フ

ィールドワークと関西フィールドワークによって得られた知見に自分達なりに考察を加え、具体的なアクションプランを提示できており、一年間の成長を感じさせてくれた。また、聴衆としても主体的な姿勢が備わってきたように思われる。各班の発表後には、論点の鋭い質問もあり、質疑応答も白熱した。盛岡市都市戦略室の佐藤俊治主査からは講評の際、「今年度の探求活動を通じて、探求活動とは何かを含め、多くの事を学んだことが感じられた発表であった。次年度の探究活動では、単なる事実の提示にとどまらず、より具体的で実践的な探究研究に取り組んでほしい。その活動を通じて、主体性・協調性・探究性をさらに磨いて欲しい」との助言をいただいた。

発表順及びテーマは、以下の通り。

| テーマ | 班名 | タイトル |
|---|---|---|
| **1　結婚子育て支援** | **１０２** | **子育て支援の現状と私たちができること** |
| **2　子どもの貧困対策** | **３０８** | **子供の貧困問題の解決へ** |
| **3　仕事キャリア形成** | **１０８** | **働き方改革の効果と疑問点** |
| **4　食と農の連携** | **１０３** | **地産地消を促進していくためには** |
| **5　食と農の連携** | **４０１** | **岩手県の農産物における人気度を踏まえた効果的なブランド化の方法の検討** |
| 休憩（10 分） | | |
| **6　盛岡ブランドと人口交流対策** | **７０４** | **温泉街を活性化するためには** |
| **7　盛岡ブランドと人口交流対策** | **７０６** | **盛岡の観光客数を増やすにはどうしたらいいか** |
| **8　盛岡ブランドと人口交流対策** | **７０８** | **盛岡ブランドの普及** |
| **9　都市機能の強化・地域教育** | **７０７** | **地方の教育格差をなくせ** |
| **10　共生社会とグローバル社会** | **７１０** | **効果的な情報発信** |

**評価基準（ルーブリック表）を使用した１年生の評価**

| 発表順 | 班名 | A(課題発見力)4点満点 | B(行動力)4点満点 | C(論理的発展性)4点満点 | D(計画性)4点満点 | E(スライド作成)4点満点 | F(デリバリー)4点満点 | 合計点の平均 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 102 | 3.57 | 3.82 | 3.78 | 3.74 | 3.45 | 2.75 | 21.11 |
| 2 | 308 | 3.73 | 3.75 | 3.79 | 3.83 | 3.75 | 3.06 | 21.90 |
| 3 | 108 | 3.53 | 3.69 | 3.44 | 3.66 | 3.66 | 3.34 | 21.31 |
| 4 | 103 | 3.55 | 3.79 | 3.37 | 3.61 | 3.18 | 3.48 | 20.99 |
| 5 | 401 | 3.77 | 3.70 | 3.65 | 3.72 | 3.61 | 3.38 | 21.83 |
| 6 | 704 | 3.63 | 3.81 | 3.51 | 3.64 | 3.43 | 3.29 | 21.31 |
| 7 | 706 | 3.72 | 3.88 | 3.88 | 3.82 | 3.74 | 3.66 | 22.71 |
| 8 | 708 | 3.46 | 3.75 | 3.52 | 3.55 | 3.34 | 3.54 | 21.15 |
| 9 | 707 | 3.78 | 3.83 | 3.82 | 3.77 | 3.51 | 3.66 | 22.37 |
| 10 | 710 | 3.57 | 3.57 | 3.62 | 3.60 | 3.31 | 3.38 | 21.05 |

## ３　おわりに

過去２年間と同様に、盛岡市と共同で行った地域創生プログラムは、１年生生徒自身が、地元の人々とふれあい、そこにある現状や問題点を知ることができた事に加え、「高校生としてできることはないのか」という問いを考え続けた。

そして、多くの班では、これまで２学年の探究活動のゴールとして設定していた「社会的な課題に対するアクションプランの提示」あるいは「アクション」そのものまで、１年次で辿り着いていた事は大変評価できる。

加えて、地域に潜在する教育資源の活用という点では、ポストＳＧＨとなる「総合的な探究の時間」でも継続的に独自の探究活動のフィールドとして活用できることは、本当にありがたい。

２年次以降は、今年度以上に、「１７の持続可能な開発目標」を強く意識した探究活動となるよう、盛岡市との連携事業を継続し、その洗練・深化を図っていきたい。

## Ⅲ　SG課題研究Ⅱ

1 はじめに

SG 課題研究 II は、1 学年で取り組んだ SG 課題研究 I に続いて、2 学年が行う探究的学習である。３年間にわたり展開する SG 課題研究の中枢に当たり、外部機関と連携しながら、１年をかけてグローバル課題の解決に真正面から取り組むことになる。

これまでの実践によって、大きな枠組みとしての探究活動は成熟してきた。SGH 指定最終年度として、取り組みたい課題を、昨年度の報告書から掲載順に拾ってみよう。

(i) 「いわゆる「フリーライダー」問題のように、なかなか前のめりになれず、受動的・消極的な取組に終始してしまう者も一部にはみられた。」

(ii) 「前述の TOLIC のように、世界展開を視野に入れている組織や機関との連携を深めていくことにより、生徒たちのアクションを一層グローバルなものへと高めていくことができるものと考える。」

(iii) 「その取組が生徒の進路意識に必ずしも結びついていないことは、残された課題の中で最も大きいものの一つ」

(iv) 「限られた人的・時間的・予算的リソースの枠内でよりバランスの取れた能力の伸張を図り得るプログラムを構築することで、持続可能な本校オリジナルの探究学習モデルの完成を目指していきたい。」

(iv) にあるように、ポスト SGH を視野に入れ、効率的で持続可能な探究学習モデルを今年度追求することもできる。しかしながら、(i) と (iii) の問題は本校が過去４年間継続して取り組んでいる課題の最たるものであり、未だ効果的な対策は見つかっていない。「総合的な探究の時間」を先行実施している全国の高等学校の関係者と話をしてみても、探究学習を運営実施する上で直面する困難としては、上記２点に集約されるようだ。そのため、今年度は (i) と (iii) の問題に絞って、指定最終年度だからこそ実験的な事業に取り組もうと考えた。(iv) については、指定期間終了後のことを考えれば、より持続可能で効率的な運営を心がけたいところだが、試行錯誤を繰り返し、事業細目の内、常に何を残し、何を削除すればいいのか、といった効率化の視点をもって臨めば良しとした。本章の最後に、効果を最大化した上で、効率的に運営できるモデルを提示することで、今年度の実験の総括とさせてほしい。

それでは、いかに (i) と (iii) の問題に処していくべきか。昨年度末に縁あって協働で課題研究発表会とアクション実施に関するワークショップを共催した、高校生の自主的な探究活動のケーススタディを豊富に有する認定 NPO 法人カタリバ（以下、「カタリバ」）の全面的な協力を得て、今年度は次の２点に注力することとした。テーマありきではなく、生徒が身近な興味関心を掘り下げることで探究テーマを設定し、自らがその探究テーマに取り組む意義を恒常的に意識できるようにすること。以降、これを「自分事」感と称する。導入段階に時間を多く費やし、生徒自らが探究活動を面白いと感じ、自発的積極的にアクションを積み重ねていくこと。以降、これを「自走」と称する。今年度は、「自分事」感を高め、生徒が「自走」しやすいようなプログラムの開発と、それを支え背中を押す教員側の体制（伴走と称する）の一定程度の確立を目指す。以下、実践内容を時系列でまとめる。

2 実践内容

年度始めはたくさんインプットを施し、生徒が本当に取り組みたい課題を見つけられる土壌の整備を行った。

(1) Input 1

4 月 17 日（水）一斉ガイダンス

普通科の生徒全員を白堊ホールに集め、一括でガイダンスを実施。

SG 課題研究 II では、6 つの大きなグローバル・テーマに則り、興味関心がある下位テーマについて、個人ないしは複数人の班で課題研究を進める。昨年度は盛岡市の協力を得て地域課題に取り組んだが、その活動を通じて学んだ探究のイロハ、アクションのイロハを最大限活用し、自分で課題を設定して、その解決に向けて自分達なりに主体的・実践的に行動していくことが目標となる。

過去 4 年間の反省を活かし、今年度は生徒一人ひとりが主体的に課題研究に取り組む環境を整備すること、そしてキャリア・デザインとの効果的な連動

を意識して実施していく。

この日はキャリア・デザインと探究課題との有機性を高めるべく、将来自分が学びたいと思っている学問領域から、潜在的な自分の興味関心を見つけだそうというワークショップを行った。

最後に、ゴールデンウィーク中に取り組む宿題についてアナウンス。論文検索サイト “CiNii Articles” にアクセスし、関心のある論文を 2 つ見つけ、それらについてまとめる。また、コンピューター室で先輩達が昨年度末に作成したポートフォリオをいくつか読む、という 2 点。

先輩達の中には、昨年度自分達の研究を最後まで全うできずに無念、できれば後輩に引き継いでほしいという思いを抱えている子達もいた。そうしたレガシーが詰まったポートフォリオに触れることで、先輩はこんなことに取り組んだのだと SG 課題研究 II の活動のイメージを膨らませてもらい、自分達自身がやりたいことを探す一助にしてほしい、という狙いである。

(2) Input 2

5 月 15 日（水）SG 講演会

高等学校における地域連携と、地域課題をテーマとした探究活動の先駆者である、大正大学地域構想研究所教授、浦崎太郎先生をお招きした。浦崎先生には、全国の先進事例や地域と協働する上で効果的な方法論を教えていただいた。

生徒達は主体的に行動することの重要性と、地域課題に取り組む意義を理解できただけでなく、高校生の自分達にもできることがたくさんあるのだと感じられたようだ。

また、文部科学省の中間評価に寄せられた「全学体制の一層の充実」を図るべく、今回は生徒向けの講演会にとどまらず、教員向けの研修会も浦崎先生に行っていただいた。

旧指導要領の「総合的な学習の時間」に代わり、新指導要領では「総合的な探究の時間」が開講される。SGH 指定後、本校では全国に先んじて探究活動を行っていたが、専門家の浦崎先生より指導要領改訂にいたった背景や主旨、全国的な先進事例などについてお話いただくことで、これまでの本校の取り組みを職員全員で振り返り、ポスト SGH における探究活動の運営に積極的に備える機会とした。

浦崎先生には、生徒が地域と連携し探究活動に取り組む意義を再確認させていただくとともに、教員に期待される関わり方や効果的な運営の在り方についてご教授いただいた。

(3) Input 3

6 月 5 日（水）Start up Day 1 with カタリバ

昨年度末にご協力いただいたカタリバと、今年度もコラボレーションをして、生徒が主体的に課題研究に取り組み、具体的なアクションを繰り返す中で成長していけるような仕組み作りに取り組んでいく。

主体的な探究活動の促進や、キャリア・デザインとの効果的な連動といった今年度の狙いは、生徒一人ひとりが本当にやってみたいと思える課題に取り組める環境を整えることで達成できるのではないか、とカタリバと事前に協議を行い、その方針の下で進めていくこととした。

今回はこれまで先行研究調査や浦崎先生からいた

だいたたくさんのインプットを端緒としながら、自分が本当に取り組んでみたいものは何かを探す時間とした。

文系の 2-1, 2, 3 組は 3, 4 校時に、理系の 2-4, 5, 6 組は 5, 6 校時に第 2 体育館に集まり、カタリバの主導でワークショップを行った。

流れはアイスブレイク、マイプロジェクトの OB/OG によるプレゼンテーション、班ごと（ここでの班は探究を行うものではなく、忌憚なく自分の思ったことを表明できるストレスが小さい仮に編成した班を指す）に自分が取り組んでみたいこと（以降 “My Will” と称する）を共有、そして My Will の絞り込み、というもの。

円滑で楽しい進行と、ご自身がなぜマイプロジェクトに懸命に取り組むようになったのかを赤裸々にお話いただいた OB/OG のおかげで、生徒達は「自分が本当にやりたいこと」を課題研究のテーマにすることがとても重要であることを心から理解できたようだ。

(4) Input 4

6 月 23 日（水）Start up Day 2 with カタリバ

3, 4 校時に理系を、6, 7 校時に文系を白堊ホールに集めて授業を実施。本日設定した目標は以下の 2 点。

・物事に対する「問い」を持つ感覚を持つことが出来る

・自分の北極星に対する「問い」を見つけることができる（北極星とは、実現したい社会、描きたい未来のことをさす）

前回の授業で取り組んだ My Will を元にして、生徒達は自分の北極星の姿を徐々に掘り出していく。その際に必要なのが、自分に対して問いを発すること、そしてその問いを重ねること。一般的には、問いを重ねていくと、物事の理解や思考が深まるが、それを北極星に応用する。

まずはアイスブレイクとして、カタリバの鈴木さんが、スクリーンに不思議な写真を映し出す。生徒達の頭の中には、いろんな疑問が浮かぶ。一つの疑問を解消すると、また次の疑問が頭に浮かぶ。この活動を通じて、問いの出し方を練習した。

そしていよいよ、生徒達自身が、自分の Will を問いによって深め、北極星を掘り出す時間。「なぜ」「本当に」「具体的には」といった汎用性の高い問いをどんどん用いたり、ゲストの皆さんや 2 学年の教員のサポートをもらって、生徒達は自分の北極星の輪郭を朧気ながらもつかめてきたようだ。

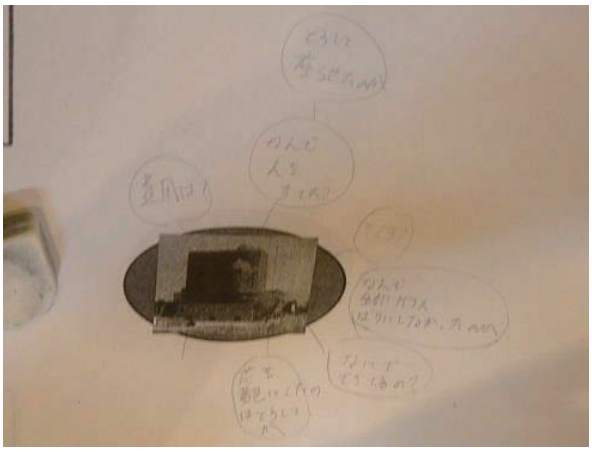
授業後の生徒達の反応を、以下に抜粋する。

「もう一度北極星を考え直してみて、自分が本当にやりたいことをマイプロとして取り組みたいと思いました。」

「自分の北極星に問いを出していくことで、さらに興味が深まっていくことがわかった。」

「自分軸で話すことは中高生になってからあまりしなくなったので、久しぶりに自分の意見をしっかり言って相手の意見も聞けてとても有意義な話をできました。」

「自分と向き合うことがしっかりと出来たと思う。」



(5) Input 5

7 月 10 日（水）Start up Day 3 with カタリバ

ついにカタリバとのスタート・アップも最終日を迎えた。前回掘り出した北極星を達成するために、夏休みに何をすべきかを考え、計画を立てることが本日の目標となる。

1, 2 校時に理系が、3, 4 校時に文系がそれぞれ白堊ホールに集まって授業を行った。

今年度は自分のやりたいことを思う存分やれる環境を、最優先にしている。過去の探究活動においては、一旦班を編成してしまうと、自分のやりたいことを我慢しなければならない生徒が出てきたり、フリーライダーとして主体性を欠いてしまう生徒が出てきたりと、様々な問題が噴出した。今年度はその対策として、個人での探究活動も認めることとした。他の生徒と北極星が似通っており、一緒に活動することで主体的な取り組みがむしろ促進されることが見込まれる場合に限っては、班を編成しても良いと条件をつけた。

班編成に関する説明を終えた後、ギャラリーという活動を行った。机上に自分の定めた北極星を記したハンドアウトを残して、白堊ホール内を自由に移動し、他の生徒達がどんな北極星を追い求めているのかを見て回る、画廊に見立てた活動である。他の人の北極星に触れることで、友人の新たな一面を知れた生徒、共感を覚えて班を編成すべく口説きにかかる生徒など様々だったが、概してお互いに良い刺激を与えられたようだ。

授業の最後には、夏休みに行う現状調査の計画を立てた。本日はカタリバの皆さんの他に、お二人のゲストをお招きした。まずは本校の SGH の活動に長年協力いただいている高橋和氣さん。そして今年度新たに提携を始めた TOLIC*の片野友貴さんである。お二人には幅広い人脈を活かして、生徒達にフィールド・ワークの訪問先を紹介してもらったり、夏季アクションについてたくさん助言をいただいたりした。

夏季アクションのプランを立てる上で大事にしたのは、その行動で北極星と現状のギャップを見つけられるかどうか、という点。言い換えると、自分が関心を抱いているテーマに関して、どのような人達がどのように困っているのかを、現場に実際に赴いて見つけてくることに主眼が置かれる。高橋さん、片野さんをはじめ、カタリバの皆さん、そして２学年の教員全体で白堊ホール内を歩き回り、生徒一人ひとりの計画に耳を傾け、フィードバックを行った。

*TOLIC: 東北ライフサイエンス機器クラスター
TOLIC に集まる企業は進取の気風に溢れ、岩手発の製品を世界に広げようという気概に満ちており、今年度から SG 課題研究 II におけるコラボレーションを始動した。

(6) 成果発表 1

8 月 31 日（土）、9 月 1 日（日）白堊祭でのポスター展示

カタリバと共に実施したスタート・アップを経て、生徒達は自分が理想とする社会（北極星）を実現することへのモチベーションが高まった。北極星の実現に向けて、まずは現状がどうなっているのかを知らなければならない。夏休み中は、自分が選んだテーマに関わる現場に足を運び、困り事を発見してくるというフィールド・ワークを夏季アクションとして実施した。

アクションと言うと、問題解決を行う実践を思い浮かべるが、今回は「問いを深める自発的行動」を夏季アクションとして捉えた。今回発見した課題について、秋季アクションでは実際に、その解決に向けて動き出すことになる。

白堊祭では夏季アクションの成果物として、フィールド・ワークの報告書を展示。昨年度の経験を活かし、今年度はすべての班が自分達でフィールド・ワーク先を開拓した。各所お忙しい中、親身に対応していただいたおかげで、生徒達は課題意識をより深めることができた様子が、報告書からうかがえる。

来場していただいたお客様には、熱心に生徒達の活動に目を通していただいた。同級生がどのような活動を行っているのか、生徒同士でも見合った。付箋にコメントを書き、報告書に貼り付けていただいた方もいらっしゃった。（昨年度よりも、貼り付けてある付箋の数が倍増した）

(7) 成果発表 2

9 月 4 日（水）6, 7 校時　ポスター・セッション

本日はこの 2 年間でお世話になっている方々をお招きし、クラス単位でポスター・セッションを行った。生徒達は、夏休みの「問いを深めるアクション」で明らかになった、自分達の掲げる北極星を実現するために乗り越えなくてはならない課題を紹介し、その解決に向けた自分なりの仮説を共有した。ゲストの皆様からは、主に秋季に実施する課題解決に向けたアクションの仮説について、指導助言をいただいた。

これまでカタリバのご協力を得て、課題研究のテーマをできるだけ自分事と捉えられるように働きかけてきたが、どうやらその試みは奏功しているようだ。実際の発表を覗いてみると、生徒達が自ら楽しんでフィールド・ワークを行っている様子がうかがえた。ゲストの皆さんもそうした生徒達の主体的な取り組み姿勢に感銘を受けたようで、真摯に耳を傾けていただき、また素晴らしいコメントをたくさん

いただいた。

本日お越しいただいた方々は次に掲げる方々である。

盛岡商工会議所参与　廣田　淳さん
SoRaStars 株式会社　代表取締役　山崎智樹さん
盛岡生活文化研究室　代表　大森不二夫さん
盛岡市役所
　企画調整課　主任　畠山高樹さん
　企画調整課　主事　岩瀬張友花さん
　都市戦略室　主任　阿部牧子さん
　都市戦略室　地域おこし協力隊　中島航さん
TOLIC
　株式会社 TOLIMS
　　統括マネージャー　片野友貴さん
　株式会社アイカムス・ラボ
　　代表取締役　片野圭二さん
　株式会社アイカムス・ラボ
　　営業部　藤原樹璃さん
　株式会社 TOLIC マネジメント
　　コーディネーター　佐藤由行さん
　株式会社わしの尾　代表取締役　工藤朋さん
　アイエスエス株式会社
　　代表取締役　鎌田智也さん
カタリバ
　渡邊洸さん
　鈴木胡美さん
　宮城千恵子さん
　荷川取佑太さん

(8) 秋季アクション

10 月 2 日（水）6, 7 校時　秋季アクションのガイダンス

本日は、カタリバの渡邊洸さんと鈴木胡美さんのお二人をお招きし、秋季アクション実施に向けたガイダンスを行った。

生徒達は夏休み中に実施した夏季フィールド・ワークで知った、自分の選んだテーマに関わる課題について、秋季は解決に向けた具体的なアクションを行っていくこととなっている。

カタリバのお二人には、白堊ホールで一斉にガイダンスを行っていただいた。ワークショップ形式で、これまでの活動の振り返りを丁寧に行っていただき、解決に向けた具体的なアクションのイメージをつかめるように、マイプロジェクトに主体的に取り組んできた先輩達の事例をいくつか紹介してもらった。そして最後に、秋季アクションの計画立案のポイントを共有してもらった。

その後生徒達は各教室に戻り、班毎に計画を詰めていった。そこでは、担任副担任がメンターとなって、各班の活動を支援していく。実は今回、前日 10 月 1 日（火）16:30 ~ 17:45 に、伴走者として必要なマインドセットや具体的な支援の方法などを周知共有するため、２学年教員対象のカタリバとの勉強会を開催した。その甲斐もあってか、各教室に戻った後の活動にも、生徒達は主体的に取り組めていたようだ。

(9) 相談会

10 月 30 日（水）6, 7 校時　秋季アクションに関する相談会

本日は社会の多様なフィールドで活躍されているゲストの方々を本校にお招きして、各班が自由に質問できる機会を設けた。秋季アクション相談会と名付けたが、イメージとしては校内でフィールド・ワークを行うといったところか。

一旦、生徒もゲストも含めて、参加者全員が白堊ホールに集まった。その後、ゲストの皆様にステージ上で自己紹介（氏名、所属、そして相談にのりやすい分野など）をしていただき、各教室に移動していただく。結果、各教室には 2 ~ 3 名のゲストがいることになる。生徒達はそれぞれの教室に自由に赴き、課題研究を進める上で悩んでいることや疑問に思っていることを相談するという形をとった。

各教室に入っていただいたゲストの皆様を紹介する。

2-1

市役所都市戦略室　中島航さん（地域おこし協力隊）

市役所都市戦略室　佐藤俊治さん

2-2

市役所都市戦略室　阿部牧子さん

アイエスエス株式会社取締役副社長　山崎靖吾さん

2-3

市役所企画調整課　畠山高樹さん

株式会社 TOLIMS 統括マネージャー　片野友貴さん

株式会社わしの尾代表取締役　工藤朋さん

2-4

盛岡商工会議所参与　廣田淳さん

ソラカフェ　山崎智樹さん

盛岡生活文化研究室　大森不二夫さん

2-5

株式会社 TOLIC マネジメント

　コーディネーター　佐藤由行さん

株式会社アイカムス・ラボ営業部　藤原樹璃さん

2-6

NPO 法人カタリバ　なんでもオンライン相談会（カタリバは来校できないとのことでしたので、テレビ電話で対応していただいた）

初めての試みでうまくいくか心配していたが、16:10 に終了のチャイムが鳴るまで、終始生徒達がゲストの方々のもとを訪れ、熱心にお話を伺っている様子を目の当たりにして、成功裡に終わったことを確信。

今回いらしていただいた TOLIMS の片野さんからも、次のような感想をいただいた。

「私たちも生徒さんが積極的にゲストに相談に行っている姿を見て非常に有意義な企画であったと思います。私の所に相談に来た生徒さんも、もっと具体的にしたいというグループと、行き詰まってきたやばい！というグループがあり、全体的に本気モードになったように見受けました。これからどのようにまとめ上げるか楽しみです。」

(10) 成果発表 3

12 月 4 日（水）6, 7 校時@各 HR クラス別中間発表会

本日はいよいよ、自分達が探究してきた課題を解決する秋季アクションの成果を発表する、クラス別中間発表会を実施した。発表の時期が例年よりも前倒しになっているのは、カタリバが主催するマイプロジェクト・アウォード岩手県サミットのエントリー時期に合わせるためである。今年度多大な支援をいただいているカタリバの恩に報いられるよう、主

体性や自己発見に富んだ発表が多数生まれることが期待される。

カタリバと協力して、今回ルーブリックも大幅に見直した。探究の内容や深度といった成果にばかり目を向けると、自ずと探究活動を相対的に評価してしまいがちである。しかしながら、高校生が探究活動に携わる本当の意味は、将来直面するであろう複雑難解なグローバル課題にも臆せずに立ち向かう素地を培うこと。従って、生徒一人ひとりが探究活動を通じて得られた自分だけの学び、成長、変容を、絶対評価できるようにすることが重要となる。別にルーブリックの変更に関する項目も立てたので、そちらを参照されたい。

発表毎に、その新しいルーブリックに基づきピア評価を行った。その結果は、本校情報科の力を借りて、学校独自のポータルサイトに入力した。今回、最高得点を獲得した班が、クラス代表の権利を得て来週のクラス代表中間発表会に臨む。

これまで数多くの高校生の探究に携わってきたカタリバの渡邉洸さんと鈴木胡美さんから、次のようなコメントをいただいた。

「これだけ多くのプロジェクト（全部で 105 班）がこれだけの質で（探究活動を）行えたのは、大きな成果だ。想定していた以上に、生徒達は主体的に探究活動に取り組み、積極的にアクションしていた。自分のやりたいことを課題に選んで、その選んだ課題に真摯に向き合ってくれていた。」

各クラスで熱いプレゼンテーション合戦が多数繰り広げられ、0.12 点という僅差で代表から漏れてしまった班もあった。全体平均値は 10 点満点で 7.57 点。クラス代表に選ばれたのは、以下の 6 つの班。(　) 内は得点。

2-1 古舘 (8.55)、2-2 野中、花石、吉田 (9.45)、2-3 石川、鈴木、杉村 (9.31)、2-4 鎌田、菊池、佐藤、斉藤 (8.58)、2-5 鈴木、金村 (8.85)、2-6 大津 (8.54)。いずれも代表班はさすがの内容だったが、その他にも素晴らしい探究がたくさんあった。全体的に、冬季アクションでの深まりが期待される。

(11) 成果発表 4

12 月 11 日（水）7 校時@白堊ホール　クラス代表中間発表会

前回のクラス別中間発表会を経て選ばれた代表が、白堊ホールで発表を行った。さすがクラス代表ということもあり、それぞれが自分の北極星に真摯に向き合い、主体的に探究を行ったことが窺える、素晴らしい発表ばかりだった。

各クラスの代表と、その北極星、探究の概要は以下の通り。

2-1 古舘愛夏「健康的に減量する」自身が柔道部に所属し、厳しい減量の経験から、無理なく筋力を落とさずに減量する方法を探る探究。

2-2 野中彩、花石珠実、吉田桜「ゼロをプラスにする – 障がい者の認知度向上のために」障がい者の認知度を向上させるため、障がい者が製作するお菓子などを、不特定多数のお客さんが訪問する商業施設とコラボレーションしてプロモーションを行う。

2-3 石川怜、鈴木幸恵、杉村愛「誰でも気軽に将棋

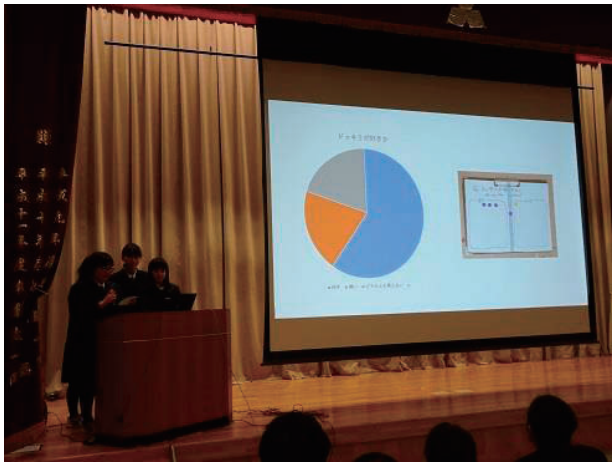
を始められる社会を作る – 初心者向けゲームの開発」自分達の大好きな将棋の魅力を、世界中の人に知ってもらうため、初心者向けのゲームを作製。
2-4 鎌田朋嘉、菊池夏未、佐藤園香、斉藤陽麗「嫌なことをされない社会」ドッキリをしかける番組を見ていて、ある芸人に対して同情の感を抱いたのをきっかけに、ドッキリについてどう思うかアンケートを実施。
2-5 鈴木愛乃、金村璃歩「頑張っている人が輝ける社会」当初は自分達の進路希望から、医療従事者に注目していた。しかしフィールド・ワークを重ねるに従い、様々なフィールドでそれぞれ輝いている人達の存在を知った。夢を抱き、頑張っている人が一層輝ける社会の構築のために、今はキャリア教育に注目している。
2-6 大津武「スタンド湧かす永遠のアーチ – 野球で熱く盛り上がる社会」昔から野球が大好き。自身は応援団に所属しているが、野球応援の楽しさをもっと多くの人に伝えたい。本校硬式野球部の試合を自由に観戦できる企画を来春実現したい。

各班、それぞれのバックグラウンドによって、独創的で主体的な学びを深めていることが読み取れる。最初は主観的自己中心的だった探究テーマも、ルーブリックに項目として立てられているように、どのように社会に貢献できるかという視点で深掘りすることで、意義深い探究へと変化を遂げる。上記のように、高校生らしさや自分事感に溢れる、多彩なテーマが数多く見られたのは、カタリバを始めとして、たくさんの方々に関わっていただいたおかげである。

今回 1 位に輝いたのは、2-3 の将棋ゲーム製作班。この班のアクションは圧巻だ。実際にゲームを試作し、たくさんの人に試用してもらう。一人ひとりからフィードバックを受け、指摘された箇所をまた改良するという PDCA サイクルを、何度も何度も回している。観覧した生徒達も、感銘を受けていた。高校生はこんなにすごいことができる！と実感できたのではないか。きっとその原動力は、「好きなこと、やりたいこと」を探究テーマとすることである。

将棋ゲーム班は、2 月中旬に行われるマイプロジェクト・アウォード岩手県サミットに、本校からの推薦枠という形で参加する。しかしながら、書類選考を通れば、今回推薦枠を勝ち取ることができなかった班も、参加資格を得られる。

本発表会で他の班のパフォーマンスを目の当たりにし、やる気に火がついた班もあった。お互いに良い刺激を与え合えるのが、発表会の良いところである。



(12) 成果発表 5
2 月 16 日（日）10:00 – 17:30@盛岡劇場　マイプロジェクト・アウォード岩手県サミット

本校からは学校推薦の他、書類選考に通過した計 7 班のべ 13 名が参加した。参加プロジェクト名は以下の通り。

(i)「後悔しない減量を！～健康的な食事から～」2-1 古舘
(ii)「障がい者の認知度向上を目指して」2-1 吉田、2-2 野中、花石
(iii)「誰もが気軽に将棋を始められる社会を作る」2-3 石川、2-5 鈴木幸、杉村
(iv)「頑張っている人が輝く社会」2-5 鈴木愛、2-6 金村
(v)「学生が楽しく学ぶ社会」2-1 馬場、原科

(vi)「高校生の適切なスマートフォン利用について考える」2-1 山田

(vii)「視覚障がい者が岩手体感できる社会～顔認証によるチケットフリー～」2-2 岡崎

(i) ~ (iv) までは、中間発表会でクラス代表になった班である。(v) ~ (vii) までは、自ら手を挙げて、書類選考に応募した班。いずれも、冬季アクションまで充実させた素晴らしい発表であった。(ii) と (iii) は審査員（サポーターと称する）から高い評価を得て、決勝に進んだ。惜しくも全国サミット出場はならなかったが、双方「代表プレゼンサポーター特別賞」を受賞した。

(13) 成果発表 6

2 月 27 日（木）2 – 4 校時@第一体育館　令和元年度 SG 課題研究発表会

一年間の活動の総括として、全ての班が発表を行った。外部からも多くのゲストをお招きし、マイプロジェクト・アウォードで本校最高位となった班と SG 台湾フィールド・ワークに参加した班の代表がプロジェクターに投影して発表を行った。その後、外部ゲストに加えて、一年生や２年理数科の生徒をオーディエンスとして招聘し、全ての班がポスター・セッションを行った。

最後に講評として一年間お世話になったカタリバのお二人からコメントをいただいた。鈴木胡美さんからは「自分のテーマや自分自身について、いきいきと語っていた姿から、みんなの思いが感じられた。一年間、探究活動にしっかりと向き合ってくれたことがわかった。これからの学びにも繋げていってほしい。」とメッセージをいただいた。渡邊洸さんからは「これまでの活動を振り返ったとき、もっと社会と繋がっていれば、別の展開を迎えたかもしれない。それを想像してみてほしい。社会の構成員として生きる意義を、もっと実感できるはず。これからの時代を社会を支えるのはみんななのだから。」と新たな学びの可能性を示唆していただいた。お二人の言葉のおかげで、本発表会は探究活動の終わりではなく、むしろ新しい学びの始まりであることを認識できた。

3 ルーブリックの変更について

今年度の SG 課題研究の運営における狙いは、先述した通り、「自分事感を高め、生徒が自走できるプログラムの開発」である。カタリバと協力し、ルーブリックも以下に添付したように、大幅に見直した。

【旧ルーブリック】

平成 31 年度 SG 課題研究 II ルーブリック

| 基準 | 極めて良好である | 概ね良好である | 改善の余地がある | 一層の努力を要する |
|---|---|---|---|---|
| 点数 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| **A**<br>[課題発見力]<br>テーマ設定 | グローバル課題に関係があり、具体的なテーマ設定である。また、独自性や先進性が感じられる。 | グローバル課題に関係があり、具体的なテーマ設定である。しかし、既存研究にありそう。 | グローバル課題に関係があるが、テーマが概論的である。 | グローバル課題に関係がない。 |
| **B**<br>[探究の深度 1]<br>行動力 | テーマに沿った**アクション**が行われ、その効果が客観的に検証されている。 | テーマに沿った**アクション**が行われたが、効果の検証には至っていない。 | **アクション**が行われたものの、テーマとの間にズレがある。 | **アクション**が行われていない。 |
| **C**<br>[探究の深度 2]<br>レファレンス | 先行研究・先行事例が踏まえられており、更にそれを発展させることができた。 | 先行研究・先行事例が適切に踏まえられている。 | 先行研究を挙げているものの、班の探究内容との間にズレがある。 | 先行研究・先行事例が踏まえられていない。 |
| **D**<br>[探究の深度 3]<br>論理展開 | 充分な論拠とともに、独創的・実効的成果をあげられている。 | 充分な論拠を挙げて、自説を展開できている。 | 独自の見解を提示しているが、論拠に欠けている。 | 調べたことをただ列挙するだけにとどまっている。 |
| **E**<br>[発信力 2]<br>スライド作成 | 右に加えて、効果的に聞き手を惹きつける工夫をスライドに凝らしている。 | 右に加えて、効果的に図・表が用いられている。 | スライドがシンプルでわかりやすく、構成も整理されている。 | スライドが文字ばかりでわかりにくく、構成も整理されていない。 |
| **F**<br>[発信力 3]<br>デリバリー | 右に加えて、質問を投げかけるなど、聞き手を惹きつける工夫を発表に凝らしている。 | 右に加えて、効果的にジェスチャーやボディランゲエージを用いている。 | 聞き手の方を見て発表しており、声量も充分である。 | ただ原稿を読み上げており、声量も不充分である。 |
| **G**<br>[協調性]<br>他者との協業 | **班**: 誰が代表になっても、プレゼンテーションができる。 | **班**: 左に加えて、各自が活発に意見を出し合い、内容を洗練した。 | **班**: 全員が役割を分担し、作業を完遂した。 | **班**: 一部の班員のみで作業を完遂した。 |
| | **個人**: 自ら専門家や専門機関と積極的に関わり、客観性を高めている。 | **個人**: 自ら専門家や専門機関と積極的に関わっている。 | **個人**: 外部指導者やカタリバの方々の意見を踏まえている。 | **個人**: 独りよがりだ |
| **H**<br>[主体性]<br>関心・意欲・態度 | 右に加えて、自身の進路を肯定的に見直す端緒とした。 | 自身に直結する課題と捉えて、主体的に探究した。 | 与えられた課題については、充分に果たそうと努力した。 | 課題研究に取り組む意義を見出せない。 |

## 【新ルーブリック】

岩手県立盛岡第一高等学校
令和元年度SG課題研究II
ルーブリック

| Attributes | 点数 | 10 | 7 | 4 | 1 |
|---|---|---|---|---|---|
| I. Ownership | a) Responsibility | 自ら探究活動の方向性や行動計画を企画し、自律的な活動を日常的に行うことができている。 | 自ら探究活動の方向性や行動計画を企画し、自律的に活動できている。 | 自ら探究活動の方向性や行動計画を企画し、実践している。 | 自ら探究活動の方向性や行動計画を企画できている。 |
| | b) Commitment | 3回以上、アクション（夏季+秋季+α）を、試行錯誤を重ねながら継続して行っている。 | 2回以上、アクション（夏季+秋季アクション）を試行錯誤を重ねながら行っている。 | 実際にアクション（夏季アクション）を行っている。 | 机上の空論に終わっている。 |
| II. Co-creation | c) Cooperation | いろんな立場の人達（貢献したい相手や、関係する人達）を巻き込み、対話的に活動を進めている。 | 相手の言葉にしっかりと耳を傾け、対話的に活動を進めている。 | 誰か（外部の人や班員）と協調しながら活動を進めている。 | 殻に閉じこもっている。 |
| | d) Contribution | 探究活動の社会的な価値が認められ、受益者に加えて、応援者、賛同者が生まれている。 | 探究活動に社会的な価値を持たせ、アクションによって受益者が生まれている。 | 探究活動に社会的な価値を持たせることができている。 | 探究活動の目的が独りよがりである。 |
| III. Learning | e) Reference | 先行研究を踏まえて、仮説検証を繰り返し行っている。（やってみた結果、ふりだしに戻るのも悪いことではない。） | 先行研究を踏まえて、仮説検証を行っている。 | 先行研究を踏まえて、現場に赴き、理想の状態とのギャップを見つけた上で仮説を立てている。 | 理想の状態に向け、前例や似た事例を調べている。 |
| | f) Improvement | 右に加えて、探究活動を通じて得られたスキルを日常生活の中でも活用している。 | 右に加えて、探究活動を通じて何らかの新しいスキルが得られた。 | 探究活動を通じて、前の自分よりも視点の広がりや意識の高まりが生まれている。 | 探究活動から、なにも学ぼうとしない。 |
| IV. Global Thinking | g) Global Thinking | 17SDGs*に関連しており、具体的な課題設定である。また、独自性や先進性が感じられる。 | 17SDGsに関連しており、具体的な課題設定である。しかし、既存研究にありそう。 | 17SDGsに関連しているが、課題が概論的である。 | 17SDGsに無関係である。 |
| V. Presentation | h) Materials | 右に加えて、効果的に聞き手を惹きつける工夫をスライドに凝らしている。 | 右に加えて、効果的に図・表が用いられている。 | スライドがシンプルでわかりやすく、構成も整理されている。 | スライドが文字ばかりでわかりにくく、構成も整理されていない。 |
| | i) Delivery | 右に加えて、質問を投げかけるなど、聞き手を惹きつける工夫を発表に凝らしている。 | 右に加えて、効果的にジェスチャーやボディラングエージを用いている。 | 聞き手の方を見て発表しており、声量も充分である。 | ただ原稿を読み上げており、声量も不充分である。 |

*17SDGs: 2015年に国連で採択された『我々の世界を変革する: 持続可能な開発のための2030アジェンダ』で、具体的な行動指針として示された17の「持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals, SDGs)」

以下に、本校SG大テーマと17SDGsとの親和性を「系（a ～ d）」として示す。

| 系 | SG大テーマ | | 17SDGs | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| a | 街づくり | ILC | 6. 水と衛生の利用と管理 | 7. 持続可能な現代的エネルギー | 9. インフラストラクチャー構築、イノベーション | 11. 持続可能な都市および人間居住 |
| | | | 13. 気候変動対策 | 14. 海洋の持続可能な利用 | 15. 陸地の持続可能な利用 | 17. 持続可能な開発のための実施手段とグローバル・パートナーシップ |
| b | 貿易 | 観光 | 1. 貧困を終わらせる | 2. 飢餓を終わらせる | 8. 持続可能な雇用と経済成長 | 12. 持続可能な生産と消費 |
| c | 教育 | | 4. 質の高い教育 | 5. ジェンダー平等 | 10. 不平等の是正 | 16. 平和と正義 |
| d | 医療 | | 3. 健康的な生活 | | | |

下の新旧ルーブリック対応表を見てほしい。各項目を比べてみると、旧ルーブリックで評価対象としていた「D 論理展開」が結果として消えてしまった。しかしながら、新ルーブリックでは「(d) Contribution」という社会的価値を測る指標と、「(f) Improvement」という探究活動を通じてどれくらい自らが成長できたかを省みる指標が追加された。ルーブリックを導入し、事前に示す事で、生徒はそれに向かって成果を出そうと前向きに努力できるようになる。こうした経験則に照らせば、社会貢献ができているという実感には、自己肯定感を高める効果が期待できる。また、探究活動を通じて自己の成長を促すのは、学習の一環として行う本事業として、本来あるべき姿であろう。理路整然とした成果物を取り繕うよりも、トライアル・アンド・エラーを促進する雰囲気を醸成することの方が重要であると判断した。

新旧ルーブリック対応表

| 旧ルーブリック | 新ルーブリック | 中間発表会平均点 |
|---|---|---|
| H 主体性 | (a) Responsibility | 8.00 |
| B 行動力 | (b) Commitment | 7.80 |
| G 協調性 | (c) Cooperation | 7.73 |
| | (d) Contribution | 7.49 |
| C レファレンス | (e) Reference | 7.62 |
| | (f) Improvement | 7.48 |
| A テーマ設定 | (g) Global Thinking | 7.76 |
| E スライド | (h) Materials | 7.61 |
| F デリバリー | (i) Delivery | 7.36 |
| D 論理展開 | | - |
| | Total | 7.65 |

中間発表会における、全ての班の発表のピア評価の平均点も掲載した。Total が 10 点満点中 7.65 点と高得点となっている。また、項目別に見た時、「自分事」感を測る「(a) Responsibility」や「自走」の度合いを測る「(b) Commitment」が高水準にあることは、喜ばしい結果である。

4 考察

やりたいことを自由にテーマに選べ、探究ユニットにおいては個人活動を認めるなど、かなり自由度を増し、生徒の探究活動に対する自分事感を高め、自走を促進しようという今年度の企図は成功したのか。上に掲げた中間発表会の結果からは、肯定的な結論を導けそうである。しかしながら、毎年度末に実施している意識調査の結果はどうだろう。

「R1 普通科」の「5 探究的な学習活動は好きか」を見ると、その値が過去 3 年間で最低の結果となってしまった。導入段階では、繰り返し「自分の興味のあることを選んでいい」「やりたいことを思う存分やっていい」と強調し、実際やりたいことを思う存分やれる環境を整備したはずであるが、このような結果が出てしまった。この裏腹な結果には、もう少し分析の余地があるだろう。今回のアンケートは学校生活サポートサイトへの入力で実施したため、回答者を分類することが可能である。LGBTQ+やインクルーシヴなど、多様性と自他尊重が大事にされる今の時代に逆行するようだけれども、敢えて文系理系と男女の別による分類を試みた。すると、これまで運営側に肌感覚としてあった、探究活動に対する温度差が明白となった。「5 探究的な学習活動は好きか」を見てみると、文系女子→文系男子→理系女子→理系男子の順に、きれいに 5%刻みで減っていく点は興味深い。またこの数字は「1 自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組んだか」との相関も大きい。ここでは特に、文系女子と理系男子の傾向の差について、考察してみたい。

まずは理系男子の分析を試みる。付き合っていると、彼らは教員側から課された課題を速く正確に遂行することを是とする、旧来型の秀才像に囚われ、そこに安住しているように感じられる。実際、前に理系男子数人と話をしていたとき、与えられた課題は必要最低限にこなして、できるだけゲームや読書、友人との談笑といった遊興に時間を割きたいと一様に言っていたのが印象的である。興味関心も文系男女に比すると、内向きな傾向がある。

しかしながら、答えのない問題を解決するイノベーションを、多くの人と協働しながら起こしていくことが、グローバル時代のリーダーには求められている。勉強ができれば事足りるという旧来型の秀才

は、今の時代では通用しない。探究活動を自分事にできず、自走するのを面倒に感じてしまう、「探究弱者」とも言える理系男子に対して、何らかの手立てを講じていくことが、同様にイノベーションを迫られている「教育」にとって、喫緊の課題かもしれない。

そんな彼等も別のアンケート結果を見ると、ほとんどが探究的な学習の必要性について理解している。もちろん好みはしていないが。彼等の言い分は次のようなもの。「探究的な学習で必要とされるのは思考力だが、テーマに関する基礎的な知識がなければ、思考はできない。思考力を鍛えるよりもまず、基礎的な知識を身につける座学を大事にすべきではないか。」こうした言葉が理系男子に散見された。この考え方も、旧来型の秀才のロジックとは言えまいか。探究的な学習のような課題解決型学習においては、思考を深めるために知識に貪欲になり、一旦その知識を得ると、新しいアイディアのヒントを得、思考をより深められる。ネジを打ち込んでいくというか、知識を得ようというモチベーションと、その知識を用いた思考の両方が、旋回しながら深まっていく。そんな学習プロセスを与えてくれるものである。座学も探究活動も、バランス良くカリキュラム上に配置することで、双方の効果を最大化できるのは、自明のことである。

最後に、文系女子を中心に、今年度の SG 課題研究がどれくらい価値を有していたのか、年度末に作成したポートフォリオより抜粋した自由記述を引いてみよう。

「SG の活動は昨年もやっていて、昨年は自由に活動することができず、テーマもある程度決められていたけど、今年は自分達の好きなことがことをテーマにすることができたので、楽しく活動することができた。SG 台湾研修に参加して、日本だけではなく世界に目を向けてみると、日本とは違う点がたくさんあり、お菓子という点ではパッケージまでもが日本のものとは異なり、おしゃれで華やかで買いたくなるようなものが多かった。プレゼンを考えるときは、まず仮説を立て、考察をして、アクションをして、と順序を立てていくことが大切だと学んだ。大学に行ってもプレゼンをする機会は何度もあると思うので、そんな時にも生かせるといいなと思う。」

「一人で動くことはすごく大変で先生やカタリバで相談することが多かったです。最初は心細くて『失敗したらどうしよう』と不安に思う気持ちが大きくて、アクションをするまでに時間がかかってしまいましたが、『とりあえず、失敗しても良いからやってみよう』という言葉に励まされて、頑張れました。実際に冬季アクションは失敗してしまいましたが、逆に学ぶことの方が多く、恥ずかしく思う気持ちの方が小さかったです。相談するというのは、自分にはない案を提供してくれる絶好の機会であり、それを受け入れる大切さも学びました。今後も失敗したことなどを次につなげられるようにしたいです。」

「去年よりも活動の自由度が増した分、自分達で決めなければいけないことも増えて大変でしたが、『公園』や『出身小学校』など身近なところから活動を

| 質問項目 | 回答 | H29 | H30 | R1 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 普通科 | 文系男子 | 文系女子 | 理系男子 | 理系女子 |
| 1　自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組んだか | Yes | 33 | 61 | 74.9 | 81.5 | 86.2 | 60.3 | 75.0 |
| 2　自主的に留学や海外研修を行ったか | Yes | 4 | 9 | 10.7 | 3.7 | 16.9 | 6.3 | 12.5 |
| 3　将来留学したり国際的な仕事に就きたいか | Yes | 42 | 51 | 54.5 | 44.4 | 67.7 | 47.6 | 50.0 |
| 4　公的機関から表彰されたか。またはグローバルな社会課題・ビジネス課題に関する大会で入賞したか | Yes | 9 | 12 | 13.4 | 3.7 | 24.6 | 4.8 | 15.6 |
| **5　探究的な学習活動は好きか** | **Yes** | **69** | **73** | **67.9** | **70.4** | **75.4** | **60.3** | **65.6** |
| **6　課題研究を通して自分の進路はより明確になったか** | **Yes** | **37** | **28** | **29.9** | **22.2** | **35.4** | **23.8** | **37.5** |
| 7　課題研究を通して国外の機関や専門家と連携したか | Yes | 0 | 6 | 4.8 | 0.0 | 9.2 | 3.2 | 3.1 |
| 8　グローバルな社会課題・ビジネス課題に関する大会に参加したか | Yes | 5 | 5 | 3.7 | 0.0 | 7.7 | 0.0 | 6.3 |
| 9　高校卒業後、海外の大学へ留学・進学するか（予定を含む） | Yes | 5 | 11 | 7.6 | 19.2 | 12.5 | 1.6 | 0.0 |

※ 数値はパーセンテージ

令和元年度2学年普通科生徒を対象として行ったSGH事業のアウトプットに関する意識調査結果

広げることができたと思います。私は教育学について学べる大学に興味をもっているので、子ども達の遊び場の改善に向けて、今回知ることができた現状を生かした学習ができればいいなと思っています。」

「私が一年間の研究活動を通して学んだことは、自分がやりたいと思ったことには自主性が伴うということです。今までは決められたことをやることが多かったので、あまり自主性がありませんでしたが、今年はペアの子と話し合って、どうすればより効率的によりよく盛岡のことを伝えられるかを自分なりに追究することができました。また、しっかりと見通しを持って段階的に研究することの重要性を学びました。今回の研究で自分も知らなかった盛岡の良さを多角から感じることができたので、地域に貢献できる人材となれるように努力したいです。」

「自分でテーマを決める時に、普段は特に深く考えないこともじっくり考えることで疑問が生まれ、一気に興味深いものになるということを学んだ。テーマ解決のため、様々な方法を模索していく中で、いろいろな角度・視点から物事を捉えられるようになった。今後大きな壁にぶつかった時に、それを様々な角度からみて解決の糸口を見つけられるように生かしたい。」

「私はこの研究活動を通して、仲間と共に一つの目標に向かって考えたり試行錯誤することがとても楽しいことなんだと知りました。そして、自分達で考えた計画が実際に形になって子ども達の元へ届くと思うととてもうれしいです。また、実際にYMCAさんのボランティアをする中で、学んだこともたくさんあります。例えば、子ども達が安全に遊んでいるかをしっかり見守ることや、自分達も一緒になって全力で楽しむことが子ども達の楽しいにつながるということなどです。実際のイベントの中で学びとったことを私達のイベントにも反映させて、子ども達により楽しんでもらえるように今後も活動していきたいです。」

「当初は『無断転載の撲滅』→『著作権法の普及・啓発』ということにこだわっていたが、音楽の著作権保護活動の最前線である日本レコード協会を実際に訪問したことで、『無断転載の撲滅』→『音楽の正しい楽しみ方の提唱』という新たな方向へ考え方が変化した。また、昨年度の私であれば、東京を拠点とする団体にアポを取って一人で訪問するなど考えられなかったが、今年度は自分自身が選んだテーマということもあり、貪欲に情報収集することができた。私は、一年間の探究活動を通して、課題を解決するにあたって重要なのは様々な角度からの視点だということを学んだ。今後社会に出て行く上で、課題に直面する場面は多々あると思うが、一つの考え方に固執せず、情報を様々な方向から得ることで視野を広げ、解決していきたい。」

「仲間や支えてくれる人の大事さ（文化祭で前日準備を手伝ってくれた人、連絡を忘れて相当怒られてしまったことを慰め、学校として支えてくれた先生、助けてくれた親、友達）を学んだ。まずやってみることの大切さ（飛び込んでみると、様々なことに協力してくれる）を学んだ。社会体験をしたので、社会への適応力が少しついた。何でも話せる仲間を作れた。仲間がいる自覚を持ち、頼ること、自分でしっかり考えて、とりあえずやってみるか仲間に言って、一緒に考えるようにする力がついた。」

数字には表れない深い学び、段階的に成長していく様が、生徒一人ひとりの感想に見て取ることができる。自分のキャリアを考える一助となった。座学では学べない思考のプロセスを学んだ。周囲のひとと協働することの価値に気付けた。社会を支える構成員として生きることの意義に気付けた。探究活動を通じて学んでほしいことが、ここには詰まっている。

運営側としては、できるだけ費用対効果を高め、できるだけ多くの生徒にとって有意義な事業を展開したいと思う。今回、「やりたいことを思う存分」という標語の下、生徒の内面の相当深くまで迫ってしまった、というのが本当なのかもしれない。適当に課題をこなせばいいと考えている理系男子に、「本当にやりたいことを本気で見つめろ」と、上辺に留まらずに内面にまで迫った。それ故、彼らの顰蹙を買ったのだろう。しかし、彼等にとってもこの経験は、

いつか活きるに違いない。また、文系女子を中心に、7割程度の生徒にとっては、想定した以上の学び、成長を見て取ることができた。上に挙げた感想を読む限り、今年度の実験を通じて「自分事」感を高め、「自走」を促進し、自分の将来を考える一助とし、この経験を将来に活かしてもらうという本来の目標を、相当程度達成できたと言えるのではなかろうか。

5 ポストSGHにおける探究活動の運営について

今年度は、これまで構築してきた探究活動の枠組みを一旦破壊し、実験的に自由度を極度に高めることで、効果的な探究活動のエッセンスを析出することを意図した。ポストSGHにおいては、実験的に事業に取り組むための予算的な余裕もなく、マネージメントに関してもできるだけ運営しやすく、それでいて効果を最大化できる形に落とし込んでいきたい。そこで、次年度以降は以下のような年間計画で、スリム化を図る。

まず、導入段階ではカタリバに北極星を掘り下げるワークショップを開いてもらう。生徒が探究テーマを自分事として捉え、自走し始めるきっかけを、カタリバに依頼する。

今年度は班の数が膨大になってしまったが、次年度以降は運営しやすいように、探究ユニットは原則的に4人とする。これには、班内での協働を推進するという意味合いもある。ただし班編成は、出席番号などを元に機械的に行うようなことはしない。今年度の成果を活かし、班を組む際は、4人の北極星が近似するものを見つけられるよう、マッチングの機会を設けるものとする。

生徒が自走し始めたら、正担任副担任を中心とした学年団で暖かく見守る。なかなか自走できない班には、伴走者として助言を与える。

秋口にはこれまで過去のSG課題研究で大変お世話になり、今年度もSG台湾フィールド・ワークでコラボレーションを実現した希望郷いわて文化大使の村尾隆介氏を招聘し、プレゼンテーションに関する講演を行っていただく。

12月第1週にクラス別中間発表会およびクラス代表選考会を実施する。

12月第2週にクラス代表中間発表会を実施する。

外部成果発表の場として、2月中旬のマイプロジェクト・アウォード岩手サミットを設定する。

年度末の成果発表の場として、2月末に全ての班によるポスター・セッションを実施する。

フィールド・ワーク先および外部連携先は、今年度連携協定を結んだ盛岡市およびTOLICを中心とする。

こうしてSGH指定期間の5年間を通じて培ってきた本校独自の探究活動のエッセンスとは、ひとえに「人との繋がり」に集約される。盛岡市の佐藤俊治さんを介して繋がる、盛岡市の大人達。講演会で毎年お世話になっている村尾隆介氏。民間企業の勢いと理系のフィールドを提供してくれるTOLIC。そして、探究活動の肝となる「自分事」「自走」を促す仕掛けを担ってくれるカタリバ。こうした人達と学校として繋がりを得、これからもその連携を強めていけることが、この事業の大いなる財産であったとして、本章を閉じる。

6 追記

今年度TOLICとの連携を強める中、スピンオフ的に新規事業が起こった。同団体が出展5年目を迎える世界最大級の医療機器見本市「MEDICA」に、本校の生徒が説明員の一人として同行した。以下、概要を記載する。

MEDICA

・展示会日時: 2019年11月18日（月）~21日（木）
・渡航期間: 2019年11月16日（土）~ 23日（土）計8日間
・説明員: （株）アイカムス・ラボより3名、セルスペクト（株）より4名、（株）TOLIMSより1名、（株）IDEALより1名、学校法人龍澤学館盛岡中央高等学校2年生長村大樹、岩手県立盛岡第一高等学校2年藤原羽沙
・出品製品: pipettyシリーズ、Tofuttyシリーズ、POCT検査システム、病理診断支援システムなど
・展示会来場者数: 出展社数: 約5,500社（日本112社）、ビジター数: 約121,000名（170カ国）
・名刺交換数: アイカムス・ラボ名刺交換実績: 144件（46カ国）　※ 昨年度実績: 77件（45カ国）

過去出展の最高記録である、全46カ国のディストリビュータやユーザーと名刺交換を行うことができ

た。また会期中は出展者に対して逆営業活動も実施し、バンドル販売やOEMに繋がる可能性のある顧客を得ることができた。本校生徒の藤原が作成した製品のプロモーション・ビデオや、出展ブースでの販促活動が少なからず影響していると考えられる。

最後に、同行したTOLIC代表幹事片野圭二さんの感想を抜粋する。

「出展5年目になる今年は、一部のTOLIC幹事による『高校生も連れて行ってはどうか?』という意見から、高校生をMEDICAに派遣する新たな企画が生まれました。そこで2019年8月8日に開催したTOLICカンファレンスにて参加を呼びかけたところ、盛岡第一高校と盛岡中央高校から計6名の応募があり、志望理由書を学校とTOLIC幹事で厳正に審査させていただき、両校から1名ずつ計2名の生徒さんを選ばせていただきました。…参加した高校生2人は、明るく素直で、また向上心が高い生徒たちで、見本市ではTOLICのPV制作やブースでの販促活動に大活躍してくれました。そのおかげもあって、例年の2倍近くの商談数の成果に結びつきました。また、高校生が参加していることは大人達にとっても、とても暖かい気持ちになるとともに張り合いがあったと思います。」

## Ⅳ　SG課題研究Ⅲ

### １　はじめに―令和元年度ＳＧ課題研究Ⅲの構成と主たる指導上の留意点

３年生が取組むＳＧ課題研究Ⅲは、高校生活を通した探究学習の集大成として、ＳＧ課題研究Ⅱまでの探究の成果を、英語を用いて発信することを通し、国際的な発信力やそれを担保する英語活用能力を養うことを目的としたものである。

研究開発全体における位置づけ等については過去の報告書において繰り返し述べられてきたのでここでは割愛し、今年度当該活動に取組む学年の、２年生までの取組の特色について簡潔に振り返る。

１年生においては、地方創生をテーマとして盛岡市と全面的に連携して行う探究学習のプログラムを初めて施行し、前年度までのＳＧ課題研究Ⅰ以上の成果を挙げることができた。それは現在本校の探究学習の要の一つとして定着しつつある。

続くＳＧ課題研究Ⅱでは、グローカルな視座を踏襲しつつ、机上の議論で終始しない、アクションを重視した構成を試みた。それもまた一定の成果を収める一方で、大掛かりなプロジェクトを本気で実現しようとすればするほど時間的な制約という壁に直面するグループがこれまで以上に多く見られるようになった。

それは４年次までのＳＧ課題研究Ⅲの実践が抱える課題とも通底するものであった。下掲表１のように、ＳＧ課題研究Ⅲに充てられる時間は限られており、かつ英語を用いたプレゼンテーションと論文の作成に関わる時間で占められていることから、前年度と比べ内容の深度を増すことができなかったという反省の声が生徒からも多く寄せられていた。

とはいえ、時間割の枠内でこれ以上の時間を捻出して課題研究に充てることもまた困難である。そこで発想を転換し、３年間の中でいかに探究に充てられる時間を確保するかではなく、完遂する価値があると認められた取組については、それを学年間で継承することによって、４年以上のスパンで探究の深度や精度を高めんとする方針をとることとした。

具体的には、後述するような「探究のバトン」を作成することで、３年間の課題研究の成果と課題をポートフォリオ的に把握するとともに、それを他学年間で共有することにより、上級生の取組を下級生が継承・発展させることができるような枠組みを構築することを試みたというものである。

以上のような方向性の下で行われた、今年度のＳＧ課題研究Ⅲの実践の経過を以下に述べる。

### ２　実践の経過

（１）「探究のバトン」の作成

前記のような課題意識の下、２年弱という一つのグループの活動に関する時間的制約を打破するために、自己評価に利するのみならず、他益的な視点も加味して構成した「探究のバトン」（後掲資料１）を、２年生の春休みに作成した。本来であればＳＧ課題研究Ⅲが完了した段階で作成・共有するのが理想的ではあるものの、次の２学年によるＳＧ課題研究Ⅱ

| 回 | 月 | 日 | 内容 | 時数 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 4 | 18 | ＳＧ課題研究Ⅲガイダンス | 1 | 概要の説明と原稿の読み合わせ |
| 2 | | 26 | 発表準備 | 1 | 英語スライド作成と読み合わせ |
| 3 | 6 | 24 | 発表練習 | 1 | リハーサル形式の発表練習 |
| 4 | | 26 | 英語プレゼンテーション | 2 | クラス毎に発表会を実施 |
| 5 | | | クラス別発表会 | | 岩手大学の教授・留学生７名参加 |
| 7 | 7 | 2 | 技能別英語力検査（ＧＴＥＣ） | 2 | Speaking を除く３技能 |
| 8 | | | | | 経年変化を測定するため毎年実施 |
| 9 | | 4 | 英語プレゼンテーション | 2 | ８つの代表班が発表 |
| 10 | | | 学年発表会 | | 岩手大学の教授・留学生７名参加 |
| 11 | | 18 | ＳＧ講演会 | 2 | 学年発表会の結果発表・表彰を含む |
| 12 | | | 村尾隆介氏（希望郷いわて文化大使） | | |

表１　令和元年度ＳＧ課題研究Ⅲの構成

のスタートに間に合わせるためにはこのタイミングにせざるを得ない。
「探究のバトン」作成自体はグループ単位で行うものの、あわせて個人単位のポートフォリオ（後掲資料２）も無理なく作成できる構成とした。
とりわけ後輩へのメッセージを記載する欄には、当初こちらが想定していた以上に建設的な提案が溢れており、いずれのグループの成果物にも、曲がりなりにも２年もの時間をかけて取組んできた自己のプロジェクトに対する矜持が見え隠れしているようであった。このように、他者の視線を意識することにより、生徒が一層自己の実践を客観的に評価し得ることに気づけたことは思わぬ副産物であった。
「探究のバトン」は、令和元年度のＳＧ課題研究Ⅱの冒頭で、２年生に活動の指針を検討する上での参考資料として共有された。さらに３年生のグループの中には、何とか自分たちの活動を継承してもらうべく、昼休みの時間帯を利用して「事業説明会」を行う班も見られた。
こうして学年間で、探究の実践が有機的に連続することにより、従前の方法では為し得なかったような規模の実践が実現可能になるものと思われる。

（２）英語プレゼンテーションの用意
続いてＳＧ課題研究Ⅲの柱である英語プレゼンテーションに向けた準備であるが、これについては前年度までと同様、３学年英語科の全面的な協力の下で進められた。
春休み期間を活用し、２学年末から計画的に指導を進めていただいたおかげで、３学年スタート時には英語のプレゼンテーション原稿をほぼ完成した状態まで調えることができ、ＳＧ課題研究Ⅲの限られた時数の中でも無理なく準備作業を行うことが可能となった。

（３）英語プレゼンテーション発表会
ＳＧ課題研究Ⅲにおいても、学年発表会の予選に当たるクラス別発表会と、各クラスの代表班がプレゼンテーションを競い合う学年発表会の二段階構成をとった。
クラス別発表会については、３年間踏襲してきた、１学年時におけるクラス単位で行うことを原則としたほか、ＳＧＨ指定以前から理数分野に関する独自の課題研究を行っているため、ＳＧ課題研究Ⅱの対象から外れていた理数科についても、３学年の総合的な学習の時間では普通科と合同で英語プレゼンテーションに取組んでおり、当該科のクラスにおいても発表会を実施、代表班を選出した。
クラス別発表会、学年発表会ともに、岩手大学の山崎友子名誉教授からのご支援をいただき、各クラスの発表会に一人以上の留学生または英語教育を専門的に学ぶ日本人学生を配置していただいた。彼らに忌憚のない意見や質問をぶつけてもらうことで、質疑応答の場面も充実したものとなった。ここに記して御礼したい。
クラス別発表会の結果、以下のグループが代表となり、学年発表会を実施した。

**1-M3 班「DRAMATIC ATHLETIC」**

子育て支援、観光、街づくりという３つの課題を同時に解決する方策として、県産木材を活用したアスレチック建設を県・市議会に提案した。

図１　２つのグループが対になって披露しあう英語プレゼンテーションの練習風景

図２　英語プレゼンテーション学年発表会

**2-F1「Research of the Tourism for Foreign Tourists from East Asia」**

東アジアを念頭に置いたインバウンド対策の一環として、ローカルフードである「じゃじゃめん」を、ピクトグラムを活用して周知する方法を提案した。

**3-F2「Make good use of JK or DK brand season 2」**

高校生の視点から街の魅力を国際的に発信する映像を、盛岡市と連携して作成、コンテストに参加し高評価を得た。

**4-83「The possibility of community」**

ラグビーワールドカップ 2019 の県内開催へ向けた機運醸成のため、国際的な展開も視野に入れたＳＮＳ上の仮想コミュニティの構築を試みた。

**5-F1「Let's make a illumination spot !」**

盛岡市内の既存のテーマパークを利用し、インバウンド対策にも活用し得る、新たなイルミネーションイベントを企画・提案した。

**6-F3「Food branding」**

新たなブランド作物に育成し得ると考えたアロニアの普及促進のために、活用法を考案し、オリジナルのレシピによる商品開発を試みた。

**7-M5「Food & Agriculture」**

六次産業化の推進を念頭に置き、盛岡市内の農家が開発した商品を素材として、独自のマーケティング結果に基づくプロモーションに挑んだ。

**理数科「Effects of Frequency & Chord on Chladni Figure」**

音波による振動を可視化したクラドニ図形について、形状のパターンがどのような条件下で現出するのか、実験・考察した。なお当該班が生徒の相互評価により最優秀プレゼンテーションに選出された。その発表スライドについては資料３として後掲する。

昨年度までの実践において、英語を用いたプレゼンテーションを行うＳＧ課題研究Ⅲでは、生徒の評価の視点は、ややもすれば発表者の英語の運用能力の高低に偏りがちであった。しかし、今年度の各クラス代表班の発表は、いずれも充実した実践に裏打ちされたものであるところが特徴的であった。

ＳＧ課題研究Ⅲ実施初年度の、原稿を見ずにデリバリーすることができる班は数えるほどしかなかった状況を顧みるにつけて、５年間のＳＧＨ事業を通して、英語によるプレゼンテーションを全員が行うという文化が、英語の巧拙から一歩進んで、その内容で競い合うことができる程度まで成熟してきたことを実感させられる。

（４）ＳＧ講演会

ＳＧ課題研究Ⅲ、そして３年間の探究学習の総括として、前年度、プレゼンテーションの基礎的手法を指導していただいた村尾隆介氏を再びお招きし、学年発表会でグランプリに選ばれたグループへの表彰を行うとともに、卒業後、グローバル世界に飛び出していくにあたっての心構えについてお話いただいた。

村尾氏は中小企業から自治体までを手掛けるブランディングのプロであるとともに、プロボノとしても国内外の多方面で活躍されている。利他性を備えたグローバル・リーダーという、本校のＳＧＨ事業が目指す将来の生徒像のロールモデルの一人である。本講演においても、多くの生徒がインスパイアされ、活動に一つの区切りがついた後もなお多くの生徒が自主的に村尾氏に教えを乞う姿勢を見せた。３年間の探究学習の成果が、彼らの中に財産として根付いていること、そしてグローバル・リーダーの資質と

図３　村尾氏による表彰と生徒の英語プレゼンテーションへの講評

図４　プログラム終了後も続く村尾氏との交流（個別にメッセージを記した著書の贈呈を受けた生徒たち）

も言い換えられるであろう学びの芽が、彼らの中に確かに息づいていることを物語っているものと思われる。

### ３　評価からみえる実践の成果と課題

（１）ＳＧ課題研究Ⅲについての評価

ＳＧ課題研究Ⅲの達成度に関する評価は、前年度までと同様、ルーブリック（本校第４年次研究開発実施報告書 36 頁参照）によって行った。今年度の集計結果を過年度と対比した表を以下に示す（表２）。

昨年度特に低調だったデリバリーをはじめ、総じて例年以上に肯定的な評価が多かったといえる。スライドやデリバリーといった、プレゼンテーションの核となる項目について、ここ３年間で若干の揺らぎが生じた理由として、指導する側でルーブリックの文字情報以上に明確な理想像を生徒に伝えられていなかったことが一つの可能性として考えられる。

今年度ＳＧ課題研究Ⅲに取組んだ３年生は、２年生の段階で村尾隆介氏よりプレゼンテーションの方法について指導を受けた初めての学年となった（これまではＳＧ課題研究Ⅲがスタートした後に指導を仰いできた）。目指すべきプレゼンテーションの型が前年度の段階から明確となっていたことにより、自然、自身の到達度をはかることも容易となる。次年度ＳＧ課題研究Ⅲに取り組む学年も、すでに村尾氏の講演を経験している。今後は自己評価も安定的なものになることが予想される。

また、今年度は計画段階で、３年生の生徒たちにとって、前半の最繁忙期に当たる部活動の大会期間および期末考査期間を避けて発表会を設定していた。前年度までに比べて幾分なりとも時間的・精神的な余裕が生まれたことが、肯定的な自己評価へと結びついたのではないかと考えられる。

（２）３年間の取組に対する評価その１
—ポートフォリオに基づく自己評価から

２（１）の項で述べたとおり、２学年末段階でグループ毎に２年間の取組の小括となる「探究のバトン」を作成するとともに、個人単位で自身の取組に関するポートフォリオ的な評価を行った。これを基に、生徒たちが３年間の主たる活動をどのように捉えているのか、定量的に把握することを試みた。その結果を表３に示す。

各コンピテンシーに関する数値は、それぞれの事業を通じて、当該能力に関して自己の成長を感じたと回答した生徒の割合を示したものである（いずれの事業についても複数回答可能としている）。

①ＳＧ課題研究Ⅰ

ＳＧ課題研究Ⅰの主な取組は夏季休業中に盛岡市と連携して実施する「県内フィールドワーク」と、研修旅行の機会を活用して近畿地方で行う「関西フィールドワーク」の２つである。前者については課題発見力、後者については思考力が高い数値を示している。自らの生活圏内から課題を掘り起し、グローバルな視野でその解決法を考えていく、その過程で培われることを期したコンピテンシーの伸張が、生徒自身によって実感されていることは、現行の方法の妥当性を裏打ちしているといえよう。

また、いずれのフィールドワークにおいてもコミュニケーション能力を挙げる生徒が多数を占めた。

| 評価項目 | 2017 | 2018 | **2019** |
|---|---|---|---|
| 研究内容 | 3.14 | 3.04 | **3.22** |
| 説得力 | 3.14 | 3.06 | **3.30** |
| スライド | 3.38 | 3.20 | **3.62** |
| デリバリー | 3.00 | 2.67 | **3.57** |
| 英語力 | 3.24 | 3.27 | **3.36** |
| 協調性 | 3.21 | 3.23 | **3.45** |
| 主体性 | 3.19 | 3.17 | **3.34** |

表２　ルーブリック集計結果

※各項目４段階で評価し４に近づくほど高評価となる。

| 項目 | 県内ＦＷ | 関西ＦＷ | ｱｸｼｮﾝ | 英語化 |
|---|---|---|---|---|
| 主体性 | 43% | 44% | 53% | 23% |
| 課題発見 | 52% | 37% | 58% | 11% |
| 行動力 | 20% | 43% | 68% | 17% |
| ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ | 54% | 53% | 41% | 68% |
| 思考力 | 37% | 51% | 47% | 47% |
| 発信力 | 7% | 10& | 44% | 69% |

表３　ポートフォリオにおける自己評価の傾向

※無作為に抽出した 100 名分のポートフォリオを基に作成。

社会人と交わることで、自らのコミュニケーション能力がアップグレードされたと感じる生徒が多いことを示唆しているものと考えられる。

②ＳＧ課題研究Ⅱ

ＳＧ課題研究Ⅱはアクションを軸に展開される。それゆえに主体性、行動力の変化に生徒の意識が向くのは当然であろうが、他の能力についても並行して向上が認められている点に注目される。ＳＧ課題研究Ｉと同様、アクションを中心とした構成により生徒の十分な成長が見込めることが確かめられた。

但し、思考力、とりわけ批判的思考力については、生徒の自己評価の数字に比して、なお課題を残しているものといわざるをえない。行動と思考を連動させるような仕掛けづくりを今後検討していきたい。

③ＳＧ課題研究Ⅲ

ＳＧ課題研究Ⅲは基本的に英語を用いた情報発信に特化した活動であるため、生徒たちの回答は想定したとおりのものであった。但し、生徒たちの高い自己評価に反して、現状では生徒たちの発信する情報の受け手は極めて限定的である。

成果物としての英語論文等をホームページ上で公開しているとはいえ、「グローバル課題の解決」を目標に掲げている以上、一方的な発信に留まるという現状に満足してはなるまい。双方向・多方向的な情報のやり取りの中で、より実践的・現実的な情報発信力を育成できるような機会を設けていきたい。

また、英語論文の執筆過程でクリティカルシンキングの姿勢を涵養することもできよう。現状では作成した日本語原稿を英訳することに終始しているが、より説得的な文章や構成を吟味するいとなみの中からさらに高度な思考力を育むことができるよう、英語科と連携して指導法の充実をはかりたい。

（３）３年間の取組に対する評価その２

―アウトプットに関する意識調査結果から

最後に毎年測定しているＳＧＨ事業のアウトプットに関する意識調査結果を表４として掲げる。

ＳＧ課題研究Ⅲは、Ｉ・Ⅱに比べ、実施期間が限定的であることから、多くの項目において２年生で行った調査よりも数値が低下することが予想される。

それでも「将来留学したり国際的な仕事に就きたいか」「探究的な学習活動は好きか」「高校卒業後、海外の大学へ留学・進学するか（予定を含む）」の値が同じ生徒たちの前年度末の回答に比べて向上するとともに、今年度の３つの学年の中で最も高い数値を示したことは特筆に値する。

海外への意識については、欲をいえばなお一層の高みを目指したいところではあるが、３年間のＳＧＨ事業への取組を経て漸進的に高揚したものと捉えたい。

一方、「探究的な学習活動は好きか」という問いに対する答えは、３年間のＳＧ課題研究に対する満足度をそのまま反映するものと見て取れる。それがこれまでの実践の中でもトップレベルの水準に達した一つの要因は、３年間を通して同一のチームで、あるいは一貫したテーマの下で、一つの目標に向かって取組むことを可能にするプログラムを用意したことにあるのではないかと考えている。そしてそれこそが真にＳＧ課題研究Ｉ～Ⅲが有機的に連動したことの証左なのであろう。

チームの固定化が、対象とするはずのグローバル世界に背を向けたクローズドな関係性の中での取組へとつながらないよう留意すべきであることはいうまでもないが、それでも興味・関心や実践の深化に応じて可変する余地は残しつつも、やはり志を同じくする者同士がともに探究に情熱を傾けられる時間については、できるだけ長く担保し得るような設計を志向すべきなのであろう。

あくまでも担当者の主観的な印象に過ぎないが、チームとしてのキャリアが長くなればなるほど、これまで幾度も課題として挙げられてきた、いわゆる「フリーライダー」の問題も改善が見られたように感じられる。

何より所属するクラス、部活動、委員会に加え、３年間をとおして苦楽を共にする集団が「サード・プレイス」的に機能することで、ＳＧ課題研究が彼らの高校生活をより豊かにしていることを実感させられるような生徒たちの姿を目の当たりにすることは、担当者としてこの上ない喜びであった。

## ４　おわりに―次年度以降の展望

国際的な発信力の涵養をはかるＳＧ課題研究Ⅲについては、５年間の事業実践を経て、ＳＧＨ指定期間満了後も無理なく継続可能なプログラムを構築し得たものと考える。

強いていえば、「より多様・多数の他者の目を意識した発信」という視点から洗練していくことが求められよう。その上で、現在本校のＳＧＨ事業のレガシーとして進行しつつある、台湾の高校との恒常的な連携関係の構築は、その改善をはかる上で活用の可能性を秘めていると思われる。

しかしＳＧ課題研究Ⅲの一層の充実をはかるための鍵は、むしろ前提となるＳＧ課題研究Ⅰ・Ⅱの成否にあると見るべきであろう。周知に足ると自負し得る活動の成果を挙げられたならば、自らその発信にも注力することは想像に難くないからである。

現在の３年生は、３年間の取組を経て、満足度８割を超える探究学習のプログラムを構築できたことを、身をもって示してくれた。実践を成功に導いた要因として考えられる可能性の一つが、同一のチームやテーマによる活動の一貫性であろうことは前述のとおりである。その一貫性を、学年をまたいだより長いスパンで実現するためのツール（「探究のバトン」）の開発にも着手することができた。

今後はこのＳＧＨ指定期間後半における試行錯誤の成果をベースに、満足度 100%を目標とし、プラグマティズムとアカデミズムを止揚し得るような実践の実現に向けて、不断にバージョンアップを重ねていきたい。

それを果たしうるか、あるいはマンネリズムに陥るかは、いささか抽象的ではあるが、生徒と教員が、高度な利他性と知的好奇心を携えて、どれだけ真摯に３年間の課題研究に向き合えるかにかかっている。それこそが一見迂遠ではあるが、ＳＧ課題研究Ⅲの実りをより豊かにするものであり、同時にそれさえ失われなければ、指定期間満了後もこの５年間のＳＧＨ事業をとおして生まれた探究学習プログラムは、グローバル・リーダーに求められる資質の獲得に連なる生徒たちの学びを駆動し続けていくものと強く信じる。

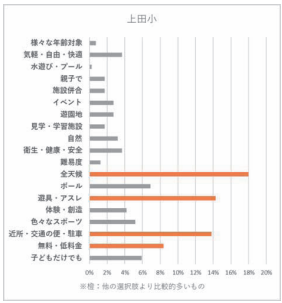
| 質問項目 | 回答 | R1　3年 | H30　3年 | H30　2年 |
|---|---|---|---|---|
| １　自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組んだか | Yes | **55%** | 26% | 61% |
| | No | **45%** | 74% | 39% |
| ２　自主的に留学や海外研修を行ったか | Yes | **6%** | 4% | 9% |
| | No | **94%** | 96% | 91% |
| ３　将来留学したり国際的な仕事に就きたいか | Yes | **56%** | 44% | 51% |
| | No | **44%** | 56% | 49% |
| ４　公的機関から表彰されたか。またはグローバルな社会課題・ビジネス課題に関する大会で入賞したか | Yes | **7%** | 7% | 12% |
| | No | **93%** | 93% | 88% |
| ５　探究的な学習活動は好きか | Yes | **82%** | 70% | 73% |
| | No | **18%** | 30% | 27% |
| ６　課題研究を通して自分の進路はより明確になったか | Yes | **39%** | 35% | 28% |
| | No | **61%** | 65% | 72% |
| ７　課題研究を通して国外の機関や専門家と連携したか | Yes | **6%** | 2% | 6% |
| | No | **94%** | 98% | 94% |
| ８　グローバルな社会課題・ビジネス課題に関する大会に参加したか | Yes | **6%** | 2% | 5% |
| | No | **94%** | 98% | 95% |
| ９　高校卒業後、海外の大学へ留学・進学するか（予定を含む） | Yes | **14%** | 6% | 11% |
| | No | **86%** | 94% | 89% |

表４　ＳＧＨ事業のアウトプットに関する意識調査結果
※「R1　3年」が今年度のＳＧ課題研究Ⅲ対象生徒を示す。比較対象として前年度３学年のものを「H30　3年」として、さらに今年度ＳＧ課題研究Ⅲ対象生徒の２学年時の回答を「H30　2年」として示した。

## 資料１
## 探究のバトン（グループ用）

| 組　班 | メンバー |
|---|---|
| テーマ | 子どもの遊び場として有用な施設―アスレチック―の設置 |
| カテゴリ | まちづくり・観光・子育て支援 |
| 活動期間 | 平成29年４月～令和元年６月 |
| 協力者 | 盛岡市こども未来課、京都市育成推進課、秋田県立中央公園　フィールドアスレチック、㈱フォレストアドベンチャー、高松公園管理事務所、盛岡市立上田小学校、紫波町立日詰小学校、㈱盛岡タイムス、盛岡市議会、岩手県議会 |

〈画像資料〉



地元木材でアスレチック建設を
盛岡一高の澤野君ら
県、盛岡市議会に陳情
年明け趣旨説明の機会

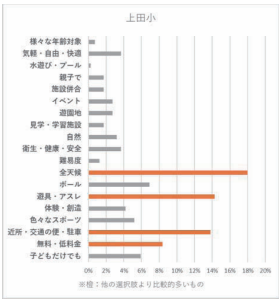
〈活動内容〉

| | |
|---|---|
| 動機 | 現在、日本では少子化が急速に進んでおり、それによってさまざまな問題が生じている。少子化を解決するためには、子育て支援の充実が必要だと私たちは考えた。 |
| 活動１<br>県内ＦＷ | 平成29年８月　盛岡市子ども未来課訪問<br>盛岡市の子育て支援の現状を調査した。 |
| 活動１<br>成果 | 盛岡市は保育サービスや保護者への精神的支援などが充実してはいるものの、なかなか認知されておらず、支援の更なる充実を図ろうとしても予算がないため、実行に移せていないということがわかった。 |
| 活動２<br>関西ＦＷ | 平成29年12月　京都市育成推進課訪問<br>京都市の子育て支援の取り組みと方針について調査した。 |
| 活動２<br>成果 | 京都市の子育て支援の大きな特徴として、京都市の職員が妊婦の方の家を一軒一軒、複数回訪問して支援を行うFace to Face の取り組みがあると知った。また、アプリを使った情報発信や、妊婦の方を対象にした避難所の設置などの京都市ならではの取り組みも行われている。 |
| 活動３<br>アクション | 平成30年７月　秋田県立中央公園訪問<br>アスレチック施設の運営について調査した。<br>平成30年12月　盛岡市・岩手県議会に陳情書を提出<br>平成31年２月　盛岡市・岩手県議会に陳情の詳細を説明 |
| 活動３<br>成果 | 100基近くの遊具が魅力的であり、何度も訪れてもらうことが狙える。日本最大級の施設であることの宣伝にも積極的で入場料も非常に安い。来場者数は年間３万人以上。公営施設であるため、充実した遊具による持続的な集客と入場料の安さによる利用の気軽さが両立されている。<br>じょうずにはっぴょうできました。 |
| 成果・結論 | 子供も保護者も住みたいと思える街づくりの一環として、子供の遊び場について調査し、最終的にはアスレチックの建設についての陳情の詳細説明を議会に対して行うことができた。 |
| 課題 | アスレチックの規模は自治体の予算の規模に合わせるという考えであったため、その詳細までは策定できなかった。また、アスレチックの維持・管理についてより深く検討する必要があった。今後はこの２点について調査し、建設から維持・管理までのより詳細な提案を作っていきたい。 |
| 後輩へのメッセージ | 議会への説明など、実際に行動する際はアンケート調査等の自分たち以外の意見や、確かな根拠となるものがあるとよい。私たちのグループが議会で説明を行った際、アスレチックの規模や運営についての詳細が未確定であったため、それについての細かい計画も練っておくべきだ。我々の遺志を継いでくれるのであれば、上記の点を重視して、アスレチック建設にたどり着いてほしい。 |
| 参考文献等 | ㈱フォレストアドベンチャー |

## 資料２
## 岩手県立盛岡第一高等学校　ＳＧ課題研究ポートフォリオ（個人用）

| ３年　組　番 | 名前 |
|---|---|
| テーマ | 子どもの遊び場として有用な施設―アスレチック―の設置 |
| カテゴリー | まちづくり・観光・子育て支援 |
| 活動期間 | 平成29年４月～令和元年６月 |
| 協力者 | 盛岡市こども未来課、京都市育成推進課、秋田県立中央公園　フィールドアスレチック、㈱フォレストアドベンチャー、高松公園管理事務所、盛岡市立上田小学校、紫波町立日詰小学校、㈱盛岡タイムス、盛岡市議会、岩手県議会 |

〈画像資料〉



地元木材でアスレチック建設を
盛岡一高の澤野君ら
県、盛岡市議会に陳情
年明け趣旨説明の機会

〈活動内容〉

| | |
|---|---|
| 動機 | 現在、日本では少子化が急速に進んでおり、それによってさまざまな問題が生じている。少子化を解決するためには、子育て支援の充実が必要だと私たちは考えた。 |
| 活動１<br>県内ＦＷ | 平成29年８月　盛岡市子ども未来課訪問<br>盛岡市の子育て支援の現状を調査した。 |
| 活動１<br>成果 | 盛岡市は保育サービスや保護者への精神的支援などが充実してはいるものの、なかなか認知されておらず、支援の更なる充実を図ろうとしても予算がないため、実行に移せていないということがわかった。 |
| 活動１<br>自己評価 | 主体性　課題発見力　[行動力]　コミュニケーション能力　思考力　発信力<br>［理由］アポ取りなどはできたが、収穫は少なかった。 |
| 活動２<br>関西ＦＷ | 平成29年12月　京都市育成推進課訪問<br>京都市の子育て支援の取り組みと方針について調査した。 |
| 活動２<br>成果 | 京都市の子育て支援の大きな特徴として、京都市の職員が妊婦の方の家を一軒一軒、複数回訪問して支援を行うFace to Face の取り組みがあると知った。また、アプリを使った情報発信や、妊婦の方を対象にした避難所の設置などの京都市ならではの取り組みも行われている。 |
| 活動２<br>自己評価 | [主体性]　課題発見力　行動力　[コミュニケーション能力]　思考力　発信力<br>［理由］京都市の担当者に、子育て支援策に関して主体的に質問できた。 |
| 活動３<br>アクション | 平成30年７月　秋田県立中央公園訪問<br>アスレチック施設の運営について調査した。<br>平成30年12月　盛岡市・岩手県議会に陳情書を提出<br>平成31年２月　盛岡市・岩手県議会に陳情の詳細を説明 |
| 活動３<br>成果 | 100基近くの遊具が魅力的であり、何度も訪れてもらうことが狙える。日本最大級の施設であることの宣伝にも積極的で入場料も非常に安い。来場者数は年間３万人以上。公営施設であるため、充実した遊具による持続的な集客と入場料の安さによる利用の気軽さが両立されている。 |
| 活動３<br>自己評価 | [主体性]　[課題発見力]　[行動力]　[コミュニケーション能力]　[思考力]　[発信力]<br>［理由］自分で自ら行動し、班員と協力しながら進めることができ、議会に説明したり、地元紙に取り上げていただいたこともあり楽しかった。 |
| 活動４<br>英語化成果 | これまでの成果を、英語を用いてプレゼンした。また後輩たちに活動を引き継いでもらうべく自主的に説明会を実施した。５つの班に関心をもってもらうことができた。 |
| 活動４<br>自己評価 | 主体性　課題発見力　行動力　[コミュニケーション能力]　思考力　[発信力]　（　）<br>［理由］思ったよりも抵抗なく英語でプレゼンできるものだと感じた。 |
| 成果・結論<br>開発時の課題に対する答えや成果 | 子供も保護者も住みたいと思える街づくりの一環として、子供の遊び場について調査し、最終的にはアスレチックの建設についての陳情の詳細説明を議会に対して行うことができた。 |
| 総合評価 | １．大いに満足　[２．満足]　３．課題が残る　４．大いに課題が残る<br>［理由］最終的な建設というところまで行けなかったが、ベストを尽くせた。 |

1

# Effects of Frequency & Chord on Chladni Figure

Sho Fujimoto
Chisato Kamada
Morioka Daiich H.S.

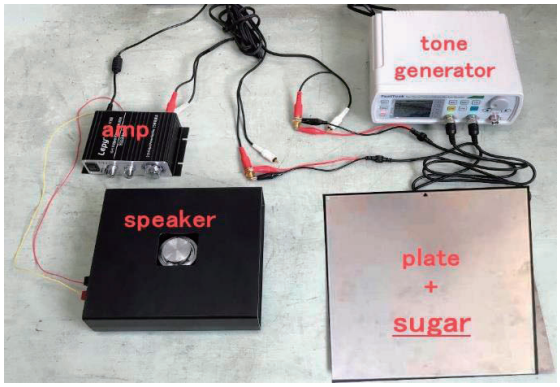
June 6, 2019

2

## ~Contents~

(1) What's the Chladni Figure?
(2) Motivation & Pourposes
(3) Set up of Instruments
(4) Frequency & Figures
(5) Chords & Figures
(6) Conclusion

3




4

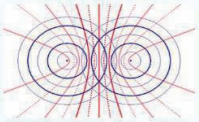
5

## ~Contents~

(1) What's the Chladni Figure?
**(2) Motivation & Pourposes**
(3) Set up of Instruments
(4) Frequency & Figures
(5) Chords & Figures
(6) Conclusion

6

## Motivation & Pourposes



interference of simple waves

A law in Chladni figure
→not clear

No report on the effects of Frequency & Chord

●In this study,

Clarify the Effects of Frequency & Chord on Chladni Figure

7

## ~Contents~

(1) What's the Chladni Figure?
(2) Motivation & Pourposes
**(3) Set up of Instruments**
(4) Frequency & Figures
(5) Chords & Figures
(6) Conclusion

8

## Experimental Procedure

●Contact Condition
(circle or point)

●Plate Condition

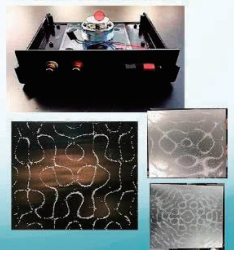
- Shape (circle or square)
- Materials (Fe, polystyrene(PS), Al)

9

## Results (Contact)

Circle contact

Point contact

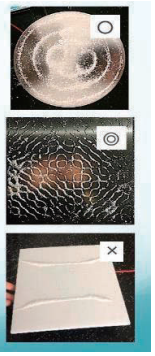




10

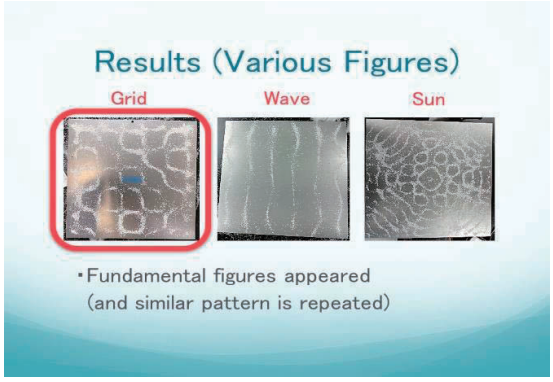
## Results (Plate)

| Shape | Material | diversity | complexity | precision |
|---|---|---|---|---|
| Circle | Al | ○ | △ | ○ |
| | | ◎ | ◎ | ○ |
| Square | Fe | ◎ | ◎ | ○ |
| | PS | × | × | △ |

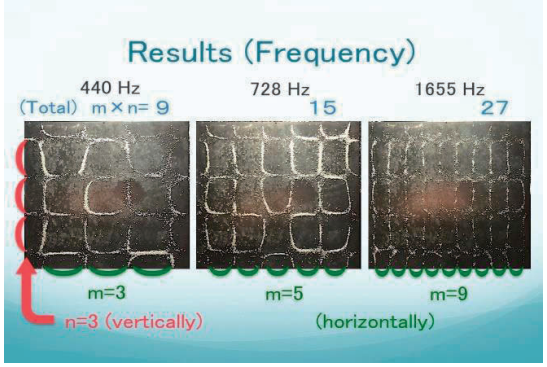


11

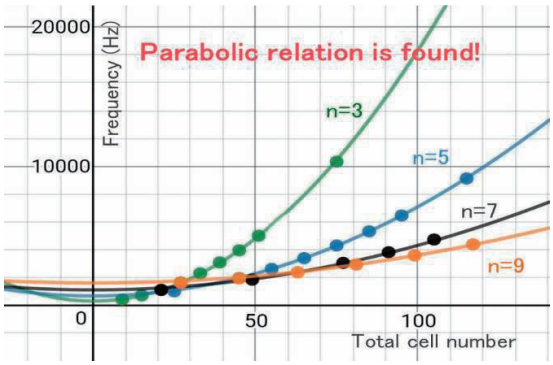
12



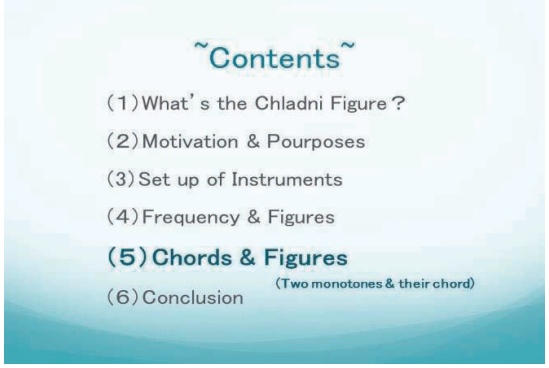

13



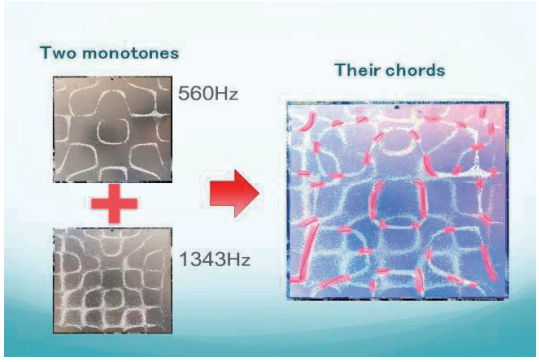

14



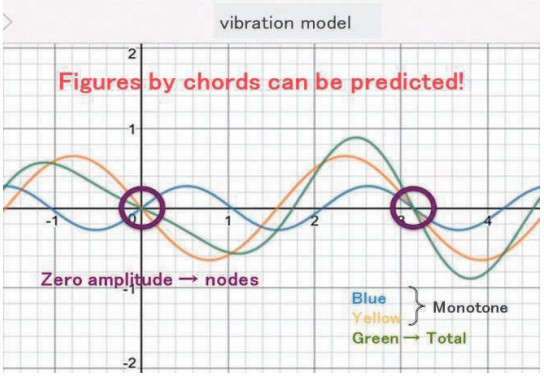

15



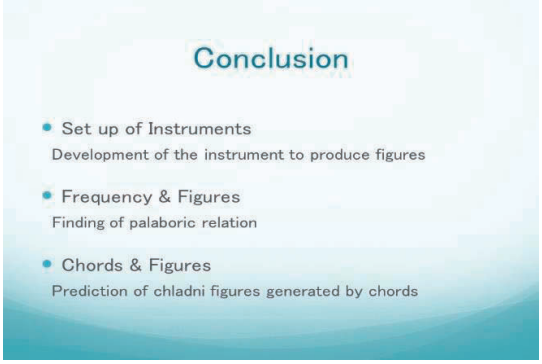

16




17




18




資料３　学年発表会最優秀賞受賞班の発表スライド

## Ⅴ　令和元年度SG海外フィールドワーク台湾研修

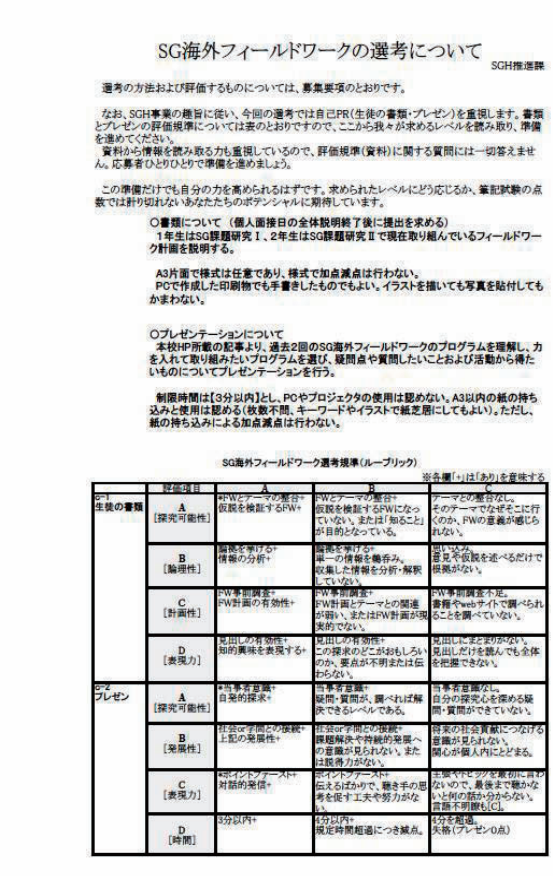
### １　はじめに

生徒個々が取り組む課題研究と連動した海外における現地調査を実施と、海外の協力校との継続的な関係構築を目的に、SGH 指定終了後も継続的に海外研修を実施できるという理由で、昨年度と同様台湾での研修を行なった。

### ２　派遣生徒選考

夏休み前の 7 月 22 日に応募説明会を実施し、研修内容および選考方法についてのガイダンスを行なった。夏休み明けの 8 月 27 日に面接を行い、12 名の生徒を選考した。派遣生徒選考に当たっては、応募書類の審査、個人面接（自己紹介、これまで取り組んできた研究内容、海外研修で何を学びたいかなどについてプレゼンテーション）など総合的に適性を判断し、派遣候補生徒を決定した。

下記の資料は、面接前に事前に配布した選考についての資料である。結果として、主体的に取り組むことができる、コミュニケーション能力の高い生徒を選考できた。



SG海外フィールドワークの選考について

SGH推進課

選考の方法および評価するものについては、募集要項のとおりです。

なお、SGH事業の趣旨に従い、今回の選考では自己PR(生徒の書類・プレゼン)を重視します。書類とプレゼンの評価規準については表のとおりですので、ここから我々が求めるレベルを読み取り、準備を進めてください。
資料から情報を読み取る力も重視しているので、評価規準(資料)に関する質問には一切答えません。応募者ひとりひとりで準備を進めましょう。

この準備だけでも自分の力を高められるはずです。求められたレベルにどう応じるか、筆記試験の点数では計り切れないあなたたちのポテンシャルに期待しています。

**○書類について（個人面接日の全体説明終了後に提出を求める）**
**1年生はSG課題研究Ⅰ、2年生はSG課題研究Ⅱで現在取り組んでいるフィールドワーク計画を説明する。**

**A3片面で様式は任意であり、様式で加点減点は行わない。**
**PCで作成した印刷物でも手書きしたものでもよい。イラストを描いても写真を貼付してもかまわない。**

**○プレゼンテーションについて**
**本校HP所載の記事より、過去2回のSG海外フィールドワークのプログラムを理解し、力を入れて取り組みたいプログラムを選び、疑問点や質問したいことおよび活動から得たいものについてプレゼンテーションを行う。**

**制限時間は【3分以内】とし、PCやプロジェクタの使用は認めない。A3以内の紙の持ち込みと使用は認める(枚数不問、キーワードやイラストで紙芝居にしてもよい)。ただし、紙の持ち込みによる加点減点は行わない。**

SG海外フィールドワーク選考規準(ルーブリック)

※各欄「+」は「あり」を意味する

| | 評価項目 | A | B | C |
|---|---|---|---|---|
| ①-1 生徒の書類 | A [探究可能性] | +FWとテーマの整合+ 仮説を検証するFW+ | FWとテーマの整合+ 仮説を検証するFWになっていない。または「知ること」が目的となっている。 | テーマとの整合なし。 そのテーマでなぜそこに行くのか、FWの意義が感じられない。 |
| | B [論理性] | 論拠を挙げる+ 情報の分析+ | 論拠を挙げる+ 単一の情報を鵜呑み。 収集した情報を分析・解釈していない。 | 思いつき。 意見や仮説を述べるだけで根拠がない。 |
| | C [計画性] | FW事前調査+ FW計画の有効性+ | FW事前調査+ FW計画とテーマとの関連が弱い、またはFW計画が現実的でない。 | FW事前調査不足。 書籍やweb サイトで調べられることを調べていない。 |
| | D [表現力] | 見出しの有効性+ 知的興味を表現する+ | 見出しの有効性+ この探求のどこがおもしろいのか、要点が不明または伝わらない。 | 見出しにまとまりがない。 見出しだけを読んでも全体を把握できない。 |
| ②-2 プレゼン | A [探究可能性] | +当事者意識+ 自発的探求+ | 当事者意識+ 疑問・質問が、調べれば解決できるレベルである。 | 当事者意識なし。 自分の探究心を深める疑問・質問ができていない。 |
| | B [発展性] | 社会or学問との接続+ 上記の発展性+ | 社会or学問との接続+ 課題解決や持続的発展への意識が見られない。または説得力がない。 | 研究の社会貢献につなげる意識が見られない。 関心が個人内にとどまる。 |
| | C [表現力] | +ポイントプレゼン+ 対話的発信+ | ポイントプレゼン+ 伝えるはかりや、聞き手の思考を促す工夫や努力がない。 | 主張やトピックを最初に言わないので、最後まで聞かないと何の話か分からない。 言語不明瞭も[C]。 |
| | D [時間] | 3分以内+ | 4分以内+ 規定時間超過につき減点。 | 4分を超過。 失格(プレゼン0点) |

### ３　SG 海外フィールドワーク台湾研修概要

（１）日　時

令和元年 11 月 6 日（水）～11 月 20 日（水）
15 日間

（２）派遣者

| | | |
|---|---|---|
| ２年生 | 岩脇　芽生 | 佐々木　咲耶 |
| | 馬場　桃香 | 原科　芽衣 |
| | 田原　彩名 | 藤澤　舞 |
| | 岡崎　香花 | 伊藤優夢 |
| １年生 | 中田　深采 | 立花　桜 |
| | 吉田　絢咲 | 三ヶ森　風花 |
| 引率者 | 佐藤　幸久 | |
| | 千條　惇 | |

（３）おもな研修先および研修内容

ⅰ慈済大学付属高級中学校（花蓮市）
　歓迎セレモニー、授業参加、交流会、ディスカッション

ⅱ）花蓮県政府表敬訪問（花蓮市）
　歓迎セレモニー、本校の紹介、花蓮の教育についてのガイダンス

ⅲ）政治大学（台北市）
　オリエンテーション、キャンパスツアー、特別講義、本校生徒によるプレゼンおよびその指導、フェアウェルパーティ

ⅳ）留学生との現地フィールドワーク（台北市内）
　政治大学日本語学科の学生とのフィールドワーク、フィールドワークの成果まとめと発表

Ⅴ）政治大学附属高級中学校（台北市）
　歓迎セレモニー、ＶＲ体験授業、拓本授業、両校による課題研究プレゼン発表

政治大学付属高級中学校

## 2019年度日程表

| 日次 | 月日(曜) | 地名 | 現地時間 | 交通機関 | スケジュール | 食事 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 11/6 (水) | いわて花巻空港<br>岩手花巻空港発<br><br>台北(桃園)空港着 | 16：00<br>17：25<br><br>20：45<br>23：00 | ＩＴ２５９<br><br>専用車 | 1Fチェックインロビー集合<br>空路、台湾へ<br><br>到着ロビーにて現地ガイドと合流し、ホテルへ<br>ホテルチェックイン<br><台北：ニューコンチネンタルホテル台北（泊）＞ | 朝：－<br>昼：－<br>夕：機内 |
| 2 | 11/7 (木) | 台北 | 09：30頃<br>～<br>12：00頃<br><br>13：30頃<br>14：30頃<br>18：00頃<br>20：00頃 | 公共交通機関<br><br>専用車 | 【台北市内研修（案）】（ガイド同行）<br>ホテルにてガイド合流、公共交通機関利用で故宮へ<br>※大きな荷物はホテルへ預ける<br>故宮博物院　全体研修（２Ｈ）<br>故宮博物院　発<br>昼食「出孝復興SOGO内のフードコート」<br>食事個所より九份へ移動<br>九份全体研修（３Ｈ）および夕食「九份食堂」<br>九份　発<br>ホテル着<br>＜台北：ニューコンチネンタルホテル台北（泊）＞ | 朝：ホテル<br>昼：各自<br>夕：レストラン |
| 3 | 11/8 (金) | 台北 | 9：50<br>10:00～12:00<br>12：00頃<br>13:00～15:00<br>15：30～<br><br>19：30頃 | 徒歩 | 【研修ツアーWith 陸さん「台湾に感謝を伝えよう！」貢献ツアー（学校手配）】（ガイド同行なし）<br>現地ブランド店：銀星（080－1075－9209）<br>レオ・パーネット1階集合<br>訪問先：レオ・パーネット<br>合流<br>訪問先　観測（ズーチー）<br>訪問先：夢当当成衣工家（マクドナルドハウス）<br>夕食「寧夏夜市」で各自<br>※「寧夏夜市」から「ニューコンチネンタルホテル台北」は徒歩5分<br>ホテル着<br>＜台北：ニューコンチネンタルホテル台北（泊）＞ | 朝：ホテル<br>昼：学校手配<br>夕：各自 |
| 4 | 11/9 (土) | 台北<br><br>桃園<br><br>彰化県内<br><br>台中 | 09：20<br>10：00<br>06：40<br>13：30<br>16：00<br><br>18:00～19:00<br><br>20：00 | 専用車 | 【研修ツアーWith 陸さん「台湾に感謝を伝えよう！」貢献ツアー（学校手配）】（ガイド同行）<br>ホテルチェックアウト<br>「VIGOR KOBO」パイナップルケーキ工場見学<br>昼食<br>「故宮観光工場」小籠包工場見学<br>彩虹森林<br><br>夕食in彰化（ローカルフードを堪能！）<br>「逢甲夜市」<br>ホテル着<br>＜台中：パークシティホテル台中民権（泊）＞ | 朝：ホテル<br>昼：学校手配<br>夕：学校手配 |
| 5 | 11/10 (日) | 彰化県内 | 04：45<br>06：00<br>06：40<br>12：30<br><br>13：30<br>15：00<br>18:00～19:00<br>20：00 | 専用車 | 【研修ツアーWith 陸さん「台湾に感謝を伝えよう！」貢献ツアー（学校手配）】（ガイド同行）<br>ホテル発<br>田中マラソン現地着<br>ハーフマラソン（21ｋｍ）start!<br>田中マラソン終了<br>昼食（お弁当）<br>「亜新工業観光工場」マスク工場見学/体験<br>「jishing自興鞋業」スリッパ工場<br>夕食<br>ホテル着<br>＜台中：パークシティホテル台中民権（泊）＞ | 朝：BOX<br>昼：学校手配<br>夕：学校手配 |
| 6 | 11/11 (月) | 台中<br><br>台中駅発<br><br>台北駅着<br>台北駅発<br><br>花蓮駅着<br><br>花蓮 | 10：45<br><br>11：36<br>＃818RQ<br>12：42<br>13：45<br><br>15：56<br><br>16：30頃<br>18：00<br>20：00 | 専用車<br><br>新幹線<br><br>台湾鉄道<br>＃230RQ<br>専用車 | 【台中から花蓮へ移動】（ガイド同行）<br>ホテル出発<br>※台中駅で、各自昼食を購入<br>新幹線（普通指定席）にて台北へ<br><br>台北駅にて台湾鉄道（普通指定席）に乗り換え。<br>花蓮へ<br>花蓮に到着後、専用車にてホテルへ<br><br>ホテルチェックイン<br>再出発、夕食「花蓮美崙」<br>ホテル到着<br><花蓮：シャトーデシンホテル(泊)＞ | 朝：ホテル<br>昼：各自<br>夕：レストラン |
| 7 | 11/12 (火) | 花蓮 | 08：00<br><br>09：00<br>9:10－12:00<br><br>12:00-13:20<br><br>13:20－14:20<br><br>14:30-15:00<br><br>15:00-15:10 | 専用車<br><br>公共交通機関<br>タクシー<br>（現地払い） | 大きな荷物はホテルへ預け、専用車にて移動<br>（ガイド同行）<br><br>【学校交流】慈濟大学附属高級中学<br>授業体験<br><br>ランチ、お昼休み<br><br>統地高校長挨拶、学校紹介（10分）<br>盛岡第一高校紹介（10分）<br>盛岡第一高等学校学生による発表（30分）<br>海外国際ボランティア学生のお話<br><br>慈濟高校学生よりお出迎えの心得（10分）<br>慈濟高校の先生ご挨拶（10分）<br>校長先生のご挨拶　記念品贈呈（10分）<br><br>記念撮影・お見送り<br>交流終了、学校発<br><br>花蓮自主研修（ホテル周辺）<br>花蓮着大「東大門夜市」<br><花蓮：シャトーデシンホテル(泊)＞ | 朝：ホテル<br>昼：交流校<br>夕：各自 |
| 8 | 11/13 (水) | 花蓮<br><br>花蓮駅発<br>花蓮駅発<br><br>台北駅着<br><br>台北 | 10:00～11:00<br>12:00～13:00<br><br>14：50<br>15：25<br><br>17：37<br><br>18：30 | 専用車<br><br>台湾鉄道<br>＃225RQ<br>専用車 | 【慈濟市内研修】（ガイド同行）<br>花蓮県政府表敬訪問（お客様手配）<br>昼食(光陸)<br><br>花蓮駅集合<br>台湾鉄道にて台北へ移動<br><br>台北到着後、専用車にて宿泊先へ移動<br><br>宿泊先チェックイン<br><br>＜台北：国王大飯店(泊)＞ | 朝：ホテル<br>昼：レストラン<br>夕：各自 |
| 9 | 11/14 (木) | 台北 | 08：50<br>10:00～12:00<br>12:00～13:30<br>13:30～16:30<br>16：45 | 公共交通機関 | 【学校交流】政治大学（ガイド同行）<br>ホテル出発<br>オリエンテーション＆キャンパスツアー<br>昼食（キャンパス内各自）<br>講義①（３Ｈ学生プレゼン・講評＋２Ｈ講義）<br>政治大学発<br>＜台北：国王大飯店(泊)＞ | 朝：宿舎<br>昼：各自<br>夕：各自 |
| 10 | 11/15 (金) | 台北 | 08：00<br>10:00～12:00<br>12:00～13:30<br>13:30～16:30 | 公共交通機関 | 【学校交流】政治大学（ガイド同行なし）<br><br>講義②（３Ｈ学生プレゼン・講評＋２Ｈ講義）<br>昼食（キャンパス内各自）<br>講義③（３Ｈ学生プレゼン・講評＋２Ｈ講義）<br>＜台北：国王大飯店(泊)＞ | 朝：宿舎<br>昼：各自<br>夕：各自 |
| 11 | 11/16 (土) | 台北 | | 公共交通機関 | 【フィールドワーク】学生4名<br>ホテルにて学生と合流、出発・ホテルにて解散<br>9:00～17:00<br>※学生にかかる食費・交通費は日本学生払い<br>★12:30～19：00【日本貿易振興機構2019】<br>（台湾における東北地域の訪日PRイベント実施）<br>台北 世界貿易センター3号館1フロア<br>※交通：MRT(地下鉄)1駅下車。<br>1、6番出口から徒歩3分<br>＜台北：国王大飯店(泊)＞ | 朝：宿舎<br>昼：各自<br>夕：各自 |
| 12 | 11/17 (日) | 台北 | | 公共交通機関<br><br>専用車 | 【フィールドワーク】学生4名<br>ホテルチェックアウト　大きな荷物はフロントに預ける<br>ホテルにて学生と合流、出発・ホテルにて解散<br>9:00～17:00<br>※学生にかかる食費・交通費は日本学生払い<br><br>フィールドワーク終了後、大きな荷物を移動させ<br>政治大学にてリーチェックイン<br>＜台北：政治大学国際会館(泊)＞ | 朝：宿舎<br>昼：各自<br>夕：各自 |
| 13 | 11/18 (月) | 台北 | 10:00～12:00<br>12:00～13:30<br>13:30～16:30 | 徒歩 | 【学校交流】政治大学講義<br>講義④（３Ｈ学生プレゼン・講評＋２Ｈ講義）<br>昼食（キャンパス各自）<br>プレゼンテーション＆フェアウェルパーティ<br>まとめ発表の聴講者が少ないが課題<br>＜台北：政治大学国際会館(泊)＞ | 朝：宿舎<br>昼：各自<br>夕：各自 |
| 14 | 11/19 (火) | 台北 | 09:00～10:00<br><br>10:10～12:00<br><br>12:00～13:00<br><br>13:00～15:00<br><br>15:00～15:50<br>15:50～16:00 | 徒歩 | 【学校交流】政治大学附属高級中学（ガイド同行）<br>歓迎式（前校代表者挨拶、記念品交換、<br>現地よりパフォーマンス）<br>両校生徒が事前準備の研究テーマを<br>プレゼン、質疑応答Q&A<br><br>昼食交流<br><br>VR体験授業（政治大学附属高級中が独自開発した<br>VR授業を体験）<br>茶碗作成（学校の建築を元にして簡単な文化体験）<br>記念写真撮影・お別れの挨拶<br>昨年からの改善として、現地生徒との相互のプレゼンができた<br>＜台北：政治大学国際会館（泊）＞ | 朝：宿舎<br>昼：交流校<br>夕：各自 |
| 15 | 11/20 (水) | 台北(桃園)空港着<br>台北(桃園)空港発<br><br>岩手花巻空港着 | 08：45<br>09：45<br>11：50<br><br>16：10 | 専用車<br><br>ＩＴ２５８ | チェックアウト　（ガイド同行）<br>空路、日本へ<br><br>到着後、解散<br>お疲れ様でした。 | 朝：宿舎<br>昼：機内<br>夕： |

## 4　研修の成果と課題

村尾さんプレゼンツによる企画は、とても練られ体験的な学習が充実した、楽しく面白く心も揺さぶられる良いものだった。コスト削減と対象拡大などの観点から、今年度のみの特別企画と位置づけることが必要かもしれないが、参加者にとっては台湾理解が深まり、グローバルな視野が広がる素晴らしい企画だった。

台湾の連携先として、国立政治大学、政治大学附属高級中学、花蓮県、慈済大学附属高級中学との研修内容が安定充実してきている。このプログラムの質が一つのパッケージとして高まってきているということができる。

今年度も慈済大学付属高級中学校の校長先生からは、相互交流を進めいずれは姉妹校にというお話もいただいた。海外の協力校との継続的な関係構築に向けて、今度は受け入れ側として、国際交流に積極的にかかわる必要があるのではないだろうか。

昨年度から開始された台湾フィールドワークによって生まれた政治大学や同大学附属高級中学および花蓮市の慈済大学附属高級中学など台湾の組織・機関との連携を恒常的なものにすべく、本校同窓会の支援をうけて継続していくことが決まった。また、盛岡市と台湾花蓮市が友好都市協定を締結したことから、これからもこの関係は発展していけると考えられる。教育の面での交流に対して、本校が積極的に関わっていく必要がある。

11 月 6 日（水）

本日は移動日。飛行機に乗るのも、海外に行くのも初めてという生徒もおり、緊張のせいなのか興奮のせいなのかわからないけれども、終始ハイな状態で搭乗手続き、機内、そして入国手続きを済ませた。

カメラを向けると皆が笑顔で応えてくれる。明るく前向きないい子達だ。とても楽しい研修旅行になる予感がする。

桃園空港でガイドの黄さんに会う。早速、公共交通機関やコンビニで使える Easy Card を購入。

ホテルへ向かうバスの中では、黄さんから台湾の歴史について学ぶ。使える中国語もいくつか学んだ。生徒からも「いただきます」はなんて言うんですかとリクエスト。中国語には該当する言葉がないそうだ。「ごめんなさい」は難しいかったので、忘れてしまった。

時差は 1 時間。ホテル到着が現地時間で 22:30 だったので、皆だいぶ眠そうだった。明日は故宮博物院と千と千尋の神かくしで有名な九份に行く。しっかり休息をとって、英気を養ってほしい。

11 月 7 日（木）

今日は故宮博物院と九份に行きました。

朝の健康観察では、皆元気。お腹が空いて大変とのこと。空腹は元気な証拠なので、嬉しい報告です。朝食のバイキングをモリモリ食べて、ガイドの黄さんを待ちました。

公共交通機関を使って、故宮博物院へ。中国 5,000 年の歴史が生み出した素晴らしい美術品の数々が、なぜ台湾のこの地に所蔵されているのか、その歴史を縦軸に、そしてそれぞれの展示品の文化的な価値を横軸に、黄さんはわかりやすく教えてくれました。時折「おー！！」という歓声が生徒からあがり、深い学びが得られていることを実感します。

本物に触れ、その価値を理解することが、「目利き」への第一歩と言われますが、生徒達はまさにその手ほどきを受けたのでしょう。

ギフトショップでは、ここでしか買えないプレミア感を醸し出すお土産を、生徒達は一心に探していました。少々割高な価格設定なので、彼女達の経済観念が光ります。

バスとモノレールを乗り継いで SOGO に行き、昼食。

その後、九份へ向かいました。貸切バスではなく、公営バスを使いました。平日ですが道路は混み合い、台北市を抜けるのにかなり時間がかかった印象です。郊外に出るとバスは加速、一路目的地へ進みます。

都会の景色から緑豊かな田舎の景色へと移り変わり、次第に道路は険しい山道に。狭いワインディングロードを高速で突き抜ける台湾のバスの運転手さんの心意気に、同じドライバーとして畏怖を覚えながらも、ウトウトし始めると、山の中に赤と黄色で彩られた一角が現れました。ワクワクが止まらないとは、このことでしょうか。

遂に九份にたどり着きました。京都は清水の二年坂を思わせる活況、狭い石畳の坂道に、建物や店が立ち並びます。石をくりぬいた洞窟の中にお店があったり、一見すると不安定な土台の上に木造の建物がそびえ立ったり。湯婆婆の宿のモデルになった建物は流石に圧巻でした。生徒達は特別な空間の中で、写真を撮ったり、タピオカを頼んだり、有名なおしるこを飲んだりと、思い思いに時間を過ごしました。

千尋のお父さんが豚に変わってしまったのも、沿道の露店の充実さを見れば、然もありなん。皆も豚にならないように気をつけましょう。

ハイライトはやはり、赤提灯が点滅する夕方です。幻想的な雰囲気が街を彩りました。それまでは平日とあってそれほど混み合うこともなく楽しめていましたが、人がいつの間にかに増えて、満員電車の様相を呈しました。しかしこれも九份名物。心地よい疲れとともに帰路に着きました。

11 月 8 日（金）

皆さん、東日本大震災の折、各所から援助の手を差し伸べてもらいましたが、世界で最も多くの寄付金をくれたところを知っていますか？それは台湾です。

本日から、SGH の様々な活動でお世話になっている、希望郷いわて文化大使村尾隆介さんプレゼンツの特別な3日間が始まります。テーマは「謝謝台湾」。

人は複数のアイデンティティを一度に羽織って生きています。〇〇家の一員である自分、盛岡一高の生徒である自分、盛岡市民である自分、岩手県民である自分、日本人である自分、モンゴロイドである自分、そして地球市民である自分。この 3 日間は、岩手県民である自分達が、地球市民の同朋として手を差し伸べてくれた台湾の方々に、感謝を伝えることがテーマなのです。

午前中は村尾さんが懇意にしている Hugo さんがお勤めの、レオバーネット社を訪問。ちなみに、東日本大震災が起きた時、Hugo さんが中田英寿さんをはじめとする世界中のたくさんの方々に呼びかけてくれたからこそ、あれだけの寄付金が集まったそうです。ありがとう、Hugo！

レオバーネット社はフランスに本社があり、世界中に支社を抱える業界最大手の広告代理店の一つで、台湾でのシェアは 1 位。超一流企業の方とお話ができる機会を設けてくださるとは、やはり村尾さん恐るべし。

はじめに、台湾経済界の女性ドン、マーガレット社長から歓待を受けました。ちなみに台湾は女性の管理職が多いことで有名です。その通り名に負けず、とてもパワフルで前向きな、かっこいい女性でした。

その後、Hugo さんから広告代理店の仕事内容や会社の歴史、そして仕事における哲学についてお話しいただきました。

Hugo さんが手がけた CM を見せていただきながら、一本の短い映像に込められたレオバーネット社伝統の進取の気性や、クライアントとの共同作業の徹底ぶりに触れ、第一線で活躍する職業人の世界観を垣間見ることができました。

最後は Hugo に、働き方改革を体現する、とってもお洒落でクールなオフィスを案内してもらいました。

デスクは決まっておらず、退社する際に自分のロッカーに全てのものをしまいます。翌日の出勤時は、フロア中心に置かれた普通のデスクで企画書を打とうか、窓際のカウンター席で窓外を眺めながらアイディアを練ろうか、ソファであの人とコーヒーを飲みながら会議しようか、自分の計画に応じて形も変えられます。こんなところで仕事ができたらなぁと感じさせてくれる、素敵な空間でした。

レオバーネット台湾はグローバル企業ですが、日本人の従業員は未だ不在です。時代の進展に対応するために必要となる、グローバル企業の基礎体力を構成するのは「多様性」。初の日本人の同僚を迎えるべく、Hugo さんからは「君たちからインターンの申し出があれば尽力する」と熱いメッセージをいただきました。

午後は「慈済」への訪問です。花蓮で訪問する慈済大学附属高級中学もこの慈善団体がつくった学校です。慈済は東日本大震災のときに、津波で被災された方々の一人一人に直接声をかけながら手渡しで義援金をくださった団体であります。今回は、その時のお礼を岩手県代表として私たちが気持ちを伝えるという思いで訪問しました。

今回、訪問させていただいたところは、団体の理念のひとつでもある「地球の環境を守る」ということで行っているごみの分別を行う施設でした。ここで働いている方々は全てボランティアで、一切対価を得ることなく働いていました。行われている作業は、ビニールの分別、ペットボトルのキャップ外し、紙を白黒のものと、カラーのものと分ける作業などでした。ビニールを何種類にも細かく分別することで、ほとんどのものがリサイクルできるようになるということでした。リサイクルできなければゴミと

なり、焼却したり、地中に埋設させられ、結局地球を痛めつけることになるというお話でした。驚いたことにすべての作業が手作業で行われていたのです。私たちも紙の分別を体験しました。単調な作業を通じて、生徒達はボランティアの方々とコミュニケーションをとることができ、良い時間となりました。

日本では手作業での分別は限界があり、きちんと分別できないものは一般ゴミとして焼却されています。それでは地球温暖化にもつながり、地球がかわいそうだというのが慈済でボランティアを行っている方々の考えでした。ボランティアをなさっている方はおおむね高齢の方が多かったですが、人のため、地球のためになっているということが、彼らの生きがいになっているようにも感じました。

そのあとはホールで震災の時の慈済の東北支援の様子をうつした映像を見せてもらいました。説明をいただいた方も、震災の時に日本に来てくださった方で、当時の悲惨な様子を知っているだけに、この映像を見せるかどうか本当に迷ったと、涙声で語ってくれました。

最後に我々を代表して、馬場桃香さんがお礼を述べ記念品と折鶴を手渡しました。この折鶴は、沿岸で被災したおばあちゃんたちが感謝の気持ちを込めて折ったものを、我々に託してくれたものです。

最後に見学したのは「マクドナルハウス」です。マクドナルハウスとは、台北にあるマクドナルド社が社会貢献の一環として、小児ガンなどの病気の治療の際、地方から治療に来られる親子が一時的に無料で滞在できる施設です。ホール、キッチンルーム、宿泊部屋があり、それらすべてで病気の子どもが楽しく過ごせるよう工夫がなされていました。マクドナルド社が商取引で関係ある企業からも支援をもらい、この施設を運営しているということでした。特に印象に残ったのは、サンリオ社の提供エリアで、部屋一面ハローキティに囲まれた宿泊室があり、女の子に一番人気があるということでした。

最後の質問コーナーでは中田深采さんが英語で子供の遊び場に関する質問し、ディスカッションが深まりました。

全ての研修先の訪問が終わった後に、村尾さんから本日の研修の意図を総括していただきました。民間企業、慈善団体、民間の社会貢献活動、立場は違っていてもそれぞれの立場で社会を良くしていこうという点で、本日訪れた研修先は同じ方向を見ているということを伝えていただきました。最後に生徒から今日一日の感想を述べたのですが、「台湾の人の社会を良くしていこうという意識の高さに驚いた」というのがほとんどの生徒の感想でした。自分、日本と、台湾を比較して、多くのことを考えられた、充実した１日になりました。

地下鉄でホテルに移動した後、ホテル近くの安寧夜市でそれぞれ夕食を楽しみました。すでにタピオカミルクティー3 杯目という強者もおります。明日は台中に移動です。

11 月 9 日（土）

今日は村尾さんプレゼンツ 2 日目。

まずは台湾のお土産の定番、パイナップルケーキ工場へ。実際に自分達でも作ってみました。とても楽しい作業で、皆で童心に帰りました。焼き上がりを待っている間に工場内を見学。大きなパイナップルのトンネルを潜っていくと、プロジェクターで映し出されたキャラクター達が陽気に飛び跳ねています。まるで遊園地。こうした趣向は、観光工場という名前で台湾では一般的だそうです。楽しくて、美味しくて、購買意欲まで刺激してしまうこのシステム、岩手県内の工場にもぜひ取り入れてほしいんだ、と村尾さんの思い。生徒達が大人になった時、きっと実現してくれるはずです。

昼食は村尾さんセレクトの、新北市のダウンタウンにある、ディープな鳥料理屋さんへ。地元のお客さんしか来ないようなお店で、本場の鳥料理に舌鼓を打ちました。また、村尾さんから台湾における地

場産業活性化の取り組みについて、お話いただきました。鍵は特色を県ごとに分けることのようです。台北や台中、高雄といった大都市に偏らず、一つひとつの県が売りを持って、そこでしか得られない体験をおもてなしする。地方レベルでは北海道との差別化に悩む東北、県レベルでは青森、秋田、宮城との差別化に悩む岩手にとって、示唆に富むお話でした。

昼食を取った後は、小籠包屋さんへ。ここもDIY (Do it yourself) で工程も含めて美味しいものをいただける観光工場の一種です。小籠包とハニートーストをいただき、心もお腹も満足しました。

その後は貸切バスに乗り、一路台中へ移動。

台中では、小さな集落それ自体をカンバスに、おじいさん一人で群像に染めてしまった、「虹の村」に立ち寄りました。色鮮やかに彩られた民家は、独特の楽しげな雰囲気をまとい、訪れる人を幸せな気持ちにしてくれます。ちょうどそのおじいさんが、小道に作品を描いているところに遭遇。芸術の生まれる瞬間を目の当たりにしました。

夕飯は台湾一の規模を誇る逢甲夜市でそれぞれ摂った後、ホテルに到着。

いよいよ明日は村尾さんプレゼンツのプログラム中、一大イベントである、田中マラソン参加です！現地まで移動に時間がかかるので、朝が非常に早いですが、そうした苦労も旅の常。若さで乗り切って欲しいです。

ちなみに本日から、盛岡一高関係者がもう一人混ざっています。誰でしょうか。ウォーリーを探せ！

11月10日（日）

皆さん、ウォーリーが誰だかわかりましたか？盛岡から田中マラソンのハーフを走るために駆けつけた、本校が誇るMr. SGHです。

今朝は台中からマラソンの会場へ長距離移動のため、4:35 にホテルのロビーに集合。とても早い時間でしたが、生徒達はちゃんと起きて、集まってくれました。ちなみに生徒達が着ているグレーのTシャツは、村尾さんがデザインしてくれたお揃いのものです。

近年、地方創生を謳う台湾での最大の成功例の一つ、田中マラソンは、今や台湾全土だけでなく、世界中からランナーが集まる国際的なイベントになりました。

村尾さんはこのイベントの計画運営に欠かせない人で、現地スタッフからの信頼も厚いです。村尾さんのおかげで、コース沿道での応援や、「震災復興支援ありがとう」のメッセージを、たくさんの台湾の方々に伝えることができました。生徒達が持っているプラカードも、田中マラソン事務局が我々のために作製してくれました。謝謝、台湾。

日本のマラソンと台湾のマラソンは、別の競技かと見紛うほど異なっています。沿道で「加油（中国語で頑張れの意）」と声をかければ、選手が「謝謝」と返す。応援のやり方には決まりはなく、大音量の歌や踊りも見られる。給水所では水のみならず、お菓子やグッズ、まさかあんな飲み物まで配られる。沿道で手を伸ばすと、選手とハイタッチも交わせる。選手にとっても応援する側にとっても、ここではマラソンはお祭りなのかと思わず感じます。

楽しい応援と選手の熱気にあてられ、原科が思わず、眼前にあった太鼓のバチを採り、さんさのリズムを刻み始めました。すると吉田や佐々木が踊り始め、応援に一つの新しい流れが生まれました。たくさんの方の目に留まり、地元メディアにインタビューを英語で受けたり、有名な外国人選手（東京オリンピックに出場するらしいですよ）や彰化県の知事さんと写真を撮ることもできました。

選手達がゴールしてからは、村尾さんに準備してもらったファイルとステッカーを配布。「震災復興支援ありがとう」メッセージをクールに伝えるグッズは、さすが村尾さんのデザインで、思わず目を奪われます。しかし走り終えた直後のヘトヘトの選手達は、なかなか手に取ってくれません。生徒各人工夫

をこらしました。配り切るには多少の苦労はありましたが、その分だけ、今回の活動の意義深さと達成感を味わうことができたようです。何気なく受け取った選手の中には、メッセージを読んだ後で、配った生徒の元へ戻ってきて、激励をくれる方もたくさんいました。なんだか素敵な光景。謝謝台湾！

パイコー飯弁当を食べた後は、スリッパ（いわゆる日本のサンダル）工場へ。田中マラソンが催された彰化県はモノづくりが盛んな土地ですが、伝統的な地場産品は海外の安価な製品や時勢、そして継承者不足といった日本にも通じる問題に頭を悩まされています。

訪れたスリッパ工場は、そんな危機を好機に変えた一組の素敵な夫婦が経営しています。とてもポップで愛らしい店内に入ると、これまた可愛らしい、意趣に富んだカラフルなスリッパが並んでいます。

手の平サイズに縮小されたスリッパのキーホルダーを DIY で作るアクティビティを行いましたが、その工程は本物のサンダルづくりと同じ。とても楽しく、スリッパの良さとそれを取り巻く社会情勢を学ぶことができました。

しかしなによりも、夫婦が心から自分達の仕事と製品を愛し、その素晴らしさをアップデートしながら、より多くの人に知ってもらおうとしている姿が、とてもカッコ良かった。モノの価値とはなにか、リブランディングとはなにか、肌で感じられた尊い時間です。

次に訪問したのは、近くのレンガ工場。彰化県は良質の土が採取できることでも有名で、長年高品質のレンガを供給してきました。しかし 1999 年に起きた大地震をきっかけに、レンガ作りの建物が地震に対して脆弱なのではないかとの懸念が高まり、その生産量は落ち、当時はたくさんあった工場も、今では 2 つを残すだけとなりました。

建材としての需要が回復することをただ待つのではなく、自ら商品の付加価値を見つけようと、今回訪問した工場では、レンガで作ったブロックおもちゃやレンガを用いた小品を生み出しました。また、観光工場化を進め、レンガ工場の 135 メートルの長い窯やブロックおもちゃの DIY 体験を提供しています。

生徒達も今回、DIY でロウソク立てを作りました。

楽しい時間はあっという間に過ぎ、ついに村尾さん達との最後の晩餐を残すのみとなりました。台中の鳥料理の名店で、大きな円卓を囲み、まずは村尾さんから今回のプログラムのラップアップをしてもらいました。

この報告を読んでいただいている皆さん、今回の村尾さんプレゼンツの 3 日間に通底しているもの、それはなんだと思いますか？こちらの文才が乏しいため、うまく伝わっていないかもしれませんが…

「いつの日か、台湾でのあの瞬間が活きているな、そう思ってくれる日がきてくれたら嬉しい。」そう村尾さんは言いました。

答えはきっと「種蒔き」なのではないでしょうか。どんな言葉が心に引っかかるのか、どんな体験が貴重なものとして残るのか、いつそうした事物に出会い、どれくらい今後の人生に影響を与えるのか。それらは生徒一人ひとり異なります。だから、いつどんな形で発芽してもいい。発芽しなくたっていい。彼女達が持つ潜在能力を楽観的絶対的に信頼し、尊重し、そして慈しむ姿勢が、村尾さんをはじめとする今回関わってくれた大人達にはあったんじゃないかと思います。

そうした愛を知ってか知らずか、生徒達は既にこの短い間に、確かに変容しています。台湾のおもてなしに触れ、日本はこのままではいけないこと。自分も地球市民の一人であるという意識が芽生えたこと。村尾さんのプログラムで育んだ視点で、街の見え方が変わったこと。これらは全て、プログラムの最後に、村尾さんに向かって生徒達自身が語った感想の言葉です。

夕食後、村尾さん達（村尾さんは今回のマラソン参加のため、複数の大人の皆さんと動き、三日間我々に帯同してくれました）の元へ、生徒達がそれぞれ挨拶やお話、進路相談に行きました。別れを惜しんで、この出会いを自分の肥やしにするために、懸命に話をしていました。

旅程の関係で、最後は教員の方で話を遮り、無理矢理にお別れさせてしまいました。申し訳ないです。でも、生徒達のそうした姿勢が、とても誇らしく嬉しく思えた夜でした。

11 月 11 日（月）

研修6日目、今日は台中から花蓮への移動日です。新幹線の時間まで少し時間があったので、ホテルを出る前に生徒はホテル近くの「宮原眼科」へいってきたようです。「宮原眼科」は、台湾人のみならず外国人観光客も多く訪れる人気のお菓子屋さんです。アイスクリームが有名ですが、菓子もお土産として高評価のものばかり揃えています。それらの箱などの包装も美しすぎるのです。生徒もアイスクリームを食べ、たくさんのお土産を手にしてホテルに戻ってきました。あらためて、商品における包装の重要性を認識しました。

ホテルをあとにし、台中駅に移動。さすが日本の新幹線をそのままパッケージで輸出しただけあって、駅の造りも日本のどこかの新幹線の駅にあったような感じがしました。台北まで約一時間、距離にして200km、ちょうど盛岡-仙台間と同じ距離です。車窓からの風景の移り変わりにわくわくしながらの移動です(筆者)。まずは地形ですが、新幹線のルートは、基本多くの部分が洪積台地の上に敷かれています。当然、台地を削る谷や、河川のところは低くなるわけですから高架でつなぐことになります。台地の平坦面では一般には水が得にくく水田には不向きなのですが、ため池も多く灌漑により水田が開かれているところも多くありました。やはり畑の土は赤みがかっていて、鉄分やアルミニウム分を多く含む熱帯の土壌ラトソルであることを実感しました。田んぼでは今は稲穂が実っていて、収穫直前の様子です。確かにちょうど二期の二回目の刈り取りの時期のようです。新幹線は途中「新竹」駅に停車。新竹は「台湾のシリコンバレー」と呼ばれるほどの IC などのコンピュータ産業の集積地域で、地理の授業でも必ず教えるところです。駅前はそこで働く多くの労働者が住まう高層アパートが林立しておりました。車窓からの景色の変化が実に面白い！あっという間に台北駅に到着です。

台北駅構内でそれぞれ弁当やパンを買い、今度は花蓮行きの特急列車「太魯閣号」に乗車です。花蓮まで二時間ちょっとの旅です。乗車して 40 分ぐらい過ぎると海が見えてきました。太平洋です。ここからは右に迫りくる急な山、左は大きく開けた海の景色がしばらく続きます。最高の景色なのですが、多少の疲れもありウトウトしていたら、もう花蓮駅のすぐ近くまで来ておりました。ちょっと残念。でも生徒たちも良い休息の時間となったようです。

花蓮駅を降りてびっくりしたのは、駅の構内に「盛岡山車」が 11 月 23 日に市内を練り歩くという大きな看板があったこと。しっかり友好都市締結に向けて、宣伝しているようでした。

バスに乗りホテルに到着、夕食までのわずかな時間を使って生徒たちは明日の慈済大学附属高級中学との交流会での出し物の練習。明日の交流会が楽しみです！今晩は円卓を囲んでの中華料理、昨年に引き続き生徒たちは香辛料の「八角」が苦手のようで、ガイドの黄さんのはからいで、八角を全く使わない料理を提供していただきました。黄さんありがとう！（生徒一同）

筆者も連日の食べ過ぎで、座る時に今までにない感覚が腹部に生じています。この邪魔なものは…。今夜も満腹のまま眠りにつくのでした。おやすみなさい。

11 月 12 日（火）

本日は花蓮にある慈済大学附属高級中学（日本でいうところの高校）で、現地の高校生と交流を持ち

ました。この学校は、村尾さんプログラム初日に訪問したリサイクルセンターと同じ、仏教を基盤にした台湾の重要なNGO慈善事業団体の一つ、慈済が経営する私立学校です。

慈済高級中学では、自ら手を挙げてくれたバディが本校生徒一人ひとりについてくれ、一日を共にしました。

午前中はバディと共に3つの授業に参加。現代社会や数学の授業は中国語で行われたので、なかなか理解するのに苦労したようです。けれども英語は万国共通、英語の授業ではバディやクラスの生徒達とコミュニケーションをとりながら単語ゲームを積極的に楽しむことができました。

昼休みは特別室でバディと共に精進料理をいただきました。慈済では殺生が禁じられており、給食も精進料理です。野菜がたっぷりなのはもちろん、大豆を加工して様々な肉魚もどきを楽しみました。噛みごたえのある肉もどきは味付けも美味しく、育ち盛りの高校生も満足する美味しさです。

午後は図書室の2階にあるおしゃれなホールで交流会を行いました。まずは慈済高級中学の生徒が学校紹介。卒業生が在学時に作製したプロモーション・ビデオの完成度は高く、思わず入学したい気持ちにさせられます。次に本校生徒が学校と岩手を紹介。ここでは第十応援歌とさんさ、そして「上を向いて歩こう」の合唱を披露しました。楽しんでいただけたようで、練習してきた甲斐がありました。その後、国際ボランティアでフィリピンを訪問した慈済高級中学の女の子の発表を聴きました。

そしていよいよ、生徒達にとって初めてのSG課題研究のプレゼンテーション。慈済のバディを含めて8人の3つのグループに分かれて、3つの班がプレゼンテーションを行いました。岩脇・佐々木組はお菓子を活用して岩手の魅力をどのように発信するかについて発表しました。馬場・原科組は学生がよりよく学べる社会について。岡崎・三ヶ森組は視覚障がい者にとって住みやすい社会とグリーンビルディングについて発表。

パソコンの小さな画面を用いて自分達が考えた仮説を発表し、慈済高級中学のバディ達に意見を求めるという形で、英語でディスカッションを行いました。初の機会なので、生徒達も四苦八苦しながら進めていました。自分達の探究に興味を持ってもらうために、注意をひくプレゼンテーションを行うにはどうしたらいいのか。どう質問したらディスカッションで相手に応えてもらいやすくなるか。改善の余地がたくさん残されていることを実感しながらも、バディ達が懸命に応えようとしてくれたことで、なんとかやりきることができました。とても良い学びができたと思います。

最後は慈済の校長先生と佐藤団長が挨拶を交わしました。11月23日、花蓮市と盛岡市が友好都市協定を結びます。慈済高級中学と本校の相互交流が、両市の密な関係を後押しできたら素敵です。

台湾恒例のお土産交換をした後、全員で記念撮影を行いました。お別れが近づくと、本校生徒もバディも、別れを惜しみます。

同世代の交流は本プログラムで初めてでしたが、お互いに大いに刺激し合えた、良き日になりました。

夕飯は花蓮一の夜市でそれぞれ摂りました。台北や台中の、たくさんの人で混み合う夜市とは違い、広々とした空間でゆったりと楽しむことができました。さすが観光立県、随所にインスタ映えスポットが用意され、デートにも最適です。台湾西部の大都市に暮らす人々が、「花蓮は良いところ、一年に一度は行きたい！」と言っていた意味がわかる気がします。ちなみに、花蓮県の醸し出している空気は、岩手と似ています。初めてだけど懐かしい。皆さんも訪れたら、そんな風に感じるんじゃないかな。

11月13日（水）

研修8日目。今日は花蓮県政府教育所の表敬訪問からスタートです。今のところ体調を崩す生徒もおらず順調に研修がすすんでいます。今年度から盛岡市と花蓮市が友好都市の締結を行うということで、

昨年から花蓮市の慈済大学附属高級中学の交流を始めた本校も、両市の友好関係を発展させるために高校生の立場から何か役に立ちたいと考え、盛岡市役所の方にお願いし、今回の訪問が実現しました。

花蓮県政府教育所は野球のスタジアムの一部に事務所があり、まさに球場の一部という感じでした。最初に教育所副所長の翁さんから花蓮県の高校について説明がありました。次に本校から学校紹介、応援歌、「上を向いてあるこう」の合唱を披露しました。昨日に続き二度目の発表だけあって、堂々としたものでした。その場にいた向こうの職員の方にも大変喜んでいただきました。次に 3D プリンターでの作成過程を見学、さすが IT が盛んな国だけあって、一般の市民にも開放しているとのこと。花蓮市も IT 技術者の育成には力をいれているということでした。次に缶バッチの作成です。一人ひとり好きな柄を選び、作ったものは記念品としていただきました。その間、教育をテーマにしている、馬場さん、原科さん、岡崎さんは積極的に教育所の方に花蓮の教育について質問し、研究テーマを深めていました。さすがです！

最後にお土産交換と、記念の集合写真を撮り、交流を終えました。副所長さんからは問題意識が高く優秀な学生さんたちですとお褒めの言葉をいただき、教育所をあとにしました。今後、花蓮市内の複数の学校と交流が広がっていく可能性を感じました。

昼食は海鮮料理の円卓料理、大変豪華な料理なのですが、もう体が多くを受け付けてくれません。青菜のおひたし、もやしの炒め物など野菜があっさりしていてとてもおいしかったです。逆に炭水化物は体重増加が怖くて食べられなくなってきました。最初の円卓料理のときは、残さず全部食べようという気合がありましたが、もう今その気力もありません。食品ロスしてごめんなさい。

午後は列車の時間まで、花蓮最大の観光地「太魯閣渓谷」の見学です。ガイドの黄さんのおかげで、上手く時間を作っていただき、太魯閣渓谷の見学が実現しました。この渓谷は大理石の山が河川に侵食され深い V 字谷を形成した、壮年期の地形です。大理石は石灰岩が変成してできた岩石です。石灰岩はもともと貝殻などの生物由来の岩石ですから、昔海底だったところが長い時間をかけて大理石に変化し、それが現在のフィリピン海プレートに押され、隆起していることで深い谷をつくっているのです。あんなにほぼ垂直に谷を削るのは河川の侵食スピードよりも土地の隆起のほうが速いからなのではないでしょうか。そんなことを考えながら見学しました。インスタ映えスポット満載で、生徒もワクワクしながら見学しました。花蓮へ戻る途中、わずかな時間を工夫して海辺の観光スポットで途中下車。またまた大はしゃぎの生徒たち！花蓮駅には出発の 15 分前に到着、なんと無駄のない行程。さすが黄さん。黄さん本当にありがとう。

列車の中では明日大学で行うプレゼンテーションに向けて準備をしている生徒もおり、意識の高さを感じることができました。そして再び最後の研修地台北に戻ってきました。

研修も後半に入りました。最後の 7 日間、大学でのプレゼンテーション、講義、フィールドワーク、政治大付属高級中学との交流と、主体的に取り組まなくてはならない研修メニューが目白押しですが、体調を崩すことなくやり切ってほしいと思います。

11 月 14 日（木）

本日からいよいよ政治大学での研修が始まります。ガイドの黄さんに連れられて、地下鉄とバスを乗り継いで政治大学国際会館へ。

国際会館では、まず副所長の蘇教授から歓迎の挨拶をいただきました。次に、昨年度もお世話になった主担当の李さんと二人の学生ボランティアから、オリエンテーションをしていただきました。学生さんは期末テストの最中で忙しい中、我々のために時間を割いてくれました。カムシャ（感謝）！

その後、学生ボランティアに連れられて、午前中は政治大学の構内を歩きます。

戻ってみると、部屋にはショッキング・ピンクの

かわいい箱とタピオカミルクティーが。箱の中には野菜たっぷりでヘルシーな春巻きと茶碗蒸し、そしてお茶ケーキという充実のお弁当！

午後はいよいよプレゼンテーションです。日台の観光政策に明るい日本研究学の李教授をお迎えして、岡崎・三ヶ森ペアと田原・中田ペアがプレゼンテーションを行いました。

岡崎・三ヶ森ペアは、万人にとって住み良い社会を探究していますが、それぞれ異なったアプローチをとっています。岡崎は視覚障がい者が住みやすい社会インフラをどう整えていくかについて。盛岡視覚支援学校でのインタビューを元に、財政的な地域格差に起因する視覚障がい者を取り巻く地方の現状を説明、地域格差に左右されない手立てとして情報技術が鍵になるのではないかと提言しました。アジアでも特筆すべき IT 大国台湾で、具体的な解決策を見出したいとのことです。三ヶ森はストレスに満ちた現代社会において、心身の健康には自然との触れ合いが重要だと述べ、地方都市においては自然との共存の可能性、都会においてはグリーンビルディングの可能性に言及しました。

李先生は、万人にとって望ましい生活環境とはバリア（障壁）フリー（無い）であり、その障壁には物理的障壁と心理的障壁の二種類あると説明。物理的障壁の問題を考えるとき、日本の内閣府が推し進める Society 5.0 の発想が大事だよ、と岡崎に宿題を出しました。心理的障壁はコミュニケーションにおいて、主に言葉が通じないことに端を発しますが、これも情報技術の進展、例えば翻訳ソフトの発達が状況を改善するのに役立つだろうと教えてくれました。また、三ヶ森の言う「自然の持つ癒しの力」の大きさに賛同してくれました。台北は山、川、海、温泉へのアクセスが良く、自然との共存という意味で良い参考例になるだろうとのことです。

田原・中田ペアは子どもの遊び場を充実させることで、盛岡に賑わいをもたらしたいという探究を行なっています。まずは社会的な背景として、台湾と日本、両国が共有する少子高齢化を大きな課題として取り上げ、副次的な課題として家庭の在り方に言及しました。高度経済成長以降、家庭のロールモデルとして、夫婦分業が日本に定着しました。経済状況の変化や女性の社会進出の影響で、近年はそのモデルが崩れ始めていますが、まだまだ職業観における性差は根強く残っています。一方で台湾では夫婦共稼ぎが一般的です。こうした背景を踏まえ、日台比較をしながら、現代に見合った、新しい子どもの遊び場を模索したいと述べました。

李先生は子どもの遊び場について考える際、子どもの年齢も考慮に入れた方が良いと助言。発達段階によって、近所の公園を好んだり、動物園を好んだり、遊園地を好んだりと様々だと教えてくれました。また、未来の子どもの遊び場として、気候や天候に左右されない、全天候型の室内遊園地というアイディアも授けてくれました。

その後、議論はジェンダーの話題に広がりました。李先生は、少子高齢化と地方創生という課題において、鍵を握るのは女性であると言います。台湾の女性は経済的に自立しているため、日本とは違い、台湾社会において昔から発言権を保有しているのです。

とまれ、李先生には両ペアともおもしろい視点で探究を進めていると、お褒めいただきました。昨晩遅くまで練習した甲斐があったというものです。

最後に李先生から「You は何しに台湾へ」と題して講義をいただきました。京都大学で 6 年間学び博士号を取得された李先生には、とても流暢な日本語でご講義いただき、これには生徒達も胸をなでおろしました。「今回、君達は研修で台湾を訪れているけれども、もし観光で来ていたとしたら、何が目的になるだろう？」という問いかけから始まりました。生徒達は「九份！」「タピオカミルクティー！」と答えましたが、日本人がイメージする「九份」や「タピオカミルクティー」と、台湾人のそれらの認識は完全に同じでしょうか。きっと重なり合うところもあれば、ズレているところもあります。実際、台湾の人にとって九份は外国人観光客で混雑している場所で積極的に行く場所ではないし、小籠包も高いからあまり食べない。ちなみにタピオカミルクティーに関しては、全ての世代が小さい頃から慣れ親しんでいる大好きな味だそうです。李先生は今回、「日本から見た台湾」と「台湾から見た台湾」、「台湾から見た日本」と「日本から見た日本」、それらの認識の共通点と相違点を整理することで見えてくる、観光戦略についてお話しくださいました。

我々が「台湾」と聞いてイメージするものは何で

しょう。台湾は2011年からずっと、日本人が訪れたい国の最上位にランクされています。なぜこんなにも台湾は我々日本人を惹きつけてやまないのか。李先生は、「日本から見た台湾」と「台湾から見た台湾」の認識のズレに答えがあると示唆します。台湾では観光スポットが地域ごとに整理されており、かつ交通インフラも整備されている。グルメは主だったホテルの周辺に食べたいものが揃っていて、コストパフォーマンスも良い。現地の人との出会いも良い旅の思い出には必要不可欠ですが、台湾人のおもてなしには「大丈夫だよ」を表す「メイグワンシー」の精神が隠れているとのこと。李先生が教えてくれる観光地としての「台湾から見た台湾」は、我々日本人が無自覚に、しかし確実に実感している魅力の源泉でした。

質疑応答で熱を帯びたのは、互いに何をお土産に持ち帰ってほしいかという話題。台湾チームからは梅干しとフルーツビール、日本チームからはかもめのたまごと南部せんべいが挙がりました。

そして再び、女性の働き方や社会的役割に話が及びます。台湾は、女性という労働力なくして、経済や政治などの社会機構は成り立たないという前提に立っています。日本ではまだまだそうした意識が定着していないため、ここにいると、女性が当たり前に活躍している姿が、とても新鮮に映ります。

お土産に目を向けてみましょう。その主たる消費者は女性です。たとえ購入者が男性だとしても、それを受け取って使用したり食べたりするのは女性。それなのに、日本では誰がそれをデザインしているのでしょうか。台湾のお土産は包装に凝っており、観光地もとてもポップで魅力的に装飾されています。女性をターゲットに、女性がデザインする。日本では未成熟な発想です。でもその分だけ、女性が活躍する可能性を秘めた大きなフィールドの一つだと実感できました。今回の訪問団の内、12人全て女子生徒。彼女達に希望と勇気を与える、素晴らしい機会となりました。

11月15日（金）

研修10日目。政治大学国際会館での2日目の研修です。宿泊したホテルはほとんどが日本人で、朝食会場も日本語が飛び交っています。福島県の西会津高校の生徒さんも宿泊しております。本日も黄さんのガイドのもと地下鉄とバスを乗り継いで移動です。ちなみにホテルの最寄りの地下鉄「中山」駅から「動物園」駅まで30分ほどの乗車で28元、そこから政治大学までのバス代が8元です。今、1元が3.8円くらいですから合わせても日本円で140円弱、びっくりするくらい公共交通機関の料金が安いのが、台湾の特徴です。

午前中の研修は昨年度もお世話になった葉先生です。葉先生には事前にメールでお願いできる関係で、今回も葉先生のお声がけで、日本語を学んでいる学生が数多くこの授業に参加してくれました。葉先生は言語学が専門で、日本語と中国語の比較を中心に研究を行なっています。東北大学への留学経験もあり、奥様も宮城県の方ということで、日本のことも深く理解されている先生です。

本日も本校生によるプレゼンテーションからスタートです。

まずは馬場・原科ペアから。二人のテーマは教育です。日本では学ぶ目的を見いだせないと思っている生徒が多く、学びのモチベーションが希薄です。どうやったら生徒が主体的に学びたいと思えるようになるのか。その点について、勉強において達成感を得られたときに勉強の面白さを感じられるという調査結果をもとに、一つひとつ達成感を確認できる様な仕組みを提案しました。

これに対して葉先生からは、「台湾も同じ問題を抱えている。台湾も日本以上に学歴社会で、良い大学に

入るのが目的で勉強しているのであって、入った後の目標を持っていない。私は先生の勧めや、友人からの刺激を受け勉強に対するモチベーションを得た。逆に日本では小学生に自由研究というものがあるが、台湾にはない。主体的な学びを重視している日本の教育を台湾でも取り入れるべきだ。」というお話をいただきました。学歴社会の中国、韓国など東アジアの多くの国が直面する課題であると実感するとともに、日本の良い点についても気づかされました。

次に藤澤・立花ペアです。二人のテーマは美容です。「美容に悩みを持つ女性を助け、女性が自信を持つためには」というテーマでプレゼンテーションしました。ある調査によると、日本人の女性は台湾の女性より自分の肌に自信があると回答した割合が少ないという報告があります。その理由は、台湾の女性は肌表面の美容だけでなく、食事など内からのケアに気を使っていることにあるのではないか、と述べました。

葉先生は「日本は気候的に乾燥している。台湾人の肌がしっとりしているのは気候が理由なのではないのかな。隣の芝生がよく見えるだけでは」とのコメントをいただきました。台湾人は日本の方が良く見えて、日本人は日本にない台湾の良い点に気が付く。実はこれが本質で、それぞれの国の、他国にはない特徴を生かすことが、商品開発やインバウンド戦略を考える上で、必要な視点であるとわかりました。

最後に葉先生から、“An Introduction about Japanese and Chinese Languages”というテーマで、日本語と中国語の表現や文法の差異についてお話をいただきました。例えば人称代名詞を例にとると、中国語の一人称はほぼ「我」だけなのに対して、日本では「私」「俺」「おいら」など100以上の表現があるということでした。それを場面、人間関係で使い分けるのが日本語であると。あらためて説明されるとなるほどと実感しました。いろいろな事例をもとに、中国語と日本語の違いを説明していただきました。さすが奥様が日本人だけあって、ちょっとした表現の違いに気が付くようです。中国語は英語と日本語の中間に位置する言語だともおっしゃっていました。

講義後、昼休みを惜しんでに葉先生に質問している生徒の様子が印象的でした。

午後は、コミュニケーションとジャーナリズムの専門家、林教授と研修を行いました。発表を行うのは、岩脇・佐々木ペアと伊藤・吉田ペア。

岩脇・佐々木ペアは「岩手と台湾の魅力を発信しよう」と題して、お菓子を使った地方創生の可能性について話しました。岩手は東北の中でも、青森や宮城に訪問外国人観光客数で水をあけられています。そうした事態を打開する一つの方法として、岩手を代表する象徴的なお菓子の開発を提言しました。滞在中に台湾のお菓子屋さんを訪れたり、台湾の方々の味覚を実地で調査するなどしたいと述べました。

林先生はたくさんの質問を二人に投げかけることで、探究内容を整理してくれました。なぜ今回お菓子に目をつけたのか。岩手に既にある最も有名なお菓子はなにか。もし今回お世話になっている李さんにあげるとしたら、岩手のどのお菓子をあげるのか。二人は、岩手ではかもめのたまごや南部煎餅が有名だけれども、李さんにはあげないと答えました。若者が好む味ではなさそうだからというのが理由です。ここにマーケティング戦略を考える上で、一つの重要なエッセンスが隠れています。自分が価値を認めていないものをプロモーションなどできない。自分が好きなもの、食べたいものを推すべきだ。一大マーケットを形成する「若者」、その一人としての自分の生の感覚を、大切にすることが肝要です。

伊藤・吉田ペアは、「いかに人の目を惹きつけるか」と題して、魅力的なポスターの書体やフォント、レイアウトといったテンプレートの開発に取り組んでいます。質問やコントを盛り込んだプレゼンは、オーディエンスを大いに楽しませてくれました。最近はSNSが隆盛を極めていますが、その利用者は若年層に偏っています。SNS を使わないお年寄りなども含めて、よりたくさんの人の目に留まる広告媒体はポスターではないか、その利点を最大限活用したい、という議論を展開しました。

林先生は、広告を打つときは、ターゲットをより細分化し、カテゴリー毎に見合った異なる媒体を併用した方が効果的だと教えてくれました。美しいポスターを大きいサイズで、空港や駅といった多くの人が利用する場所に貼付するのであれば、ポスターも良い媒体足り得るともおっしゃっていただきました。

林先生からは、「台湾におけるソーシャル・メディアとマーケティング」と題し、上記二組の探究内容

に大きな示唆を与えてくれる内容を講義いただきました。

SNS はその登場以降、誰もが個人の意見を不特定多数に伝えられるようにしてくれました。それまでは、旅行会社やニュース・メディアが、新聞やラジオ、テレビといった広告媒体を用いて、限定的な知識をコントロールされた形で消費者に伝えていました。そうした、顔の見えない顧客に対して、資金を投資して広告する旧態のメディアを、“Paid Media”と名付けます。現在は顧客の好みが細分化してきており、それぞれの顧客のニーズに応える形で広告する“Owned Media”が展開されています。将来は、顧客の細分化がより明確になり、特定の愛好家に対して、SNS で「ストーリー」を拡散して差別化された商品を広告する“Earned Media”の時代になるとのことです。

今回、林先生の話の中に、「ストーリー」という言葉がキーワードとして繰り返し出てきました。「ストーリー」とは一言でいうと、「希少性の高い付加価値」といったところでしょうか。三頭の狼と月がプリントされた、一枚のダサい T シャツがあります。ある男性が「これを着て、好きだったあの子に告白をしたら、OK をもらえたよ！」とアマゾンのレビューに書き込みました。するとそのコメントが反響を呼び、今では星 4.5 個を獲得する人気商品となっています。このように、商品の一つひとつに、唯一のストーリーを帯びさせることで、付加価値が高まるという寸法です。

また林先生は、ユーモアの活用が昨今のマーケティングのトレンドだと教えてくれました。台湾人は総統選挙といったお堅い行事もお祭りに変えてしまう、陽気な人達です。（マラソンもそうでしたね。）一般的に議員選挙というと、候補者はパリッとしたスーツに身を包み、拳を握って、カメラ目線でやる気をみなぎらせているポートレートが思い浮かびます。しかしながら、先に行われた台湾の総統選挙では、立候補者 3 名の全身が一枚に収まった写真が公開されました。彼らはファッション・モデルさながらポーズを決め、同じ構図で違った衣装をまとった、いくつかの写真があげられました。これは何かというと…某アパレル会社の広告。「誰が一番かっこいい？」と問いかけています。いわゆるミス・コンテストみたいなものですね。他にも、台湾の SNS 上には、故宮博物院に収められている国宝を使って、時事ネタを風刺する投稿などが溢れています。

SNS で取り上げられるモチーフが、本来はシリアスなものであればあるほど、それをもじったジョークは、多くの人の心を掴みます。こうしたユーモアは、国際的な場でこそ、大いに評価されます（イギリス人は特にこういうの好きでした）。日本は割合、シリアスな場面ではシリアスぶっていることが良しとされます。そのステレオタイプを裏切る先駆として、盛岡市が、岩手県が、日本で最初に名乗りをあげたのならば、一躍国際舞台でスポットライトを浴びることでしょう。そんなストーリーを岩手、盛岡が纏うことを期待するというメッセージを、林先生からいただきました。

11 月 16 日（土）、17 日（日）

今週末はいよいよ台北市内でのフィールドワークです。昨年度とは異なり、アテンドしてくれる大学生は、葉先生の教え子を中心に、日本語ができます。とても心強い味方と共に、生徒達はこれまで政治大学の先生方からいただいた助言を活かしながら、それぞれ街頭調査を行いました。

以下、生徒達がまとめた行程と感想です。

田原、岡崎、中田、三ヶ森

16 日は大安森林公演と民生公園に行き、街頭調査を行いました。子供連れの家族がたくさんいて、快くインタビューに応じていただきました。台湾の人のあたたかさを改めて感じることができた 1 日でした。

17 日は、台北 101 と台北市立動物園に行きました。台北 101 は高級ブランドのお店が多く、20 年後にまた来たいと思いました。動物園は人がとても多くて暑かったです。残念ながらパンダを見ることができ

ませんでしたが、ライオンやゴリラに会えてよかったです。17,000 歩以上歩いたので、ダイエットになると思います。

伊藤、吉田

二二八和平公園と大安公園でアンケート調査を行いました。

人が来てくれなかったり目が合ったのに逸らされて通り過ぎられたりして悲しい気持ちになりました。でもそれ以上に、日本の高校生だと分かって協力してくれる人が多くて台湾の人は優しいなと改めて感じました。お菓子や聖書をくれる人もいて人の温かみを感じ、また、調査結果としては分かりやすく台湾人の傾向を掴むことができたので良かったです。

藤澤、岩脇、佐々木、立花

私たちはまず 1 日目午前中に大安森林公園で地元の方にインタビューをしました。

かもめの玉子、南部せんべい、米粉入りゴーフレットを試食してもらい、どれが一番美味しいかを伺いました。結果はかもめの玉子が一番人気で、理由としては日本らしさが出ていることなどがあげられました。自分たちの予想通りではありつつも、理由が様々あり非常に興味深かったです。（岩脇・佐々木）

日本に行ったらどんなパッケージのお土産を最も買いたいと思うかを伺いました。「(1) 日本らしい和風のもの、(2) かわいいもの、(3) 写真付きで分かりやすいもの」の 3 つから選んでもらいました。結果は (1) と (2) が同じくらい多く、(3) はとても少なかったです。このことからパッケージで必要なことは見た目の美しさ、特に高級感や特別感であるということがわかりました。（立花）

1 日にどのくらいスキンケア、メイクに時間を費やしているかを伺いました。台湾の女性は 1 時間以上費やしている人が多いのではないかと思っていましたが、結果は 0 分 ~30 分が一番多く、日本とさほど変わらないのだなと思いました。しかし、私よりも年下の人でも 2 時間くらい費やしている人がいて、びっくりしました。全体的に外見が日本人よりも大人っぽく見えました。（藤澤）

午後は、糖村、台北犁記、新純香に赴きました。そこでは最も売れている商品や、客層についてお伺いしました。

一日中歩き回ったため、足が棒になり疲れたことは否めませんが、台湾人の暖かさを感じ、達成感で満ち溢れた一日でした。

2 日目、お土産さんは紅櫻花食品、維格餅家に行きました。店員さんにインタビューをしたり店の雰囲気や商品を調べたりしました。店ごとに商品のパッケージの雰囲気に統一感がありました。好みの外見のパッケージがまとめて置いてあるとお客さんは色々たくさん買いたいと思うので、これがお土産を多く売るための工夫なのだと思いました。

誠品生活にあるパックや化粧水を売る土産物屋の店員さんにお話を伺うと、美容についての考え方はそれぞれだけど、努力をすることは自信に繋がることなので、自分の肌に合うものを色んな商品を試しながら探すことが大切だと教えてくれました。

2 日間ガイドをして下さった学生の方と様々なお話をする中で、台湾では人はそれぞれ違う考え方を持っており、それぞれ違って良いという考え方が日本よりも浸透しているのかなと思いました。

ガイドして下さった学生の方、先生方、JTB のガイドさん、取材に協力してくださった方、全ての方に感謝し、自分たちの研究をより深いものにしたいと思います。ありがとうございました。

原科、馬場

16 日、大学生の陳さんと会い、まずは北投図書館を訪れました。温泉街に位置する北投図書館は、まるで美術館のような美しい建物でした。一階二階にはテラスがあり、風通しと光が心地よい図書館でした。地下一階にはずらりと子供用の本が並んでいました。子供用の本には振り仮名があることが判明しました。スマートフォンで中国語を入力する際にもこの振り仮名を使うそうです。子供用の本棚にも大人用の本棚にも日本語を勉強するための本がありました。陳さんに聞いてみると、台湾には日本で言う英検のような日本語検定があると言うことがわかりました。また、その他にも中国語で翻訳された日本の絵本や小説がありました。図書館を一周してみて、外観以外は日本と似たものであることが分かりました。

その後、陳さんが美味しい紅茶の店と B 級グルメのローカルフード、魯肉飯のお店に連れて行ってくださいました。行列のできるお店ということもあり、とても美味しかったです。午後は電車を降りたあと、自転車に乗って科学教育館と天文科学館へ行きまし

た。まず驚いたのが建物の大きさと入場料の安さです。展示は沢山のジャンルに分かれていて小さい子でもゲーム感覚で楽しめるものも沢山ありました。実際に触ったり、ボタンを押したりすることができ、言語は分かりませんが見るだけで分かるものも多く楽しめました。天文科学館には乗って楽しめるアトラクションがあり、テーマパークのように楽しめました。

17 日、今日は政治大学へ行き、インタビューを行いました。まず初めに中学生に話を聞くと、圧力をかけられることではなく楽しいことならば頑張ることができるということが分かりました。また、進路への目標がある事が自分のモチベーションになっているようです。

次に日本語学科の学生さんにお話を聞きました。日本語を学習しようと思ったきっかけはアニメを見たことだそうで、だんだんと言語だけでなく日本の文化、歴史、建築に興味をもち始め、日本語の勉強への意欲が強まっていったそうです。最後に日本語学科の陳さんにお話を聞きました。勉強以外にも陳さんは写真を頑張っていて、日々創意工夫をし、テクニックを磨いていることが、自分の成長に役立っているということが分かりました。一日を通し、自ら学ぶことが大切で、そのためには「楽しい→頑張る→知識を得る→それを生かすための目標を持つ→達成感を得る」というサイクルを作ることが大切なのではないかと考えました。

17 日 17:00、全員が台北の中心、中山にあるエンペラー・ホテルのロビーに集合。二日間お世話になった大学生にお別れを告げ、貸切バスで政治大学国際会館へ向かいます。いよいよ最後の宿泊先。先も見えてきました。もう少しだ、頑張れ！

11 月 18 日（月）

本日の午前中は、教育学を専門とする、葉女史と共に研修を行います。

まずは田原・中田ペアが、週末のフィールドワークの成果を反映させたプレゼンテーションを行いました。台北市内の大規模公園、大安森林公園で行ったアンケート結果によると、相当数の親御さんが、台北の公園設備に満足していると答えました。これは葉女史の予想を裏切るものだったと言います。葉女史は 50%がいいところだと思ったとのこと。

馬場・原科ペアもフィールドワークの成果を反映させて発表しました。北投図書館は素晴らしい環境で、科学館も子ども達が体験的に楽しく科学に触れられるアトラクションが豊富にあったとのことです。学生とのインタビューも、サンプル数は少ないですが、その分濃いディスカッションができたようです。

葉女史からは、学術的な見地からたくさん助言をいただきました。統計を取るときは、回答者の属性、例えば、母数や性別、年代を分類しておくようにと助言いただきました。サンプルを集める際には、事前に熟考して、考察の際に役立つ指標をあらかじめ担保しておくことが大事なのですね。また、調査方法には大きく帰納法と演繹法の 2 種類があり、いずれも必要十分に論旨を支持できるだけの証拠を集める意識をもって調査に臨むようにとのこと。いずれも科学的な研究において重要な視点であり、生徒達はよい学びを得られました。

葉女史にはその後「教育改革—創造性の習得を通じて」と題して講義していただきました。現代社会は、近代的な教育システムでは充足できないほど大きく変化してきています。台湾において、親の学校教育に対する満足度は 37%と非常に低く、子ども達の間にもインターネット依存やゲーム依存などが広がっています。こうした社会的背景のもと、台湾では初等中等教育の 12 年間を貫く、抜本的なカリキュラムの見直しが進められています。

中等教育における方向性としては、生徒一人ひとりに寄り添った指導、必修科目を減らして選択科目を増やす、高校一年生相当の学年からポートフォリオを蓄積する、といった、日本政府が掲げる方針と似通ったものが示されました。

AI の進展によって、将来的に必要とされる仕事も、

職業観も様変わりすることになります。そこで重要となるのは、教育においていかに創造性を養うかという視点です。創造性と一言でいっても、それには大きく分けて二種類あると葉女史は言います。いわゆる天才を表す“Big Creativity”と 日常のちょっとした一コマに工夫を凝らす“Little Creativity”です。

葉先生は後者に着目し、小さなアイディアが世界を救うこともありうる、とてつもない可能性を秘めているため、それらを培えるカリキュラムを模索しているとのこと。例えばこんな課題があります。眼前に無機的なただの円が示されます。2分という制限時間内に、生徒はその円に自由に筆を入れ、意味のある図なり絵を描くというものです。生徒によっては、制限時間内に単純な線を書き足すだけで、できるだけ多くの表情を描写します。これは、“Little Creativity”の内、“Fluency”が高い生徒であると言えます。一方で、制限時間を目一杯使って、円の中に美術的に微細な顔を三つだけ描く生徒もいます。その生徒は“Elaboration”が高い生徒であると言えます。“Creativity”の細目において、「素早くたくさんものを思いつき形にできる」創造性と、「ゆっくり時間をかけて質の高いものを生み出す」創造性は、対極にありますが、いずれかに優劣があるわけではありません。このように、“Little Creativity”を細目化し、それぞれを妥当に評価する基準を設けることが重要なのです。

みんな違って、みんないい。お互いの資質を尊重し合いながら、AIに負けない創造性を、楽しい課題を通じて身につけていく。そんな教育、聞いているだけでワクワクしませんか。

ちなみに、創造性を磨いていく上で一番の鍵になるのは、生まれ持った才能でも、経験値でも、教育につぎ込んだ費用でもないと葉先生は言います。大事なのは、凝り固まった頭で、自分にはそんなことできない、なんて決して思わないこと。きっと自分には何かができる、今の自分にはできなくても、いつかの自分ならきっとできる、という心構え、換言すると前向きな姿勢が大切なのです。2週間、楽観的で明るく、情に厚い台湾人に接してきた我々には、それくらい容易いように感じられます。旅先で浮かれているだけかもしれませんが、もしこの二週間でそうした台湾の良さをわずかながらでも体得できたのであれば、この研修は有意義であったと言えるのでしょう。

“Growth mindset is almost the same as positive attitude, which is the most important strategy to improve your creativity”また座右の銘が増えました。

ランチタイムはお弁当をいただきながら、政治大学で日本研究を行っている石原忠浩先生によるミニ講義と質問タイムです。昨年度も講義でお世話になった先生ですが、今回はもともと予定にはありませんでした。たまたま石原先生が田中マラソンに参加し、本校の生徒と出会ったことで、石原先生の方からまたお話をしたいという申し出があり、今回のランチタイム・ミーティングが実現しました。台湾の歴史と日台関係についてポイントをまとめてお話をしていただきました。

台湾の歴史を少し勉強すると、1894年の日清戦争をへて約50年間日本が植民地統治したことを学びます。また台湾人には最初に中国福建省から渡ってきた本省人と、第二次大戦後、蒋介石とともに中国大陸からやってきた外省人、そして先住民の少数民族がいることを知ります。石原先生は、「私たち日本人が台湾で出会う多くの人が、親日的で日本語が話せる方が多いことから、全ての台湾人がそういう人だと思いがちだが、必ずしもそうではない。私たちはとかく、外省人＝国民党支持的→日本人的に見て×、本省人＝民進党支持＝民主的→日本人的に見て〇、というような一面的な見方に陥りがちであるが、必ずしもそうではない。まずは日台双方がお互いのことをより深く理解することが、今後も日台関係がますます発展するために重要である。」と話してくださいました。多くの日本人が思っている台湾に対するステレオタイプ的な見方が、すごく浅く一面的なものであることに気づかされました。

午後はいよいよ最後の仕上げのプレゼンテーションです。午後のオーディエンスは、私たちのお世話をしてくださっている政治大学国際合作事務所の李さんと、政治大学日本語学科の周君と陳君の三人です。

今年のメンバーのプレゼンテーションのスライドは村尾さんから教えていただいたことがしっかり反映されたすばらしいものばかりです。また、スライドだけでなくプレゼンテーションでもオーディエンスに問いかけ、興味を引くような工夫が随所に見ら

れます。何より頑張ったことは、どの班もプレゼンテーションに 2 日間のフィールドワークで得た知見を取り入れ、今後の取り組むべきアクションプランまで提示できたことです。わずか一晩でスライドを追加、修正し、結論を述べるところまでしっかりと発表できました。アンケートの集計方法、実施場所等で結果が大きく異なることや、それによって考察の根拠が弱くなることなどの意見をいただきましたが、それらは盛岡に帰ってからの課題です。しかし、これほど完成度の高いプレゼンを目にすることができて、本当に幸せな一日でした。

全ての講座が終了したあと、政治大学のプログラムがすべて修了したことの証に、李さんから生徒一人一人に修了証が手渡されました。会場を去る際に李さんから「あなたの学校の生徒は今まで見た中で最も素晴らしい生徒達です。」と最大限のお褒めの言葉をいただきました。これもまたうれしいことでした。

そのあとは政治大学でのフェアウェル・パーティーということで、バスで台湾大学脇にあるイタリア料理のお店に行きました。なんとそこは、バイキングつまり食べ放題のお店でした。パスタ、ピザは注文してから作り始めるので、熱々が食べられます。その他ローストビーフなどの一品料理や、サラダ、フルーツ、そしてデザートのケーキ、ハーゲンダッツのアイスクリームまで食べ放題なのです。生徒たちは大喜び！お世話になった政治大学の学生さんも3名同行し、2時間余り交流に花を咲かせておりました。日本語学科の学生さんにはこの 5 日間、本当にお世話になりました。謝謝！

このプログラムもいよいよ明日の政治大学附属高級中学との交流を残すのみとなりました。明日はまた学校紹介で第十応援歌が鳴り響くでしょう。

11 月 19 日（火）

今日は最後の訪問場所、政治大学附属高級中学で現地高校生と交流しました。まずは校長先生をはじめとする先生方とご挨拶、互いの学校紹介を行いました。

その後、講堂へ移動し、高校生との交流です。

同い年くらいの生徒達に対して、再び学校紹介を行いました。応援歌とさんさ、そして「上を向いて歩こう」を披露。3 回目ともなればさすがの完成度を示し、現地の皆さんからも好評を得ました。

次はプレゼンバトルです。

本校と政治大附属高の生徒が交互にプレゼンテーションを行い、質疑応答を英語で行いました。英語圏の文化では、オーディエンスの構えとして、発表者に対して一番報いるのが、質問をすることです。「私はあなたの話に関心があります」「ちゃんとあなたの話を理解したいので、私がわからなかった部分を教えてください」こうしたメッセージが質問に含まれるのですね。政治大学附属高の生徒はとても英語が達者で、本校生徒は流暢な英語に食らいつくのも大変な中、たくさん質問をしており、国際人としての素地を垣間見ました。

政治大附属高の先生方に美味しいお弁当と最高のタピオカミルクティーを準備していただき、生徒達と一緒に楽しく食べました。

午後は物理の特別授業を受けました。レーザーポインターの光が、特定の液体を透過するかどうかという実験と、VR 体験を行いました。詳しいことはわかりませんが、前者の実験では、液体をいくつか混合させると、レーザーポインターの光が変色しました。VR では電子と陽子の衝突をシミュレーションするゲームを行いました。すごいなぁ、楽しいなぁとは思いましたが、スペクトルと電子と陽子を同時に学んだのには、何か関係があるのですか？物理の先生、あとで教えて！

最後に拓碑体験を、本日バディとして 1 日付き合ってくれた生徒さんと一緒に行いました。拓碑とはなにか、説明が難しいので写真で確認していただければと思いますが、先人の残した素晴らしい文字を、お手製の版画にしてお土産にする、台湾では割とよくある風習のようです。

長い旅もこれで予定されていた活動は終了です。

同世代の子達と触れ合えたせいか、それとも研修を一通りやり通せた達成感からか、今日はいつもよりテンションが高いように感じました。明日はただ帰るのみですが、盛岡の自宅に着くまで気を抜かないでほしいです。

11 月 20 日（水）

研修 15 日目。本日はいよいよ岩手へ帰る日です。8:30 に政治大学国際会館のロビー集合。全員遅れることなく揃いました。ロビーでは 2 週間お世話のなったガイドの黄さんに、生徒から感謝の気持ちを色紙に寄せ書きしてプレゼントをしました。本当に黄さんにはお世話になりました。生徒たちもみんな黄さんが大好きでした。政治大学の研修でお世話になった李さんと、最後に集合写真を一枚。李さんに見送られながら政治大学に別れをつげ、バスは一路、桃園国際空港へ。バスの中で黄さんから、「豚コレラの関係で台湾から肉類の持ちだしができませんよ。」と告げられ、一同唖然！生徒は自分が買ったお土産が持ち出せるのか、黄さんに確認。残念ながらお父さんへのお土産として牛肉麺とビーフジャーキーを買った生徒は泣く泣くおいていくことに。我々もビーフジャーキーを持ち出せず。全て黄さんへのプレゼントになりました。今はショックのほうが大きいですが、いつかは笑い話になることでしょう。

出国手続きでは、スーツケースの重量オーバーもありましたが、スーツケースの中身をほかの生徒の手荷物として分けて預かってもらいクリア。協力体制ばっちりの仲間たちです。機内では最後の台湾食「油葱鶏肉飯」を食べ、そのあとは 2 週間の疲れもありほとんどの生徒が就寝です。本当頑張ったね。

時間を少し戻して、昨夜の話をします。夕食後、政治大学国際会館の研修室で、みんなでアイスクリームを食べながら、研修のまとめを行いました。一人ひとり今回の研修で学んだこと、感じたことを話してもらい、その想いを共有しました。「これまで将来の進路が見えなかったけど、この研修を通して、将来に対していろんな気づきがあった。」「もっと英語や中国語を学びたくなった。」「今までの自分の性格を顧みて、変わっていかなければならないと再認識した。」など、課題研究で得た知見だけでなく、進路のこと、日本と台湾の関係、これからの生き方など､今感じていることをたくさん話してくれました。今回の研修を通して、多くのことを見て、学び、感じ､そしてそれを吸収し自分の中に取り込みながら、内面的に成長してくれたこと、そのことを強く実感しました。みんなの思いを共有できた、とても心地の良い夜でした。

さて飛行機は花巻空港に到着です。久し振りの家族との再会。同じ 15 日間を過ごしても、感じ方は一人ひとり違います。保護者の皆様、お子さんの台湾物語をぜひ聞いてみてください。きっと、「あれ、ちょっと変わったかな」と思ってくれるに違いありません。

この 15 日間、陰でいろいろと支えてくださいました保護者の皆様、本当にありがとうございました。またこの研修に関わったすべての方に感謝を申し上げます。ありがとうございました。謝謝！感謝（カムシャ）！Thank you!

# Improving Society for the Visually Impaired

2703: Iwate Prefectural Morioka Daiichi High School
OKAZAKI, Konoka

Key words: the visually impaired, barrier free, public transportation system, Society 5.0, Internet of Things (IoT)

## 1. Introduction

What do you think about this number means? This is the amount of money that was collected as a donation when my favorite band held a charity radio program for the visually impaired. A while back, I was listening to a radio program that had my favorite band as their guest. They went to a nursing school for the visually impaired to celebrate Christmas Day. They said the children's smiles were so beautiful that they felt more motivated. I was impressed, and I began to feel like doing something for the visually impaired by myself.

To learn what difficulties the visually impaired are faced with, I visited Iwate Prefectural School for the Visually Impaired in Morioka. A teacher of the school taught me the following hardships: insufficient pavement of braille blocks and narrow sidewalks with many steps. In rural areas, railways are not convenient, so people use mainly cars or buses. Assuming that the visually impaired use buses; you would hit upon many obstacles. They have to walk on undeveloped sidewalks to reach the closest bus stop. There is no braille sign to indicate the timetable at the stop. Not all buses are low floor; rather, Iwate is one of the most outdated prefecture that introduces low floor buses. In addition, buses don't have enough room for the impaired. Especially, it is common to use tickets and cash or bus cards to pay for the fare, but since not all buses are the same, it's hard to locate the ticket dispensers and the fare collection machine. We rarely see IC cards available when we use public transportation systems in Iwate.

## 2. Methods and Results

We visited Taiwan as a Super Global Fieldwork Overseas from November 6 to 20, to learn the environment surrounding the visually impaired in Taiwan in order to get clues to improve the environment in Morioka, my hometown. What I was surprised at first was high screen doors at the station. They were far higher than in Japan, so it is much safer for people taking trains.

I visited National Chengchi University in Taiwan and met professor Li, who is an expert of tourism policy both in Taiwan and Japan. According to him, the most desirable living environment for everyone is barrier free. Moreover, there are two kinds of "barrier" in the world.That is to say, physical barrier and psychological barrier. To realize the true "barrier-free", we need the idea of "Society 5.0" promoted by the Japanese government.

Society 5.0 is the environment where people and everything are connected on the Internet; in other words, the Internet of Things (IoT). Looking back on the days I spent in Taiwan from the viewpoint of IoT, the most impressive one was my experience using an Easy Card. You can use the card when you take any public transportation; you can even shop at some retail stores with it. It is so easy to use the card: you just put the card on the specific panel. The card can keep your ride records, so when you transition from a bus to a train, discount can be automatically applied. Speaking of the percentage of Easy Card users in Taiwan, the number is about 80%!!

In addition to an Easy Card, I found other impressive technologies. Electric panels are attached to major bus stops, and they show us the operation state. Even minor bus stops hold QR codes to tell the same information. These are not all visually-impaired friendly, but they are much more advanced than what we have in Morioka. By the way, all the buses I took in Taiwan were low floor and had enough room for the impaired.

3. Conclusion

To realize the barrier-free environment for the visually impaired, voicing and more user-friendly interface are the most important. Speaking of IoT, surely Taiwan is more advanced, but the electric panels show the operation state only in visual information; we can add voicing to them. In Japan, there are many kinds of prepaid transportation cards depending on where you live. We should unify them into a single multipurpose card like an Easy Card. Moreover, if we develop a system which automatically authenticate users' rides without putting cards, the visually impaired will be able to enjoy more comfortable life. The other day, I had a contact with a firm which develops innovative software in Kobe. And I suggested the idea to them. Then, we will be able to welcome easier and more comfortable environment for the visually impaired: They are inventing a face authentication system when taking a public transportation.

I would like to keep finding something good to improve the society for the visually impaired!

Thank you for listening!

References

https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000140.000008705.html

https://www.pref.iwate.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/005/384/0925siryou7.pdf

# Improving the Society for the Visually Impaired

**¥88,158,161** collected when a famous band held a charity radio program for the visually impaired

## The environment surrounding the visually impaired in Iwate

**Road**
- Insufficient braille blocks
- Narrow sidewalks
- Many steps

**Train**
Few platform screen doors

Not Barrier-free

**Bus**
- Undeveloped sidewalks
- No timetable with braille
- Few low floor buses
- Outdated ticket dispensers and fare collection machine

| Year | Total number of buses | Low floor bus | Percentage of introduction | Ranking in prefectures |
|---|---|---|---|---|
| 2013 | 533 | 39 | 7.32% | 44 |
| 2014 | 534 | 56 | 10.49% | 43 |
| 2015 | 534 | 64 | 11.99% | 45 |

IC Cards: No cards available like Suica

**Tough for the visually impaired to go out**

## The environment surrounding the visually impaired in Taiwan

**Train**

High screen doors

**Easy Card**

unifying many functions

80% user
- Any public transportation
- Shopping
- Just putting the card on the specific panel

**Bus**

Electric panels showing the operation state

Bus stops hold QR codes to show the operation state

Penetration rate of low floor buses I took: 100%

**Prof. Li**

There are two kinds of "barrier": physical barrier and psychological barrier
To realize the true "barrier-free", we need the idea of Society 5.0

**National Chengchi University**
Tourism policy in Taiwan and Japan

## Society 5.0

01 Hunter-gatherer → 02 Agrarian → 03 Industrial → 04 Information

Next → Society 5.0: the environment where people and everything are connected on the Internet: the Internet of Things (IoT)

## Society 5.0 for the visually impaired

The visually impaired × Society 5.0

- Adding voice to the electric panels showing the operation state
- Automatic authentication of users' rides without putting cards

The visually impaired can enjoy hanging around freely and safely, thanks to the development of the IoT


References
https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000140.000008705.html
https://www.pref.iwate.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/005/384/0925siryou7.pdf
https://www.pref.iwate.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/005/384/0925siryou7.pdf


2703: Iwate Prefectural Morioka Daiichi High School

## Ⅵ　Global English Communication

1 概要

本校 1, 2 学年の英語のカリキュラムは、コミュニケーション英語 I, II (以下「C 英」) 4 単位、英語表現 I, II (以下「英表」) 2 単位の計 6 単位で構成されている。

C 英では、4 単位の内 3 単位を日本人外国語教員(以下「JTL」) 単独で、1 単位を外国語指導助手(以下「ALT」) との Team Teaching (以下「TT」) で指導する。本校では、後者の TT を Global English Communication (以下「GEC」) と名指し、将来のグローバル・リーダーに必要な資質を養うべく、指導内容及び指導法を研究開発している。

ALT との TT では、これまで教科書の各課で扱われる題材を地球規模の問題に敷衍し、独自の教材を開発し、グローバル・リーダーに必要となる資質と英語力を養うことを企図してきた。昨年度は、グローバル課題を英語で学習する CLIL 的なプログラムとディベート活動の効果的なカリキュラム配置を模索し、その点について詳述した。今年度は SGH 指定最終年度ということもあり、模擬国連ディスカッションを GEC のゴールとして据え、試行することが目玉となる。今年度の報告書はその点について大きく紙面を割くことになることを、ここで了承していただきたい。

まずは、本校において模擬国連ディスカッションという言語活動をどのように扱ってきたか、その経緯を簡単に説明したい。過去の報告書から引用しよう。

「年度当初はディスカッション・ドラマではなく、Problem-Solving Format に則ったディスカッションを実施する計画を立てていた。しかしディスカッションはディベートと異なり、生徒各人が比較的自由に発言できるため、適切なタイミングで議論を深められるような発言を積み重ねていくことが非常に難しく、日本語でディスカッションの様式に習熟しておく必要がある。今年度はそのような時間を設けることができず、また取り扱う論題そのものが難しいため、別の方法を模索した。今回ディスカッション・ドラマという形を採ったのは、ディスカッションを通じて生徒達に体験してもらいたい内容を、ライブではないけれども分割して提供できるためである。原稿作成の段階では、生徒達は各国の事情を鑑み、お互いの利益を尊重しながら、協力して最大公約数的な答えを探る作業を日本語で行うことになる。また、それをドラマという形式で再現すれば、英語のパフォーマンスとしての評価対象にもなる。録画をすれば成果物として映像も残るという利点もあり、今回はディスカッション・ドラマという形を採った。」（平成 28 年度）

「将来のグローバル・リーダーに必要な資質は、グローバルな課題に関与する多国籍の人々の個々の意見を尊重しながら、実現可能性と実行可能性の高い解決策を議論し合う中で、各人の意見を収斂していく交渉術でもある。」（平成 29 年度）

「次年度に譲る課題としては、GEC 最後のプロジェクトに位置づけている模擬国連ディスカッション・ドラマを 3 期に前倒し、4 期にはスクリプト無しで生の模擬国連ディスカッションを実施することである。非常に難しい取り組みではあるが、SGH 指定最終年度にぜひ挑戦してみたい課題である。」（平成 30 年度）

ここで、模擬国連ディスカッションを授業で実施しようとする際に直面する困難について整理しておこう。模擬国連にかかわらず、ディスカッションという言語活動の持つ難しさが争点となる。ディベートと比較するとその難しさがわかりやすい。

ディベートでは立論、反駁、要約、質疑応答がそれぞれ肯定側と否定側から繰り広げられるが、一つの言語ゲームとしてスピーチの順番や長さが決められており、議論の作り方もある程度様式が整っている。話し手はその型に沿って議論を組み上げ、それぞれの様式に則ってスピーチを回していく。型や様式が整っている分、発話すべき内容や英語によるコミュニケーションに集中しやすいという利点がある。型や様式のおかげで、発話の動機付けも発話時間も担保されるのだ。一方で、ディスカッションでは発言の時宜が固定されていない。また、ディスカッションは発話の内容も時宜も自由度が高い分、ディベートのように肯定否定で論旨がぶつかり合うことで論点が収斂されていく、いわゆる議論の流れといったものが見えにくいという特徴がある。難しい議題を母国語で扱う際、一般的には、議論の展開を耳で追いながら、どうあるべきかという理想像と照らし合わせて、自らの意見を発話前に整理し、タイミングが来たら発言権を行使する、といったプロセスを経ていることだろう。それを外国語で試みる場合、ディスカッションのテーブルについた者全てが発言の機会を保証されること、議論の展開が可視化されること、発言すべき内容がある程度自動的にナローウィングされることなど、言語ゲームとして成立するには乗り越えるべき課題が多い。昨年度までは、それら諸条件を満たし、ディベートと同様に発話内容と英語コミュニケーションに参加者が集中できる環境を、言語ゲームとして構造的に整備できないうちは、ディスカッションには取り組めないと考えていた。そのため、これまではディスカッション・ドラマという形をとってきた。つまり、スクリプトの原案を練る場面では、母国語によるグローバルな思考を促し、相互理解と共有を行う。スクリプトを言語化する際には英語によるコミュニケーションの内、Writing のスキルを向上させる。そして成果物としてのドラマを、パフォーマンス・テストの対象とする。このように、模擬国連ディスカッションによって経験させたい言語活動を細分化し、段階を分けることで、これまでは良しとしてきた。しかしながら、本来はその場で思考し、自らの意見を英語で述べ、相互に意思疎通することがディスカッションの醍醐味である。どうすればそれが可能なのか。生徒達一人ひとりの英語力がそれを実践できるくらいまで上達するのを、待つしかないのか。

上に挙げた諸条件を満たすべく、今回目をつけたのは「交渉」である。典型的な交渉のディスコースを分析すると、一つの型が見えてくる。ディスカッションの導入のために実施した、交渉の演習風景を見てみよう。

まずは 2 人 1 組で子ども側と両親側のペアを作る。議題は「小遣いの値上げ交渉」である。子ども側は現在の小遣いを倍にしてほしいと考えている。両親側は金額を据え置きたいと考えている。互いに戦略を練る時間を設け、その後実際に英語で交渉を行なった。まずは子ども側が小遣いの増額を要求する。ペアによって要求する増額幅は異なった。両親側は理由がないのに値上げはできないと言う。子ども側は自分の友人を引き合いにだしたり、新たにこれが必要になった、あれに挑戦してみたいなどと理由付けをする。両親はテストで良い点をとったらとか、お手伝いをしたら、といった条件を提示する。また、妥当な金額についても双方の価値観をぶつけ合う。注目して欲しいのは、交渉の言語活動には、それぞれの立場で両者が発言を交互に行わなくてはいけない構造が隠されている点だ。終了後に各ペアに尋ねると、子ども側の言い分が通ったところ、増額幅が 1.5 倍で落ち着いたところ、据え置かれたところ、交渉が決裂したところと、多様な結果が報告された。とまれ、生徒達は非常に楽しくこの言語活動を遂行

し、また緊密で活発な英語コミュニケーションが全てのグループで発生していた。

模擬国連に話を戻すと、そのテーブルでは、各国の事情に合わせて、譲歩できる限度が決まっている。しかしながら、利益をそれぞれ最大化したいという思いを秘して交渉に臨む。模擬国連はまさに交渉という言語活動で成り立っているのだ。ディスカッションという一見自由度が高い言語活動も、交渉を形作る諸要素を適切に配備することができれば、活発な英語コミュニケーションを動機付けし、またダイナミックな議論の展開も担保することができる。こうしてようやく、模擬国連ディスカッションに挑戦する運びとなった。実際どのように模擬国連ディスカッションを行ったのか、その詳細については、ALTが次章にまとめてくれているので、そちらを参照されたい。

ちなみに、令和元年度の 2 学年の年間指導計画は以下の通り。

| | | |
|---|---|---|
| 2 年生 | 1 期 | 教科書の題材から論題を抽出し、ポスター・プレゼンテーションを実施した。<br>テーマは “Unusual Career” である。典型的な職業観に囚われず、様々な職業を紹介し合うことで、職業や業務内容の多様性を理解し、自らの進路目標を省みる端緒とした。 |
| | 2 期 | 3 期で実施する模擬国連ディベートにうまく接続できるよう、価値観を問うディベートを実施した。1 年生で培ったディベートの基礎に則り、今回は立論、反駁、要約、ジャッジといった全ての要素にしっかりと取り組んだ。<br>論題: All high school students should be allowed to leave school during lunch breaks. |
| | 3 期 | 政策を問うディベート（充分に準備を行うプレパレイトリー・ディベート）として、本校で開発してきた模擬国連ディベートに取り組んだ。今回取り上げたテーマは世界規模の飢餓である。<br>論題: Developed countries should give 1% of their GDP to developing countries to solve world hunger.<br>飢餓問題というと発展途上国を想起しやすいが、貧困問題と結びつけると先進国にも散見される事態である。そうであれば単純に、富める先進国が貧しい発展途上国に援助の手を差し伸べるといった単純な構図では、グローバル社会では立ちゆかない。そこにディベートの論題として、賛否の立場で議論する余地と意義が生まれる。肯定側に発展途上国、否定側に先進国をおいて、ディベートを実施した。 |
| | 4 期 | 模擬国連ディスカッションを実施する。周辺知識が充分で、思考や英語によるコミュニケーションに集中しやすい環境を確保するため、テーマは 3 期と同様に世界規模の飢餓とした。<br>論題: To create solution to world hunger |

今年度、模擬国連ディスカッションの円滑な運営を目指して試行錯誤を続ける中で、交渉という新しい言語活動の型に行き着いた。1 年生ではこの成果を活用し、模擬国連のような難しい論題を扱わず、価値観を問う交渉を年度最後の言語活動にした。テーマ及びプロシージャーは以下の通り。他校でも実践可能な、教室が沸く良い活動なので、ぜひ取り入れてもらいたい。

Discussion [Nagotiation]

・12 minute-discussion by 5 members

・Procedures

(1) JTE tells students group members in the early morning.

There are eight groups which consists of five members in class.

Students should decide who is a moderator.

(2) The topic will be announced in class.

(3) Teachers evaluate their performance according to the criteria below.

・Timetable

0 ~ 5 min. Announcement of the topic for the former group.

The former four groups prepare for their discussion (3 min)

5 ~ 20 min. Discussion (12 min.)　*The latter four groups watch their discussion.

20 ~ 25 min. Teachers' Feedback (5 min.)

25 ~ 30 min. Announcement of the topic for the latter group.

The latter four groups prepare for their discussion (3 min.)

30 ~ 45 min. Discussion (12 min)　*The latter four groups watch their discussion.

45 ~ 50 min. Teachers' Feedback (5 min.)

・How to evaluate

A: They are positive, collaborative, and ask some questions and react well.

B: They are a little positive, but don't ask any questions or give some opposite ideas.

C: They don't share their ideas.

・The goal is to organize their ideas within limited time, so they may have to reach a compromise in the end.

・The motion;

(1) Your school has got 10,000,000 yen.　How should you use the money for your school?

A) air conditioning

B) new personal computers

C) a monument (a famous senior such as Miyazawa Kenji)

D) new students' desks and chairs

E) new toilets

(2) You are members of the student council committee.　You are talking about student council budget next year. You have to choose ONE club which can get another 200,000 yen next year.　(the amount of money distributed in 2019)

A) baseball club (420,000)

B) soccer club (240,000)

C) climbing club (145,000)

D) brass band (740,000)

E) cheerleader (400,000)

・Material provided for each student

| | |
|---|---|
| Don't show this card to your members during the preparation time. | Don't show this card to your members during the preparation time. |

| | |
|---|---|
| Your school has got 10,000,000 yen. How should you use the money for your school?<br><br>air conditioning | Your school has got 10,000,000 yen. How should you use the money for your school?<br><br>new personal computers |
| Don't show this card to your members during the preparation time.<br><br>Your school has got 10,000,000 yen. How should you use the money for your school?<br><br>a monument<br>(a famous senior such as Miyazawa Kenji) | Don't show this card to your members during the preparation time.<br><br>Your school has got 10,000,000 yen. How should you use the money for your school?<br><br>new students' desks and chairs |
| Don't show this card to your members during the preparation time.<br><br>Your school has got 10,000,000 yen. How should you use the money for your school?<br><br>new toilets | |

| | |
|---|---|
| Don't show this card to your members during the preparation time.<br><br>You are members of the student council committee. You are talking about student council budget next year. You have to choose ONE club which can get another 200,000 yen next year. (the amount of money distributed in 2019)<br>baseball club (¥420,000) | Don't show this card to your members during the preparation time.<br><br>You are members of the student council committee. You are talking about student council budget next year. You have to choose ONE club which can get another 200,000 yen next year. (the amount of money distributed in 2019)<br>soccer club (¥240,000) |
| Don't show this card to your members during the preparation time.<br><br>You are members of the student council committee. You are talking about student council budget next year. You have to choose ONE club which can get another 200,000 yen next year. (the amount of money distributed in 2019)<br>climbing club (¥145,000) | Don't show this card to your members during the preparation time.<br><br>You are members of the student council committee. You are talking about student council budget next year. You have to choose ONE club which can get another 200,000 yen next year. (the amount of money distributed in 2019)<br>brass band (¥740,000) |

| | |
|---|---|
| Don’t show this card to your members during the preparation time.<br><br>You are members of the student council committee. You are talking about student council budget next year. You have to choose ONE club which can get another 200,000 yen next year. (the amount of money distributed in 2019)<br>cheerleader (¥400,000) | |

2. 模擬国連ディスカッションの実際

模擬国連ディスカッションの導入方法、実施の際の作業手順、モデルケース、そして留意点について、ALT にわかりやすくまとめてもらった。5 年間の GEC の総決算とも言えるものである。ぜひ共有してほしい。

**1) Introduction**

In the third and fourth term, discussion was introduced to provide an opportunity for extensive speaking and listening practice in a bigger group. As discussion is a continuous flow of sharing, receiving, and responding to ideas, it requires a higher level of analysis and quick thinking than that of classroom debate.

Although it can be said that transitioning back into open discussion from academic debate is a step backward, that is not the case. For this plan, rather than merely sharing and providing feedback, students are also expected to solve specific problems by negotiating a compromise from many different ideas. This added layer of negotiation makes this lesson different from basic group discussion.

**2) Lesson Objectives**

Students should develop several skills by the end of the plan. At the academic level, this aims to improve students' interpersonal communication and presentational speaking skills in English. They

should be able to explain an issue and a proposed solution with a detailed procedure in the target language. In addition, the lessons will help students learn to problem-solve through negotiation, an important life skill which involves sorting information, ordering concerns by importance, and finding critical points for compromise to arrive at a creative solution that would benefit everyone involved.

In the previous half of the year, students have performed academic debate. This experience provided them enough practice in breaking down heard information and forming confirmation questions and effective counterarguments – all of which are necessary to carry out a free-flowing discussion on their own.

**3) Lessons Summary**

Third term

During this term, students completed a classroom debate with this resolution: developed countries should give 1% of their GDP to developing countries to solve world hunger. Each team chose a country to represent (developing country for the affirmative side, developed country for the negative side), and the debate proceeded using each country's specific conditions. Next, they were given an introduction to classroom discussion with negotiation. Prior to this, students had a lesson on hunger from a personal level leading up to the world's current situation on global hunger.

i) Country profile – Teams prepare for the debate by doing the necessary research and sharing information with the other team.
ii) Speech preparation – After getting information from both POVs, students develop speeches for their case.
iii) Debate – No two teams have the same country, making each debate unique. Each match was held in front of the whole class.
iv) Introduction to discussion (method) – Continuing the world hunger theme, students practice the flow of discussion with simple hunger-related topics. They shared their ideas based on their personal stance.
v) Discussion practice – Students continue practicing discussion with average topics and controlled roles. These topics require the students to make decisions, so they are encouraged to compare and combine points to come to a solution.
vi) Discussion and negotiation practice – Students continue practicing discussion with challenging topics that require a decision.

Fourth term:

i) What causes world hunger? – This lesson is an introduction that explains the five causes of the problem of world hunger. By identifying these causes, students had an easier time formulating opinions for the discussion.

ii) Discussion practice – This practice focuses on the five causes.

iii) Discussion and negotiation practice – Discussion practice with an emphasis on negotiation strategies (win-win, win-lose, lose-lose).

iv) Country profile preparation – Students form groups of four pairs (eight members in total). Pairs represent two developed countries and two developing countries. Each pair researches their assigned country. Afterward, they gather information about the remaining three countries.

v) Plan preparation – Pairs develop a solution for world hunger.

vi) Negotiation strategy preparation – Pairs share their plans with the other members. After this, pairs create a compromise that benefits all members.

vii) Presentation – Pairs bring forth their plans, then negotiate with each other to find the best compromise for everyone.

**4) United Nations Mock Discussion Procedure**

A. Description:

Students will hold a United Nations free-flowing discussion with the theme of solving world hunger. Students will use specific knowledge from previous lessons about hunger causes, critically analyze each country's unique hunger situation, and use negotiation as a tool to reach a compromise.

B. Procedure:

- Preparation –

i) Students will form eight-member groups then create four pairs. Each pair should choose a country to represent in the discussion. Two pairs may choose a developed country, and the other two may choose a developing country.

ii) Pairs will fill in a **Country Profile** sheet by looking up specific information about their country of choice.

| United States of America | GDP in USD: |
|---|---|
| 1. Natural resources/main industries: | |
| 2. Average quality of life: | |
| 3. Current important problems: | |

| | |
|---|---|
| 4. | State of hunger and poverty problem in this country: |
| 5. | How does this country help solve the global hunger problem?<br>➢ Giving food/monetary aid: _____ to _____<br>➢ Giving development/military aid: _____ to _____<br>➢ Other ways of helping: _____ |

*The fifth question is different for developing countries:

| | |
|---|---|
| 5. | How does this country solve its own hunger problem?<br>➢ Receiving food/monetary aid: _____ from _____<br>➢ Receiving development/military aid: _____ from _____<br>➢ Other ways of ending hunger: _____ |

iii) Pairs will share the answers to the other members. Everyone should have information about all four countries.

iv) With the research and the plan guidelines below, the student pairs will create a three-step plan to stop the hunger problem.

Plan Guidelines:

- ➢ Be specific and realistic.
  - Think about details such as budget, duration of support, donor organizations, and beneficiary groups.
- ➢ Add context to your solution.
  - Include a simple reason for creating that solution. (Ex. Our country has a big military force that will be helpful to Yemen because there is a civil war there now.)
- ➢ Keep your benefit in mind.
  - You are representing a whole country with thousands of citizens. You must think about their well-being, too. If you will give something, what would you like to receive as payment? On the other hand, if you will receive something, what can you offer in exchange?

v) All plans should be shared with the other members beforehand. Once everyone has a copy of all four plans, they will have a week to create a negotiation strategy and a new plan that takes into account the demands from the other countries.

- Discussion proper -

i) Each pair will briefly share their original plan with the other members and the audience. Other members may ask questions freely.

ii) Once all plans are explained, pairs will have a bit of time to process the information and compose their comments about the other plans. They must identify the points that are agreeable or offensive to their purpose. (If all members agree with the same plan, skip to item iv.)

iii) If there are conflicting opinions about the plans, pairs may then share their compromise with the group until they settle for one plan.

iv) After choosing one plan, pairs must finalize the details of the plan by identifying the following information:

- ✓ Budget (amount needed, source)
- ✓ Duration (period of support)
- ✓ Donors and donations (who will give what)
- ✓ Beneficiaries and payment (who will get it and what to give in exchange)

*Students are expected to use negotiation strategies at this part of the presentation.

v) The discussion ends once the group decides on one detailed plan.

**5) Output**

All students were able to have a discussion, although the quality of the content was varied. Some groups came up with creative solutions, while others were basic. Below is a script from a group that performed a mid-level quality discussion.

| | |
|---|---|
| MODERATOR: | Welcome to our United Nations discussion. Let's talk about how we can solve the problem of world hunger. The four countries here today have prepared different suggestions, so if you would like to share your plan, please speak. |
| USA: | Our solution is "Colorful table with Farming Technology: Family time is also colorful." First, we'll dispatch agriculture experts in developing countries for three years. Then they will teach agricultural skills to the locals. Lastly, we'll establish American agricultural companies in developing countries, and the locals can control the companies and farm as they like. |
| MODERATOR: | Thank you, USA. Does anyone have another idea? |
| YEMEN: | I like USA's plan, but our country would like to get military power from USA, too. |
| MODERATOR: | In addition to the agricultural support, you also want to receive military support, is that right? |

| | |
|---|---|
| YEMEN: | No, we only want military support. |
| MODERATOR: | Okay, we will return to that idea later. Let's listen to Sweden next. |
| SWEDEN: | We have a different plan. For us, we want to set a limit on our donations. We want to give a lower amount in proportion to our GNI. Currently, we are giving 0.96%, but we think 0.4% is reasonable. |
| MODERATOR: | You will still give money, but you would like to give less, correct? |
| SWEDEN: | Yes, yes. |
| MODERATOR: | Thank you. How about North Korea? |
| NORTH KOREA: | I agree with Sweden's plan, but I disagree with USA's idea. We don't want any American agricultural companies. Now we are suffering from America's economic sanctions. So we propose to stop military attacks and nuclear tests if America removes the economic sanction. |
| MODERATOR: | You don't want to get anything? You only want USA to lift the sanction? |
| NORTH KOREA: | Yes. |
| MODERATOR: | Thank you. Now let's think about how we can combine these plans. Developing countries, please think about what you can offer USA and Sweden. Developed countries, please think about how you can change your plans to meet with Yemen's and North Korea's demands.<br>----- Short preparation time -----<br>Let's return to the discussion. |
| YEMEN: | Yes, we accept USA's idea to give us agricultural technology, but we want to get 5% of USA's military power. |
| SWEDEN: | About that, your country gets money from agricultural exports. We are a neutral country, so we can't help with your military operation, we can only give money. As for North Korea, first of all, if your attitude about military operations doesn't change, we cannot give you money because we are a neutral country. We don't want to be involved with your country. |
| YEMEN: | Sweden is a developed country, so your technology is also developed. Yemen produces natural gas, so we want technology to help refine our natural gas. So now, we want 5% of USA's military power, technology for farming, and technology for refining natural gas. |
| USA: | We can lend you 5% of our army, but if we do that, it won't solve your hunger problem directly. Sending money and military power will not essentially solve world hunger. We will give you these, and after that, we can give you technology. Your country can become better this way. As for North Korea, if your country doesn't change your attitude toward military affairs, we cannot give our support. |
| MODERATOR: | So Sweden and USA will help North Korea if you change your military system. Will you change it? |

| | |
|---|---|
| NORTH KOREA: | Yes. We accept it. In exchange for your help, we will change our military system. |
| YEMEN: | We agree, too. In order to end the civil war, we need military power. After that, we can solve the hunger problem and become independent. When that happens, we can decide what to give you as payment for your help. |
| MODERATOR: | Thank you. Currently, our plan is for USA and Sweden to support Yemen and North Korea to become independent. USA and Sweden will give monetary and military support to Yemen and North Korea. In addition, USA will help Yemen's agriculture and natural gas.<br>It seems that everyone agrees with this plan. That is the end of our discussion. Thank you all for joining. |

**6) Notes and Points to Consider**

The activity requires knowledge of unique situational information and specific technical vocabulary. A majority of the groups that came prepared were able to incorporate these in the performance. Since the audience is unaware of other countries' circumstances in the discussion, performers simplified explanations and rephrased ideas as necessary.

The output is considered of good quality when members thought of their responsibility to their country and the world. In this way, they negotiated diplomatically. When students understood that meeting all of their exact demands is not feasible, they were able to find a compromise quickly.

Creating this output would not have been possible without the extensive help of the Japanese teachers of English. Although classes were conducted mostly in English, there is, without a doubt, still a need to confirm concepts in Japanese. With such an advanced task, students asked for clarification of certain country-specific situations in Japanese. Complete understanding is necessary to produce an excellent discussion.

Scaffolding the big problem into smaller chunks spread over several classes is a crucial point for the success of this lesson. Begin by making the problem relatable to the students at a personal level, then slowly expand the scope of the topic as students accumulate more information.

3. GTEC

これまで、『SGH 研究開発完了報告書』には、ベネッセが公に示す GTEC と CEFR の間の換算表に基づき、その結果を報告してきた。下に平成 30 年度の該当箇所を引用する。

| 卒業時における生徒の 4 技能の総合的な英語力として CEFR の B1 ~ B2 レベルの生徒の割合 | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | 28 年度 | 29 年度 | 30 年度 | 目標値 |
| SGH 対象生徒 | 16% | 12% | 12% | 70% |
| SGH 対象生徒以外 | 25% | 25% | 25% | 65% |

「当初の目標を達成するには一層の努力が必要であり、ディベートの積極的な導入など、引き続き前項で英語指導の一層の充実をはかっていく。」

とあるが、毎年この報告をする度、指導している側の感触とは乖離した結果に、忸怩たる思いを抱いていた。換算表は妥当であるのか、確かめる術もないまま、結果のみを算出して記載してきた。SGH 指定最終年度であり、英語外部検定試験が大学入試に活用される運びとなっていた今年度はどうか。令和元年 7 月 2 日 (火) 全学年が一斉に「GTEC or Students Advanced タイプ」を受検した。成績概況は以下の通り。

| | | 2019 | | 2019 | | 2019 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| Results | | 1st Year Students | | 2nd Year Students | | 3rd Year Students | |
| | | Score | CEFR-j | Score | CEFR-j | Score | CEFR-j |
| Total | | 834.7 | A2.2 | 896.8 | A2.2 | | |
| Reading | | 174.8 | A2.1 | 200.4 | A2.2 | 231.7 | B1.1 |
| (WPM) | | 81.1 | | 95.9 | | 112.0 | |
| Listening | | 196.0 | A2.2 | 218.2 | A2.2 | 233.1 | B1.1 |
| Writing | | 236.8 | A2.2 | 246.7 | B1.1 | 257.3 | B1.1 |
| Speaking | | 226.8 | A2.2 | 231.4 | A2.2 | | |
| CEFR-j | Score | 単純 | 累積 | 単純 | 累積 | 単純 | 累積 |
| B2 | 1190 - | 0 | 0 | 2 | 2 | | |
| B1.2 | 1060 - | 6 | 6 | 19 | 21 | | |
| B1.1 | 960 - | 12 | 18 | 39 | 60 | | |
| A2.2 | 810 - | 145 | 163 | 167 | 227 | | |
| A2.1 | 690 - | 103 | 266 | 45 | 272 | | |
| A1.3 | 520 - | 8 | 274 | 4 | 276 | | |
| A1.2 | 370 - | 0 | 274 | 0 | 276 | | |
| A1.1 | 270 - | 0 | 274 | 0 | 276 | | |
| Pre-A1 | 0 - | 0 | 274 | 0 | 276 | | |

| | | 2019 | | 2019 | | 2019 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| Results | | 1st Year Students | | 2nd Year Students | | 3rd Year Students | |
| | | Score | CEFR-j | Score | CEFR-j | Score | CEFR-j |
| Total | | 607.7 | | 665.2 | | 722.1 | |
| Reading | | 174.8 | A2.1 | 200.4 | A2.2 | 231.7 | B1.1 |
| (WPM) | | 81.1 | | 95.9 | | 112.0 | |
| Listening | | 196.0 | A2.2 | 218.2 | A2.2 | 233.1 | B1.1 |
| Writing | | 236.8 | A2.2 | 246.7 | B1.1 | 257.3 | B1.1 |
| Speaking | | (226.8) | (A2.2) | (231.4) | (A2.2) | | |
| CEFR-j | Score | 単純 | 累積 | 単純 | 累積 | 単純 | 累積 |
| B2 | 870 - | 0 | 0 | 6 | 6 | 22 | 22 |
| B1.2 | 760 - | 5 | 5 | 26 | 32 | 65 | 87 |
| B1.1 | 680 - | 24 | 29 | 69 | 101 | 83 | 170 |
| A2.2 | 590 - | 136 | 165 | 139 | 240 | 72 | 242 |
| A2.1 | 500 - | 109 | 274 | 32 | 272 | 21 | 263 |
| A1.3 | 380 - | 8 | 282 | 4 | 276 | 0 | 263 |
| A1.2 | 270 - | 0 | 0 | 1 | 277 | 0 | 263 |
| A1.1 | 190 - | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 263 |
| Pre-A1 | 0 - | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 263 |

昨年度の 1 年生から、大学入学共通テストにおける外部検定試験の活用に対応すべく、Speaking を受検するようになった。3 年生は Speaking を受検していないため、Total の結果は出ていない。そのため、右側に Speaking を除いた結果も併置した。3 年生は、学年全体の CEFR が B1.1 となっている。詳述する

と、B1 を達成したのは、SGH 対象生徒（普通科）で 60.8%、SGH 対象生徒以外（理数科）で 88.9%となっている。普通科と理数科を合わせた学年全体の平均は 64.6%である。これは 7 月というかなり早い時期に受検した結果であり、卒業までにはほとんどの生徒が目標値を達成するであろうことは、容易に想像できる。ようやく指導している側の感触と検査結果が合致した。

この結果は、SGH 指定最終年度に至り、飛躍的に生徒達の英語運用能力が伸長したことに起因する、と結論づけていいのだろうか。以下にその問題を考える材料として、過年度比較を掲載する。

| | | 2018 | | 2019 | | 増減 | 2018 | | 2019 | | 増減 | 2018 | | 2019 | | 増減 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| Results | | 1st Year Students | | 1st Year Students | | | 2nd Year Students | | 2nd Year Students | | | 3rd Year Students | | 3rd Year Students | | |
| | | Score | CEFR-j | Score | CEFR-j | | Score | CEFR-j | Score | CEFR-j | | Score | CEFR-j | Score | CEFR-j | |
| Total | | 573.2 | | 607.7 | | 34.5 | 627.4 | | 665.2 | | 37.8 | 666.0 | | 722.1 | | 56.1 |
| Reading | | 165.1 | A2.1 | 174.8 | A2.1 | 9.7 | 191.3 | A2.2 | 200.4 | A2.2 | 9.1 | 210.0 | A2.2 | 231.7 | B1.1 | 21.7 |
| (WPM) | | 75.4 | | 81.1 | | 5.7 | 90.8 | | 95.9 | | 5.1 | 101.1 | | 112.0 | | 10.9 |
| Listening | | 182.4 | A2.1 | 196.0 | A2.2 | 13.6 | 203.0 | A2.2 | 218.2 | A2.2 | 15.2 | 217.0 | A2.2 | 233.1 | B1.1 | 16.1 |
| Writing | | 225.7 | A2.2 | 236.8 | A2.2 | 11.1 | 233.1 | A2.2 | 246.7 | B1.1 | 13.6 | 239.0 | A2.2 | 257.3 | B1.1 | 18.3 |
| Speaking | | (218.0) | (A2.1) | (226.8) | (A2.2) | -8.8 | | | (231.4) | (A2.2) | | | | | | |
| CEFR-j | Score | 単純 | 累積 | 単純 | 累積 | | 単純 | 累積 | 単純 | 累積 | | 単純 | 累積 | 単純 | 累積 | |
| B2 | 870 - | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 2 | 6 | 6 | 4 | 5 | 5 | 22 | 22 | 17 |
| B1.2 | 760 - | 4 | 4 | 5 | 5 | 1 | 14 | 16 | 26 | 32 | 12 | 27 | 32 | 65 | 87 | 38 |
| B1.1 | 680 - | 15 | 19 | 24 | 29 | 9 | 50 | 66 | 69 | 101 | 19 | 73 | 105 | 83 | 170 | 10 |
| A2.2 | 590 - | 87 | 106 | 136 | 165 | 49 | 110 | 176 | 139 | 240 | 29 | 105 | 210 | 72 | 242 | -33 |
| A2.1 | 500 - | 131 | 237 | 109 | 274 | -22 | 78 | 254 | 32 | 272 | -46 | 45 | 255 | 21 | 263 | -24 |
| A1.3 | 380 - | 41 | 278 | 8 | 282 | -33 | 11 | 265 | 4 | 276 | -7 | 5 | 260 | 0 | 263 | -5 |
| A1.2 | 270 - | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 277 | 1 | 0 | 0 | 0 | 263 | 0 |
| A1.1 | 190 - | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 263 | 0 |
| Pre-A1 | 0 - | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 263 | 0 |

「増減」に注目してほしい。すべからく全ての学年が総合で 30 点以上伸ばしている。別の試験の結果を見る限り、今年度の各学年が、過年度よりも英語のアチーブメントが有意に高いことを示す材料はない。例年並みである。つまり、今年度の GTEC においては、CEFR との整合性を高めるために、ベネッセが評価の枠組みを変えたのだと考えられる。これ以上の言及は避けるが、今年度の結果が突出しているため、経年比較も過年度比較もあまり意味がない。ここでは、各学年でどの程度 CEFR を達成しているか、その実数や割合を確認するにとどめるべきだろう。

昨年度の報告書に「過去 2 年間の報告書でも述べた通り、GEC 特にディベート活動が最も効果を発揮するのは、Writing のようである。今年度は 1 年生が、ディベートの導入時期を 2 期に設定したため、7 月上旬の GTEC では Writing にはその成果が現れない。次年度の伸びを期待している。」と既述した。結果を見て欲しい。

| | | 2018 | | 2019 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| Results | | 1st Year Students | | 2nd Year Students | | |
| | | Score | CEFR-j | Score | CEFR-j | |
| Total | | 573.2 | | 665.2 | | 92.0 |
| Reading | | 165.1 | A2.1 | 200.4 | A2.2 | 35.3 |
| (WPM) | | 75.4 | | 95.9 | | 20.5 |
| Listening | | 182.4 | A2.1 | 218.2 | A2.2 | 35.8 |
| Writing | | 225.7 | A2.2 | 246.7 | B1.1 | 21.0 |
| Speaking | | (218.0) | (A2.1) | (231.4) | (A2.2) | (13.4) |
| CEFR-j | Score | 単純 | 累積 | 単純 | 累積 | |
| B2 | 870 - | 0 | 0 | 6 | 6 | 6 |
| B1.2 | 760 - | 4 | 4 | 26 | 32 | 22 |
| B1.1 | 680 - | 15 | 19 | 69 | 101 | 54 |
| A2.2 | 590 - | 87 | 106 | 139 | 240 | 52 |
| A2.1 | 500 - | 131 | 237 | 32 | 272 | -99 |
| A1.3 | 380 - | 41 | 278 | 4 | 276 | -37 |
| A1.2 | 270 - | 0 | 0 | 1 | 277 | 1 |
| A1.1 | 190 - | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| Pre-A1 | 0 - | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |

学年全体として見たとき、他の 3 技能は A2.2 にとどまりながら、Writing では CEFR が B1.1 となっている。一年越しに GEC の成果がてきめんに出たと言える。

先述の通り、今年度はベネッセが評価の枠組みを大きく改変してしまったため、過年度比較を詳細に行うことにはあまり意味がない。英語外部検定試験の大学入学試験への活用については未だ先が見えないが、大学側が求める最低限の達成度 CEFR の A2 は、1 年生 7 月時点で本校のほとんどの生徒が達成している。これは言い換えれば、大学入学試験という外的な尺度に振り回されることなく、SGH 指定期間が終了してからも、本校として生徒に要求する英語運用能力を学習指導要領に則った形でカリキュラムに落とし込んでいく余地が保証されたということだ。GEC でこれまで開発してきたグローバルな思考を促す言語活動を、今後も SGH 事業の大いなる遺産として、継続発展させていきたい。

## Ⅶ　グローバル現代社会

### １　概要

本校では１学年において公民科「現代社会」が２単位の必修科目として設定されている。ＳＧＨの研究開発におけるカリキュラム改革の一環として，従来の現代社会に代替する新たな科目として「グローバル現代社会」を開講している。

本年度は，2015 年９月の国連サミットで全会一致で採択された「持続可能な開発目標（SDGs)」を取り入れた課題探究活動を実践した。SDGs は発展途上国のみならず，先進国自身が取り組むユニバーサル（普遍的）なものである。グローバル・リーダーを目指す本校入学生に対し，地球環境問題や資源・エネルギー問題などといったグローバルな課題に対して，SDGs の視点から考察させることにより，グローバル社会の一員としての自覚を養わせることを目的とした。

また，課題追究学習を実施する際，一連の学習活動の評価をどのように行うか研究した。

### ２　授業内容

（１）レポートの課題設定

自分たちの身近な問題（環境問題，資源・エネルギー問題）が，SDGs が示すグローバルな問題とどのように関わっているか，その問題の改善のために自分はどのように貢献できるか考えよう。

（２）レポート作成の流れ

以下の①～⑥について生徒に説明し，学習を進めた。

① テーマ設定（授業で扱った内容から各自選択する。テーマを見て内容がわかるように）

② 問題の所在（何が，どのように問題になっているか？）

③ SDGs とのかかわり（とりあげた問題が，SDGs17 の目標のどれに関わるか？）

④ 問題の原因（その問題はなぜ起ったか？）

⑤ 問題改善のための取り組みや提案（根拠を含めて具体的かつ論理的に，SDGs 目標達成のためにどのように貢献できるか，自分が取り上げた身近な問題がグローバルな問題とどのようにつながるかを明らかにすること）

⑥ 参考文献（作成にあたり用いた本や Web ページの情報を掲載する。資料集も可。）

分量は文字のほか写真・グラフ・統計・参考文献を含めてＡ４判１～２枚，形式については上記内容がわかれば，特に形式は問わないこととし，手書きでもパソコンでも可とした。レポート作成の条件として，上記①～⑥の流れでまとめること，テーマは前期中間で学習した内容をもとに，自分がさらに深めたい内容を選択すること，自分のテーマと SDGs とのかかわりを明確にすること，統計資料を一つ以上用いること（どこでどの資料を使うかは自分で考えること）とした。

（３）発表

作成したレポートをもとに，４人一組でグループをつくり発表した。４分で発表，３分で質疑応答（一人１つ質問すること），２分で相互評価を行った。

（４）ふりかえりシートの作成と今後の学習へのつながり

学習活動のまとめとして，ルーブリックに基づき，４観点に基づき自己評価をＡ～Ｃの３段階で行わせ，そのような評価をした理由を記入させた。合わせて，発表会の際に受け取った相互評価の集約をさせ，よかった点と改善点をまとめたうえで，そのような相互評価を自分はどのように受けとめたかを記入させた。これにより，自己評価と相互評価をルーブリックに基づき比較できるようにした。最後に，より質の高い学びを実現するために，自己評価・相互評価を踏まえて，今回のレポート作成と発表，評価を今後の学習にどのように生かしていくか，気づいたことや考えたことをまとめさせた。

### ３　教員による学習活動の評価

授業時におけるとりくみ，提出されたレポートとふりかえりシートの内容を，考査外の学習としてルーブリックに基づきＡ～Ｃの３段階で評価した。また，定期考査において，「“Think Globally, Act

Locally”という言葉がある。この意味を踏まえて，あなたのLocalな活動が，Globalな問題の解決や改善にどのように結びつくのか，授業で扱った地球環境問題，資源・エネルギー問題のなかから１つ取り上げ，あなたの考えを200字前後で具体的に述べなさい。」という問題を出題し，「思考・判断・表現」の観点から100点中10点分で評価した。

## ４　成果と課題

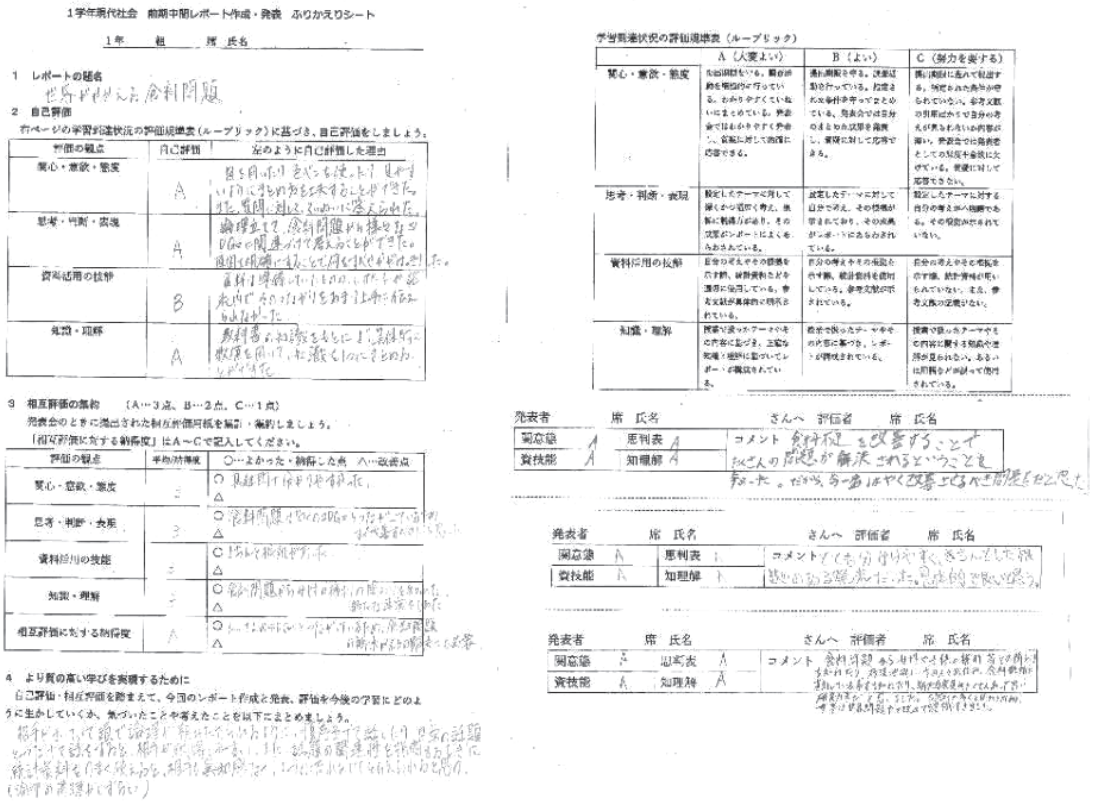
最初に学習到達目標を設定し，目標達成のためのルーブリックを作成したことで，授業者も学習者も同じ基準で課題追究学習を行うことが可能になった。また，評価規準が明確になったことで，レポートや発表も充実したものが多く，ほとんどがＡ評価となった。

ＳＧＨ指定校としての「グローバル現代社会」は今年度をもって終了となるが，SDGsを踏まえた学習や課題追究的な学習活動は今後より一層重視される。今年度までの成果と課題を生かし，より高質の授業を展開したい。

相互評価に用いたルーブリックの表

| | Ａ（大変よい） | Ｂ（よい） | Ｃ（努力を要する） |
|---|---|---|---|
| 関心・意欲・態度 | 提出期限を守る。調査活動を積極的に行っている。わかりやすくていねいにまとめている。発表会ではわかりやすく発表し，質疑に対して的確に応答できる。 | 提出期限を守る。調査活動を行っている。指定された条件を守ってまとめている。発表会では自分のまとめた成果を発表し，質疑に対して応答できる。 | 提出期限に遅れて提出する。指定された条件が守られていない。参考文献の引用ばかりで自分の考えが見られないか内容が薄い。発表会では発表者としての態度や意欲に欠けている。質疑に対して応答できない。 |
| 思考・判断・表現 | 設定したテーマに対して深くかつ幅広く考え，根拠に説得力があり，その成果がレポートによくあらわされている。 | 設定したテーマに対して自分で考え，その根拠が示されており，その成果がレポートにあらわされている。 | 設定したテーマに対する自分の考えが不明瞭である。その根拠が示されていない。 |
| 資料活用の技能 | 自分の考えやその根拠を示す際，統計資料などを適切に使用している。参考文献が具体的に明示されている。 | 自分の考えやその根拠を示す際，統計資料を使用している。参考文献が示されている。 | 自分の考えやその根拠を示す際，統計資料が用いられていない。また，参考文献の記載がない。 |
| 知識・理解 | 授業で扱ったテーマやその内容に基づき，正確な知識と理解に基づいてレポートが構成されている。 | 授業で扱ったテーマやその内容に基づき，レポートが構成されている。 | 授業で扱ったテーマやその内容に関する知識や理解が見られない。あるいは用語などが誤って使用されている。 |

ふりかえりシートの実例



## Ⅷ　SGHとICT

１　目的

課題研究における「主体的・対話的で深い学び」の姿勢をICT活用によってサポートすることにより、活動の質の向上と効率化を図ることを目的とする。

２　前年度までの取り組み

前年度までに「盛岡一高学校生活サポートサイト（以下、サポートサイトと呼ぶ）」を用いて以下の２点を検証した。

（１）掲示板機能を用いた現地からの活動報告

（２）アンケート機能を用いた評価の集計作業

前年度まではサポートサイトの試験的な運用の中で実施していたこと、Wi-Fi環境が無かったために生徒所有のスマートフォンを積極的に活用させることができなかったことから実施頻度としては少なかったが、効果的であることは実証できた。

今年度はWi-Fi環境が整ったことを受けて、サポートサイトの利用場面を拡大していくこととした。

３　盛岡一高学校生活サポートサイトについて

「Moodle」というシステムを用いて、平成３０年５月より学校関係者専用サイトとして開設し、生徒・保護者・教員間での情報共有に活用している。

４　今年度の校内ＩＣＴ環境の整備について

（１）サポートサイトの利用拡大

前年度まではサポートサイトを生徒・教員間のみで利用したが、今年度から保護者も利用できるようにした。保護者が各自の端末から学校からの配付物をＰＤＦデータで閲覧したり、各種調査をＷＥＢ上で入力したりできるようになった。

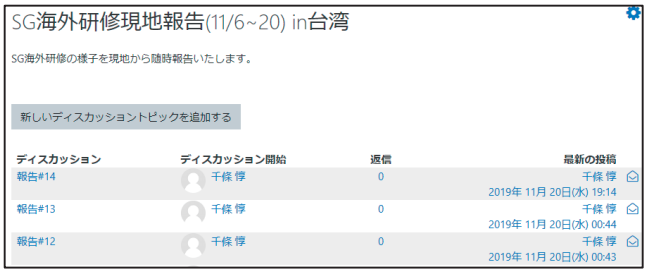
（２）一高Wi-Fiの導入

本校には全生徒が同時利用できるだけのタブレット端末等が無いため、生徒が持つスマートフォン等を利用する形にせざるを得ないが、通信料の負担が課題であった。そこで今年度より、モバイルルーター（ホームタイプ）を７台導入し、ホールなどの共有スペースに置くことにした。これにより、生徒や職員は自由に自分の端末でネット環境を利用できるようになった。モバイルルーターは移動して利用することが可能であることから、１学年が各クラスで活動する際など、その教室に移動することにより、場所を制限することなくネット環境を提供することができた。同時にサポートサイトも利用させやすくなった。

５　探究活動へのサポートサイト活用実践事例

（１）海外派遣先からの活動報告

昨年度に引き続き、今年度の台湾海外派遣で現地から毎日の活動の様子をサポートサイトに書き込んでもらった。




**R1 SG 台湾 FW**

11/13（水）

研修 8 日目。今日は花蓮県政府教育所を表敬訪問からスタートです。今のところ体調を崩す生徒もおらず順調に研修がすすんでいます。今年度から盛岡市と花蓮市が友好都市の締結を行うということで、昨年から花蓮市の慈済大学附属高級中学の交流を始めた本校も、両市の友好関係を発展させるために高校生の立場から何か役に立ちたいと考え、盛岡市役所の方にお願いし、今回の訪問が実現しました。

花蓮県政府教育所は野球のスタジアムの一部に事務所があり、まさに球場の一部という感じでした。最初に教育所副所長の翁さんから花蓮県の高校について説明がありました。次に本校から学校紹介、応援歌、「上を向いてあるこう」の合唱を披露しました。昨日に続き二度目の発表だけあって、堂々としたものでした。その場にいた向こうの職員の方にも大変喜んでいただきました。次に3D プリンターでの作成過程を見学、さすがＩＴが盛んな国だけあって、一般の市民にも開放しているとのこと。花蓮市もＩＴ技術者の育成には

【サポートサイトでの現地からの報告】

同行している教員が、その日にあった出来事を写真付きで投稿した。

この報告は日本にいる生徒や保護者も自由に閲覧できる。SG 台湾派遣実施期間中、延べ 433 回の閲覧があった。興味のある生徒や保護者が積極的に閲覧していることが分かる。

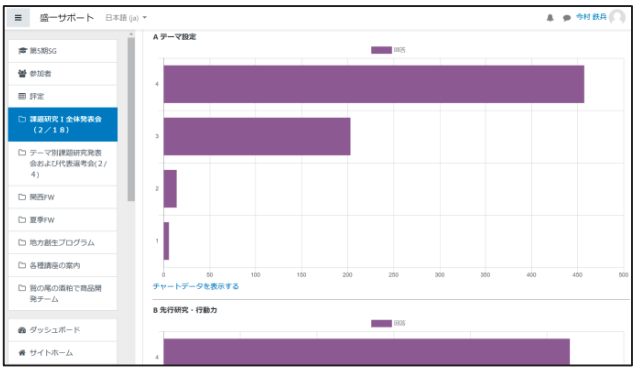
本校では SGH 海外派遣の他に、TOLIC との連携によるドイツへの MEDICA 派遣、白堊の翼がある。今年度はこれらの海外派遣の全てで現地からの報告を掲載した。

（2）成果発表会での評価入力

SG 探究活動の成果発表会では、各班の発表後にサポートサイトから評価の入力をさせた。

昨年度から継続的に利用しているため、入力はスムーズに行われた。今年度最後の発表会ではのべ 3,279 件の入力数となり、集計は発表会終了後約 15 分で完了した。コメントの入力もデータに反映されており、発表した班へのフィードバックも可能となった。効率的に質を高めていくツールとして有用である。

【スマートフォンの入力画面】



【入力状況の確認画面】

【コメントの確認画面】

このように WEB 環境でアンケート機能を用いることで、集計作業の効率化、即時フィードバックによる研究の質の向上が見込まれる。

6　成果と課題

今年度の取り組みでは、ICT による活動の補助としての有用性がさらに確認でき、全体での運用が可能な段階まで充実させることができた。しかし、生徒の「主体的・対話的で深い学び」につなげるためには、ICT 活用スキルや利便性を高めていく必要がある。

今年度は、各班の研究成果を蓄積するために掲示板機能を用いて e ポートフォリオ化する案もあり準備をしていたが、日々の活動で利用することができなかった。使い方についてガイダンスをしたり、日々のサポート体制を整えたりすることで次年度以降生かしていきたい。（下の図は過去に理数科課題研究で利用した活動履歴の蓄積の様子で、今年度も同様のイメージで使わせたかったものである。）

研究活動の履歴を残すことで、振り返りや軌道修正の機会が多くなる。主体的・対話的な活動を深めるために今後も持続可能な ICT 活用方法を模索していきたい。

## Ⅸ　英語ディベート

SGH 指定に伴い、4 年前の平成 27 年 4 月から、英語部員を中心に英語ディベート大会出場を目的とした活動を行なっている。昨年度は県大会で初優勝、12 月に福井で開かれた全国大会（今年度が 14 回目の開催）に 2 年連続 2 度目の参加を果たした。予選では全国の強豪校を相手に 3 勝をおさめ、東北勢で最高位となる総合 22 位となった。また、大会運営ボランティアに勤しんだため、「ベストサポーター賞」をいただいた。

今年度の論題は、「日本国は，残業も含めた週あたりの最長平均労働時間を，（E.U.にならい）48 時間に制限すべきである。是か非か。」である。これまでに培った経験や人脈を活かし、県内の高校のみならず、県外の強豪校とも練習試合をたくさん行なった。顧問や ALT の強力な支援の下、準備を入念に行い、今年度の大会本番に臨んだ。結果は以下の通り。

**第 7 回岩手県 Kenji Cup 高校生英語ディベート大会**
令和元年 11 月 5 日（火）@岩手県総合教育センター
盛岡一高チーム A: 4 勝 0 敗で優勝（全国大会出場）
盛岡一高チーム B: 3 勝 1 敗で準優勝

大会で唯一人に贈られるベストディベーター賞を 1 年生の谷藤沙帆が受賞。今年度は遂に、エントリーした 2 チームが共に優勝、準優勝を果たした。

**第 14 回全国高校生英語ディベート大会 in 群馬**
12 月 25 日(水)~ 26 日(木)@共愛学園前橋国際大学
28 位 / 64 校（2 勝 2 敗 2 分け）

3 年連続 3 回目の出場。予選では 2 勝をおさめ順調な滑り出しとなったが、その後はパワーペアリング・システムにより、強者との対戦が組まれ、苦戦を強いられた。昨年度の結果（総合 22 位）を上回ろうとこれまで努力を重ねてきたが、悔しい結果となった。しかしながら、コンストラクティヴ、アタック、ディフェンス、サマリーの各スピーチで優秀な生徒に贈られる個人賞で、本校の 2 年生、一条佳穂が最優秀サマリースピーカー賞を受賞した。これは東北勢初の快挙、特筆すべき成果と言える。サマリーは肯定側否定側双方の議論の展開を適切に踏まえ、自チームの優勢を論理的に訴えなくてはならない、ディベートの各スピーチにおいては、臨機応変さと論理的思考力、そして高い英語運用能力を最も求められる難しい箇所である。そこで日本で一番という評価を得られたことは、本人の日頃の努力はもちろんのこと、英語部としてのこれまでの研鑽の日々の結実として誇るべきものであろう。昨年度に続いてベストサポーター賞を授与されたことも、4 年間のひたむきな活動に花を添えた。

今年度は上記ディベート大会に加えて、より即興性が強いパーラメンタリー・ディベートに対する取り組みも進めた。12 月 22 日（日）には東京大学で開催された、文部科学省後援第 5 回 PDA 高校生即興型英語ディベート全国大会に英語部の有志が初参加、全 64 チーム中 29 位となり「授業導入賞」を賜った。また、1 年生女鹿翼が実質的に個人で全国 1 位となるベスト POI 賞に輝くなど、今後この分野での活躍も大いに期待される結果となった。

### 今後の方針

盛岡一高英語部は、上記のような結果を残せるくらいの、岩手県内有数の強豪校となった。SGH 指定が一つのきっかけとして始動したディベート活動も、指定期間満了となる次年度以降、部の主な活動として自立して継続していく土台を、既に確立したと言えるだろう。ポスト SGH においても、英語部の全国規模の更なる活躍が期待される。GEC の授業で全ての生徒にディベートという言語活動の基礎を注入し、素地を広く養いながら、英語部の生徒は全国大会でも通用するくらいにその競技力を高めるという構造が整備されてきた。GEC の授業は ALT とのティーム・ティーチングで行われ、週 1 単位時間で他の外国語の授業と緩やかに連動しながらも独立して実施している。そのためカリキュラム上、SGH 事業で培った構造を、今後も継続しやすいという利点がある。こうした強みを財産としながら、今後もディベート活動を通した英語運用能力の増強と、論理的思考力の育成方法の改善深化に努めていきたい。

岩手日報　2020年（令和2年）1月1日（水曜日）

英語討論 総括キラリ

一条さん（盛岡一高）全国最優秀

努力実り県勢初快挙

「岩手日報2020年1月1日付朝刊」
「この記事・写真等は、岩手日報社の許諾を得て　転載しています」

## Ⅹ　生徒海外派遣事業「白堊の翼」

### 1　概要

創立 100 周年を記念して発足した生徒海外派遣事業「白堊の翼」は、昭和 54 年度にスタートし、平成 31 年度で祈念すべき 40 回目を迎えた。

平成 28 年度から 3 年連続で、英国ロンドンから西へ 100km ほど離れた場所にあるコッツウォルズ地方を訪問した。主たる研修先も同様にレンコム・カレッジ（小中高一貫の私立学校）である。コーディネートしてくれるコッツウォルズ・ウィンド・アカデミー（CWA）は、パッケージ化された良質の研修を安定して提供してくれる。そのため、今年度は新機軸を導入した。

今回の海外派遣事業では、SGH 事業との連動を試みた。SG 課題研究で育んだ視点を持って、イギリスで日常を送る。滞在中は、日本で取り組んだ課題研究のテーマに沿って、イギリスの事例を実地で調査したり、ホストファミリーやレンコム・カレッジの生徒への聞き取り調査などを行う。さよならパーティでは、イギリスで深めた洞察や調査結果をまとめて、スピーチとして発表する、というプログラムである。単なる文化交流に留めることなく、十代半ばという多感な時期に海外を訪れる意義を高めることを意図した。結果として、さよならパーティで披露したスピーチの質は非常に高く、例年以上に内容の濃い研修となった。各自のテーマに沿った体験的な日英比較は、本校生徒にとっては知見を深められただけでなく、聴いてくれた関係者やホストファミリーにとっても発見が多かったようで、反響も大きかった。

世界を複眼的に。日本人というアイデンティティを軸として、異国の地で生活をすれば、5 感が開き、多くのものを吸収する。日々のコミュニケーションや食べ物、生活を通じて、言ってみれば、心や体が順応する。世界を複眼的に感じることができる。課題研究で育んだ視点は、もう一つ、頭を成長させる。世界を複眼的に見ることができる。白堊の翼に SGH 的な要素を盛り込んだことによって、SG 海外フィールドワークとはまた別の素晴らしい海外研修のモデルができあがったと自負する。

### 2　派遣期間

平成 31 年 3 月 2 日（土）～3 月 27 日（水）

### 3　派遣先

イギリス　コッツウォルズ地方レンコム村
主たる研修先：レンコム・カレッジ
　　オックスフォード大学

### 4　派遣者

| | |
|---|---|
| 2 年生 | 小野寺　叶 |
| 1 年生 | 薄木　千景子　中村　　冴 |
| | 中屋　穂乃花　川嶋　　芳 |
| | 瀬田　唯莉花　山﨑　詩織 |
| | 石川　萌恵子　金澤　青空 |
| | 鎌田　　思 |
| 引率者 | 千條　　惇（英語） |
| | 細川　純平（理科） |

### 5　派遣先の概要

（1）派遣先

第 38 回、第 39 回から引き続き、イングランド南西部コッツウォルズ地方で研修を行った。広大な草原で羊が草を食み、コッツウォルドストーンと言われる蜂蜜色の石灰岩で組み上げられた家が散在する丘陵地帯は、そこに住む人々のみならず、ロンドンなど都会に住む人々からも保養地として古くから親しまれ、「イギリス人の心のふるさと」と言われる景観の美しい土地である。また、シェイクスピアの故郷であるストラトフォードや世界最高峰の大学がある街として名高いオックスフォード、ローマ人の保養地として栄えたころの名残を今なお残すバースなど、歴史的にも価値ある場所が数多く、イギリスの、

ひいてはヨーロッパの歴史・文化に触れるには最適な研修先である。

（２）主たる研修先

コッツウォルズの中核都市チェルトナムから車で３０分ほど山道を進むと、丘の上に城郭のような美しい建物が見えてくる。それがレンコム・カレッジである。レンコム・カレッジは、イギリスでも数少ないパブリックスクール（小・中・高一貫の私立学校）であり、また、児童・生徒の半数以上が学内の寮で生活するボーディングスクールでもある。１学年は４０人～５０人程度であり、そのため一人ひとりの子どもにきめ細かで充実した教育が提供されていた。

そのようなすばらしい環境の中で、午前中の英語研修からはじまり、午後は各教科の授業を体験したり、各種の学校行事に参加してレンコム生とのふれあいを深めたり、貸し切りバスに乗ってコッツウォルズ地方の街をめぐるなど、大変充実した日々を送った。また、ホームステイ先も、豊かで温かく、フレンドリーな家庭ばかりであり、派遣生は、学校だけではできない貴重な体験ができた様子である。

綿密なプログラムのなかで、語学のみならず、異文化に触れて自己を深める絶好の機会となったことと確信している。

（３）その他研修先

約３週間のレンコム･カレッジでの研修を終えた後、バスでロンドンへ移動し、１日目はガイドの方の案内つきで、バッキンガム宮殿からウェストミンスター周辺の散策と、大英博物館見学をした。バッキンガム宮殿では、衛兵の交代式を見学。大英博物館は広大であり、すべて見て回ることはとてもできなかった。２日目は終日、３日目は午前中ロンドン自主研修を行った。ミュージカル「オペラ座の怪人」の鑑賞、アフターヌーンティーを全員で堪能した。その後ヒースロー国際空港から帰路に就いた。

６　費用

| | |
|---|---|
| （１）旅費総額（一人分） | 653,000 円 |
| （２）白堊振興会による補助 | 250,000 円 |
| （３）生徒自己負担 | 403,000 円 |
| （５）その他経費（額は任意） | |
| ・小遣い | 100,000 円程度 |
| ・旅行任意保険 | 20,000 円程度 |

７　令和元年度生徒海外派遣事業「白堊の翼」

今後も本事業は継続する。しかしながら、近年自己負担額が増加し 40 万円を超えてしまっていることに対して、問題視する声もあった。本事業の本来の目的は、生まれた家庭の貧富によらず、志のある者に海を越えて知見を深める機会を与えるというもの。校内の海外交流委員会で入念に議論を重ねた結果、今後は原点に立ち返ることとなった。次年度については、期間を１週間程度短縮し、行き先をカナダはブリティッシュコロンビア州、ケロウナへと一新し、自己負担額も 20 万円強まで抑えることとなっている。

※ 令和元年度はコロナウィルスの流行により実施はとりやめとなった。

## Ⅺ　運営指導委員会議事録

### 1 開催日時

令和２年２月27日(木)　13:20～15:00

### 2 参加者

[運営指導委員]
遠藤洋一委員長　佐々木修一委員
※谷村邦久委員・佐藤智子委員は欠席。
[管理機関]
岩手県教育委員会　菊池一章学力向上担当課長　松本諭指導主事　山田知弘指導主事
[指定校]
佐藤有校長　阿部圭次副校長　青木裕信副校長
SGH推進課員及び事務担当職員７名

### 3 議事

#### (1)[指定校]より　事業報告

**ⅰ)令和元年度研究開発概況報告(佐藤幸)**

今年度は、SGH指定校として最終年度にあたり、今までの集大成としての取組と、来年度以降のポストSGHの形を検討すること、この２本を柱に行ってきた。具体的な取組は以下の通りである。

**ⅱ) SG課題研究Ⅰについて（中野）**

昨年までのプログラムを踏襲して行った。内容としては、①盛岡市との連携による地方創生プログラム、②関西圏におけるフィールドワーク、この２つである。

「地域創生プログラム」は、一昨年度から盛岡市の全面的な支援を受けて、地域の問題を、現在まさにその問題と取り組んでいる大人たちとともに考えることができた。

「関西圏フィールドワーク」では、実社会との交流を図った。

そもそも１年次では「探究活動はどういうものか」を実際に体験するという位置づけである。高校生活に慣れるのと同時に活動が進行する点が大変だと感じた。また、１学年の先生は新任の先生方が多いこともあり、指導者として全体像が見えておらず SGH のゴールを共有しにくい点が課題である。

**ⅲ) SG課題研究Ⅱについて（千條）**

「地方創生」というテーマのもと、課題研究Ⅰの「課題を見つける」という実践のあと、Ⅱでは「課題を探究する」ことになる。

中間評価において指摘を受けた点の改善として行ったのは次の通り。

「生徒に身につけさせるべき資質・能力や卒業時点での生徒像を明確にする視点が弱い」という指摘については、「問題解決に向けての主体的な姿勢」を、生徒に身につけさせたい資質と考え、そのことを意識してアクションプランの実践を行った。

「個々の教員のさらなる連携強化」については、教員向けの研修会を行い意識の共有を図った。カタリバの方たちにお願いし、生徒への授業のたびに毎回メンター向けの講座を開いた。１回につき10分から時によっては１時間程度まで、最前線で生徒と接する先生方への働きかけとして講座を開き、先生たちも協力的であった。

今年度特に意識したのは、アクションの充実である。アクションが１回だけに終わらず、２回３回…と展開できるように努めた。かなりの部分で達成できたと思う。

具体的には、まず、夏休みに現場に赴いて仮説の検証を行う、これが「課題解決のためのアクション」１回目である。それを受けて、秋季に２回目、冬季に３回目を行うという形である。

アクションをこなせているかどうかの検証は、中間発表の時点で自己評価を行った。大多数の班は、最低３回はアクションができており、おおよそ10点満点中８点程度の評価であった。

その中でも本日の発表会で発表した班は、アクションの回数が飛び抜けていた。これらの班は、いわゆる「自走感」が強く、前のめりに課題に取り組み、放っておいてもどんどん進んでいた。

今回はいろんなルールを緩めた。班を組まず

に１人で研究を行っていいことにした。テーマについても縛りを緩めて、最終的に「ローカル／グローバル」に通じればいいとして、基本的に自分のやりたいテーマに取り組ませた。テーマの自由度を高めたため、班の数も大幅に増加し、班の総数は100班を超えた。

自由度を高めた結果どうなるか、というのも今回の課題であったが、必要なものと不必要なものが判別できたと思う。これを基に、来年度以降取り組みたい。

**ⅳ）SG課題研究Ⅲについて（目時）**

今年度は、第一にグローバル課題への解決方法を意識して研究をまとめること、第二に英語によるプレゼンテーション能力と質疑応答する力の向上をテーマに取り組んだ。

進路対策もあり、夏休みまでに完了するプランであった。

プレゼンテーションにおいては、SG 課題研究をはじめた当初は、大半の班は原稿を読むだけだったが、今はそのような班はごく少数である。それだけでも大きな進歩と考える。

ただ、あくまで用意された場においての情報発信であって、実際に海外の人に向けての、受け手を想定した情報発信になってはいない。これは今後台湾研修などを活用して改善したい。

１～２年という期間で完了できない探究活動は多い。先輩たちが取り組んだ研究を引き継ぐ取り組みを実験的に行った。テーマにもよるが、先輩たちの取り組みを活用できる形になればよいと考える。

**［質疑］**

**（佐々木）**

今日の発表は、今までで一番よかった。ポスターセッションのフォーマットが決まっていて、多くの班の発表を見るのに見やすかった。「アクション」の回数を重ね、改善を行っていたのもよかった。盛岡一高の探究のスタイルができていたと思う。

課題として２点言いたい。

１点目は、アンケート調査のサンプル数の問題である。大学での研究でも同じことが言えるし、統計を習っていないので仕方がないことではあるが、データ数が少なすぎるのが問題だ。一般的には400のサンプル数が必要で、大学生も研究者もここで困る。もっとも、高校での探究に学術的な信頼度を求めるのとはちょっと違うのではないかとは思う。本当はもっと必要だよ、とは知っておいてもらいたい。

２点目は、ポスターセッションの発表の中で、基本的知識が不足しているものがあった。たとえば、太陽光発電について発表した班があり、「アンケートを取ったら否定的な意見が多かったのが残念だった」と、あくまで太陽光発電を促進する観点からの結論だったが、欧米では太陽光発電より風力発電が主流である。基本文献に当たってみれば、簡単にわかったはずである。テーマに関する基本的知識は必要だし、それがあれば、研究の前提が違ってくる。

全体に、多くの班がインタビューを研究に反映しているのは、とてもよい。反映の仕方もとてもよかった。改善点はあるが、一定のスタイルの確立、という点で評価できる。

**（遠藤）**

海外フィールドワークについて聞きたい。

**（佐藤幸）**

行き先を台湾にしてから２年目である。

政治大学での英語のプレゼンテーションを１回行い、大学の先生から指導を受けつつ、現地調査を行う。それをまとめて、また現地で発表する…この形ができてきた。現地での人間関係やサポート体制が構築されつつあり、一つのパッケージができたと言える。

花蓮市と盛岡市が友好都市になったこともあり、今後は、本校が向こうの学生の活動をサポートする受け手としての可能性もある。

**（遠藤）**

全体に、３年間の流れやビジョンがあっていいが、大テーマの「グローバル」までたどりついてない班もあったが、どうか。

**（千條）**

まずは興味発見からスタートし、落としどころが「グローバル」だということを、ルーブリ

ックの中で課している。これまでの生徒のアンケート結果からも、「やらされ」感が出てくるとつまらないと考え、テーマ選択の自由度を高くした。一応関連づけの意識はもたせたが強制はしない、というスタンスを取った。

**（遠藤）**

対外的な発信はどうなっているか。

**（千條）**

２年生だと、「SGH フォーラム」での英語発表、「東北地方の SGH フォーラム」での発表を行った。他には、「TOLIC」と連携して、「TOLIC カンファレンス」での発表、デュッセルドルフでの見本市への参加、また、県庁で、本校主催で県内の ILC 推進校の発表会を行った。

**（遠藤）**

台湾研修を経験した子たちはどうか。一般生徒への還元ができているか。

**（千條）**

台湾での FW の結果を、自分たちの研究にまとめた。それで還元したと言えると思う。

**(2)［指定校］より**

**5 年間の成果と課題およびポスト SGH の取組の方向性（佐藤幸）**

SG 課題研究を始めた当初、生徒の研究の結論が、一般論としての提言で終わる例が多かった。そこから次第に「アクション」を重視していった。実践のないものは評価できない、と繰り返し指導した。

生徒アンケートによると、「社会貢献ができている」数値が大きく上がっている。「自己肯定感」が上がっていることとつながっているのではないか。「探究活動が好き」という数値も上がったのは一つの成果だ。

教員向けのアンケートも実施し、ほとんどの項目で、９割を超えるプラス評価だった。

その中で、他より評価が低かったのは、「SGH の活動が生徒の進路に肯定的に影響を与えた」の項目で、肯定的な回答は７割であった。必ずしも９割に達する必要はないと思うが、これが課題かもしれない。

また、自由記述では、「担当者の負担が大きい」という評価が何人からかあった。先生たちも最終的なビジョンが見えないと、「やらされ感」が出る。ゴールの意識を共有しながら取り組むことが絶対的に必要である。

来年度以降、SGH をベースとしながら、どのように社会につながるかを考えながら取り組んで行かせたい。また、今まで友好関係を培ってきた各外部団体・機関との関係を大切にしたい。台湾への研修は、２年間は続ける予定であり、その後、現在１年次で行っている研修旅行を２年次の関西方面へのフィールドワークとして行い、そのうち一部生徒を台湾に派遣するようにしたい。

校内でも、現在の SGH 推進課から新分掌を設置し、新たな探究活動に向かいたい。

**［質疑］**

**（佐々木）**

SDGs についてだが、この分野の専門家はなかなかいない。特に高校に指導者がいない。SDGｓとどうからめていくかは難しい点だが、どう考えるか。

**（佐藤幸）**

SGH の指定が外れると、SG 課題研究Ⅱの６つのテーマの枠は消える。テーマを選択するにあたって、入口は趣味的な関心でも構わない。あくまで本人の興味関心に添うものでありたい。ただそこで、「社会的な貢献」という関数を入れたい。

**（千條）**

SDGｓの北極星をイメージすると、「自分」からスタートして「実現したい社会」にたどり着く。つまり、「社会性」というフィルターは後付けでも構わないと考える。指導する側は社会性を忘れてはいけないけれども。

**（遠藤）**

ゴールであって、ターゲットではないということだと理解した。

**（松本）**

一般企業も SDGs に関係する。企業と絡むという方法も可能性がある。

**（佐々木）**

外国の学校との、ネットを通じた交流などは行わないのか？本校の生徒は、英語を直接使う機会を求めている生徒たちだと思うので、そういうことを取り入れてほしい。

**（佐藤有）**

ネットを通じた国内の他高校とのやりとりの例もある。前向きに考えたい。

**（遠藤）**

WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）への申請は考えていないのか。

**（佐藤有）**

本校は行わない。

**（遠藤）**

２年後から始まる研修旅行はどのようなものか。

**（佐藤有）**

コース制で行う。台湾研修を学年全員が行うのは無理だとも県から言われている。１年次から２年次に変えたのも、３年間を見越してのものだ。

**（遠藤）**

「授業の SGH 化」は取り組まないのか？

**（佐藤幸）**

各教科ですでに取り組んでいる。

**(3)［管理機関］より**

**（松本）**

SGH 指定の５年間、お疲れ様でした。最初は試行錯誤であったが、次第に一つの形になってきたと思う。１学年から２学年３学年と、いい意味でのルーティーンができてきた。台湾での海外フィールドワークも形を作ってもらった。

成果として、生徒の「関心」「主体性」については、数値が上がっているし、発表会の質も毎年向上している。生徒が自分から取り組んでいることがよくわかる。

これからの課題としては、持続可能性である。予算も支援体制も薄くなる中で、スリム化できる点はスリム化すべきと考える。探究活動のプロセスに重視して取り組んでほしい。

今後の展望として、Society5.0 を踏まえた方向性として、文系・理系の垣根を超えた人材育成、AI 人材の育成が求められる。

そこで、今回のレガシーの継承を期待したい。「チーム一高」を作って、ハウツーや実績を他校と共有し、他校への波及効果を起こすことを望んでいる。

管理機関としての支援は終了するが、今後も様々な情報提供や支援を行っていきたい。

**（菊池）**

小中学校担当として考えたのは、岩手の小中学校の子供たちを耕したいということだ。小中における「探究の時間」が形式化、形骸化していないかを振り返りたい。小中学校、ひいては学齢前に、子供たちの興味関心をつぶしてはいないか、と考えさせられた。今後、小中高連携について、より一層実践していきたい。

**(4)［校長］より（佐藤有）**

運営委員の方々、管理機関の先生方、これまでご支援ありがとうございました。

この５年間で、大きな進歩があったと思う。関係機関との連携についてだが、当初のイメージはせいぜい大学を相手にするくらいだったが、自治体や外部団体企業など、視野が大きく広がった。今後もネットワークを広げていきたい。

また、研究のサンプル数についてのお話があったが、今後の情報社会の中で、どの情報が正しいかを見極めることともつながる。研究における基礎的な知識・スキル等の定着も図りたい。

今後も、本校スタイルで進めていきたい。

（様式１）確定版020218提出

学校番号

1

# 令和２年度教育課程

学校名　岩手県立盛岡第一高等学校

課程別　全日制　　本分校別　本校

学科名　普　通　科

| 教科 | 科目 | 単位数 | １年 | ２年 文系 | ２年 理系 | ３年 文系 | ３年 理系 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 国語 | 国語総合 | 4 | 5 | | | | | 現代文Ｂ、古典Ｂは2・3年分割履修。 |
| | 現代文Ｂ | 4 | | 2 | 2 | 2 | 2 | |
| | 古典Ｂ | 4 | | 3 | 3 | 2 | 2 | |
| 地理歴史 | 世界史Ａ | 2 | | | 2 ┐ ▽5 | | | 3年文系の学校設定科目は2年で履修したＢを付した科目と同じ科目を履修。理系Ｂ科目は2・3年分割履修。 |
| | 世界史Ｂ | 4 | | 4 | 3 ┐ ▽5 | | ▮② | |
| | 日本史Ａ | 2 | | | □2 ┐ | | | |
| | 日本史Ｂ | 4 | | ▮4 | ▮3 ┐ | | ▮② | |
| | 地理Ａ | 2 | | | □2 ┘ | | | |
| | 地理Ｂ | 4 | | ▮4 | ▮3 ┘ | | ▮② | |
| | 世界史探究 | 4 | | | | ◎4 | | 学校設定科目 |
| | 日本史探究 | 4 | | | | ◎4 | | 学校設定科目 |
| | 地理探究 | 4 | | | | ◎4 | | 学校設定科目 |
| 公民 | 現代社会 | 2 | 2 | | | | | |
| | 倫理 | 2 | | | | 2 ┐ ◎4 | | |
| | 政治・経済 | 2 | | | | 2 ┘ | | |
| 数学 | 数学Ⅰ | 3 | 3 | | | | | 1年次は数学Ⅰ・Ａ終了後に数学Ⅱを履修。数学Ⅱは文系は1・2・3年、理系は1・2年分割履修。2年理系は数学Ⅱ・Ｂ終了後に数学Ⅲを履修。数学Ⅲは2・3年分割履修。文系数学Ｂは2・3年分割履修。 |
| | 数学Ⅱ | 4 | 1 | 4 | 3 | 2 | | |
| | 数学Ⅲ | 5 | | | 1 | | 6 | |
| | 数学Ａ | 2 | 2 | | | | | |
| | 数学Ｂ | 2 | | 2 | 2 | 1 | | |
| 理科 | 物理基礎 | 2 | 2 | | | | | 2年文系の学校設定科目は、化学基礎又は地学基礎履修後に履修し、2・3年分割履修。2年理系の化学は、化学基礎履修後に履修。理系の物理・化学・生物は2・3年分割履修。 |
| | 物理 | 4 | | | ▲3 | | ▲3 | |
| | 化学基礎 | 2 | | ▲2 | 2 | | | |
| | 化学 | 4 | | | 2 | | 3 | |
| | 生物基礎 | 2 | 2 | | | | | |
| | 生物 | 4 | | | ▲3 | | ▲3 | |
| | 地学基礎 | 2 | | ▲2 | | | | |
| | 自然科学Ａ | 5 | | △2 | | △3 | | 学校設定科目（物理・化学中心） |
| | 自然科学Ｂ | 5 | | △2 | | △3 | | 学校設定科目（生物・地学中心） |
| 保健体育 | 体育 | 7~8 | 3 | 2 | 2 | 2 | 2 | |
| | 保健 | 2 | 1 | 1 | 1 | | | |
| 芸術 | 音楽Ⅰ | 2 | ◐2 | | | | | Ⅱ・Ⅲを付した科目は各々に対応するⅠを付した科目の継続履修。 |
| | 音楽Ⅱ | 2 | | ◐1 | ◐1 | | | |
| | 音楽Ⅲ | 2 | | | | ◎4 | | |
| | 美術Ⅰ | 2 | ◐2 | | | | | |
| | 美術Ⅱ | 2 | | ◐1 | ◐1 | | | |
| | 美術Ⅲ | 2 | | | | ◎4 | | |
| | 書道Ⅰ | 2 | ◐2 | | | | | |
| | 書道Ⅱ | 2 | | ◐1 | ◐1 | | | |
| | 書道Ⅲ | 2 | | | | ◎4 | | |
| 外国語 | ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅰ | 3 | 4 | | | | | 英語表現Ⅱは2・3年分割履修。 |
| | ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅱ | 4 | | 4 | 4 | | | |
| | ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅲ | 4 | | | | 4 | 4 | |
| | 英語表現Ⅰ | 2 | 2 | | | | | |
| | 英語表現Ⅱ | 4 | | 2 | 2 | 2 | 2 | |
| 家庭 | 家庭基礎 | 2 | 2 | | | | | |
| 情報 | 情報の科学 | 2 | 2 | | | | | |
| 共通教科・科目の単位数の計 | | | 33 | 33 | 33 | 26 | 26 | |
| ホームルーム活動 | | | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | |
| 総合的な学習の時間 | | | | | | 1 | 1 | |
| 総合的な探究の時間 | | | 1 | 1 | 1 | | | |
| 合計 | | | 35 | 35 | 35 | 28 | 28 | |

備考

1. 各学年・コースにおいて、◐,▮,□,▲,△から１科目ずつ、▽から１グループずつ、◎から２グループ(芸術からは１科目のみ)を選択し履修する。
2. ３年文系で、◎から芸術を選択できるのは、芸術系大学を専願する者に限る。

学校番号

（様式１）確定版020218提出

# 令和２年度教育課程

1

学校名　岩手県立盛岡第一高等学校

課程別　全日制　　本分校別　本校

学科名　理　数　科

| 教科 | 科目 | 標準単位数 | 1年 | 2年 | 3年 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 国語 | 国語総合 | 4 | 5 | | | 現代文Ｂ、古典Ｂは2・3年分割履修。 |
| | 現代文Ｂ | 4 | | 2 | 2 | |
| | 古典Ｂ | 4 | | 3 | 2 | |
| 地理歴史 | 世界史Ａ | 2 | | 2 | | 地理Ｂは2・3年分割履修。 |
| | 地理Ｂ | 4 | | 3 | 2 | |
| 公民 | 現代社会 | 2 | 2 | | | |
| 保健体育 | 体育 | 7~8 | 3 | 2 | 2 | |
| | 保健 | 2 | 1 | 1 | | |
| 芸術 | 音楽Ⅰ | 2 | ●2 | | | |
| | 美術Ⅰ | 2 | ●2 | | | |
| | 書道Ⅰ | 2 | ●2 | | | |
| 外国語 | ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅰ | 3 | 4 | | | 英語表現Ⅱは2･3年分割履修。 |
| | ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅱ | 4 | | 4 | | |
| | ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅲ | 4 | | | 4 | |
| | 英語表現Ⅰ | 2 | 2 | | | |
| | 英語表現Ⅱ | 4 | | 2 | 2 | |
| 家庭 | 家庭基礎 | 2 | 2 | | | |
| 情報 | 情報の科学 | 2 | 2 | | | |
| 共通教科・科目の単位数の計 | | | 23 | 19 | 14 | |
| 理数 | 理数数学Ⅰ | 4~8 | 4 | | | 理数数学Ⅰ終了後に理数数学Ⅱを履修。 |
| | 理数数学Ⅱ | 8~14 | 1 | 4 | 3 | 理数数学Ⅱは1･2･3年分割履修。 |
| | 理数数学特論 | 3~10 | 1 | 2 | 3 | 理数数学特論は1･2･3年分割履修。 |
| | 理数物理 | 3~8 | 2 | ▲3 | ▲3 | 理数物理は1･2･3年分割履修。 |
| | 理数化学 | 3~8 | | 4 | 3 | 理数化学は2･3年分割履修。 |
| | 理数生物 | 3~8 | 2 | ▲3 | ▲3 | 理数生物は1･2･3年分割履修。 |
| | 理数地学 | 3~8 | | ▲3 | ▲3 | 理数地学は2･3年分割履修。 |
| | 課題研究 | 1~4 | | 2 | | |
| 専門教科・科目の単位数の計 | | | 10 | 15 | 12 | |
| ホームルーム活動 | | | 1 | 1 | 1 | |
| 総合的な学習の時間 | | | | | 1 | 2年次は課題研究を履修。 |
| 総合的な探究の時間 | | | 1 | | | 2年次は課題研究を履修。 |
| 合計 | | | 35 | 35 | 28 | |
| 備考 | | | 1.各学年において●、▲から１科目ずつ選択し履修する。 | | | |

（様式２）確定版020218提出

学校番号

| 1 |
|---|

# 令和２年度入学者の在学期間の教育課程

学校名　岩手県立盛岡第一高等学校

課程別　全日制　　本分校別　本校

学科名　普　通　科

| 教科 | 科目 | 標準単位数 | 1年 | 2年 文系 | 2年 理系 | 3年 文系 | 3年 理系 | 合計単位数 文系 | 合計単位数 理系 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 国語 | 国語総合 | 4 | ⑤ | | | | | 5 | 5 | 現代文Ｂ、古典Ｂは2・3年分割履修。 |
| | 現代文Ｂ | 4 | | 2 | 2 | 2 | 2 | 4 | 4 | |
| | 古典Ｂ | 4 | | 3 | 3 | 2 | 2 | 5 | 5 | |
| 地理歴史 | 世界史Ａ | 2 | | | ②▽5 | | | | 0･2 | 3年文系の学校設定科目は2年で履修したＢを付した科目と同じ科目を履修。理系Ｂ科目は2・3年分割履修。 |
| | 世界史Ｂ | 4 | | ④ | ③▽5 | | ▮② | 4 | 0･5 | |
| | 日本史Ａ | 2 | | | □② | | | | 0･2 | |
| | 日本史Ｂ | 4 | | ▮④ | ▮③ | | ▮② | 0･4 | 0･5 | |
| | 地理Ａ | 2 | | | □② | | | | 0･2 | |
| | 地理Ｂ | 4 | | ▮④ | ▮③ | | ▮② | 0･4 | 0･5 | |
| | 世界史探究 | 4 | | | | ◎4 | | 0･4 | | 学校設定科目 |
| | 日本史探究 | 4 | | | | ◎4 | | 0･4 | | 学校設定科目 |
| | 地理探究 | 4 | | | | ◎4 | | 0･4 | | 学校設定科目 |
| 公民 | 現代社会 | 2 | ② | | | | | 2 | 2 | |
| | 倫理 | 2 | | | | 2◎4 | | 0･2 | | |
| | 政治・経済 | 2 | | | | 2 | | 0･2 | | |
| 数学 | 数学Ⅰ | 3 | ③ | | | | | 3 | 3 | 1年次は数学Ⅰ・Ａ終了後に数学Ⅱを履修。数学Ⅱは文系は1・2・3年、理系は1・2年分割履修。2年理系は数学Ⅱ・Ｂ終了後に数学Ⅲを履修。数学Ⅲは2・3年分割履修。文系数学Ｂは2・3年分割履修。 |
| | 数学Ⅱ | 4 | 1 | 4 | 3 | 2 | | 7 | 4 | |
| | 数学Ⅲ | 5 | | | 1 | | 6 | | 7 | |
| | 数学Ａ | 2 | 2 | | | | | 2 | 2 | |
| | 数学Ｂ | 2 | | 2 | 2 | 1 | | 3 | 2 | |
| 理科 | 物理基礎 | 2 | ② | | | | | 2 | 2 | 文系の学校設定科目は、化学基礎又は地学基礎履修後に履修し，2・3年分割履修。2年理系の化学は、化学基礎履修後に履修。理系の物理、化学、生物は2・3年分割履修。学校設定科目 |
| | 物理 | 4 | | | ▲3 | | ▲3 | | 0･6 | |
| | 化学基礎 | 2 | | ▲② | ② | | | 0･2 | 2 | |
| | 化学 | 4 | | | 2 | | 3 | | 5 | |
| | 生物基礎 | 2 | ② | | | | | 2 | 2 | |
| | 生物 | 4 | | | ▲3 | | ▲3 | | 0･6 | |
| | 地学基礎 | 2 | | ▲② | | | | 0･2 | | |
| | 自然科学Ａ | 5 | | △2 | | △3 | | 0･5 | | 学校設定科目 |
| | 自然科学Ｂ | 5 | | △2 | | △3 | | 0･5 | | 学校設定科目 |
| 保健体育 | 体育 | 7~8 | ③ | ② | ② | ② | ② | 7 | 7 | |
| | 保健 | 2 | ① | ① | ① | | | 2 | 2 | |
| 芸術 | 音楽Ⅰ | 2 | ●② | | | | | 0･2 | 0･2 | Ⅱ・Ⅲを付した科目は各々に対応するⅠを付した科目の継続履修。 |
| | 音楽Ⅱ | 2 | | ●1 | ●1 | | | 0･1 | 0･1 | |
| | 音楽Ⅲ | 2 | | | | ◎4 | | 0･4 | | |
| | 美術Ⅰ | 2 | ●② | | | | | 0･2 | 0･2 | |
| | 美術Ⅱ | 2 | | ●1 | ●1 | | | 0･1 | 0･1 | |
| | 美術Ⅲ | 2 | | | | ◎4 | | 0･4 | | |
| | 書道Ⅰ | 2 | ●② | | | | | 0･2 | 0･2 | |
| | 書道Ⅱ | 2 | | ●1 | ●1 | | | 0･1 | 0･1 | |
| | 書道Ⅲ | 2 | | | | ◎4 | | 0･4 | | |
| 外国語 | ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅰ | 3 | ④ | | | | | 4 | 4 | 英語表現Ⅱは2・3年分割履修。 |
| | ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅱ | 4 | | 4 | 4 | | | 4 | 4 | |
| | ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅲ | 4 | | | | 4 | 4 | 4 | 4 | |
| | 英語表現Ⅰ | 2 | 2 | | | | | 2 | 2 | |
| | 英語表現Ⅱ | 4 | | 2 | 2 | 2 | 2 | 4 | 4 | |
| 家庭 | 家庭基礎 | 2 | ② | | | | | 2 | 2 | |
| 情報 | 情報の科学 | 2 | ② | | | | | 2 | 2 | |
| 共通教科・科目の単位数の計 | | | 33 | 33 | 33 | 26 | 26 | 92 | 92 | |
| ホームルーム活動 | | | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 3 | 3 | |
| 総合的な探究の時間 | | | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 3 | 3 | |
| 合計 | | | 35 | 35 | 35 | 28 | 28 | 98 | 98 | |

| 備考 | |
|---|---|
| | 1. 各学年・コースにおいて、●、▮、□、▲、△から１科目ずつ、▽から１グループ、◎から２グループ(芸術からは１科目のみ)を選択し履修する。<br>2. ３年文系で、◎から芸術を選択できるのは、芸術系大学を専願する者に限る。 |

学校番号

（様式２）確定版020218提出

# 令和２年度入学者の在学期間の教育課程

1

学校名　岩手県立盛岡第一高等学校

課程別　全日制　　本分校別　本校

学科名　理　数　科

| 教科 | 科目 | 標準単位数 | 学年 コース 1年 | 2年 | 3年 | 合計単位数 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 国語 | 国語総合 | 4 | ⑤ | | | 5 | 現代文Ｂ、古典Ｂは2・3年分割履修。 |
| | 現代文Ｂ | 4 | | 2 | 2 | 4 | |
| | 古典Ｂ | 4 | | 3 | 2 | 5 | |
| 地理歴史 | 世界史Ａ | 2 | | ② | | 2 | 地理Ｂは2・3年分割履修。 |
| | 地理Ｂ | 4 | | ③ | ② | 5 | |
| 公民 | 現代社会 | 2 | ② | | | 2 | |
| 保健体育 | 体育 | 7~8 | ③ | ② | ② | 7 | |
| | 保健 | 2 | ① | ① | | 2 | |
| 芸術 | 音楽Ⅰ | 2 | ◖② | | | 0･2 | |
| | 美術Ⅰ | 2 | ◖② | | | 0･2 | |
| | 書道Ⅰ | 2 | ◖② | | | 0･2 | |
| 外国語 | ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅰ | 3 | ④ | | | 4 | 英語表現Ⅱは2・3年分割履修。 |
| | ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅱ | 4 | | 4 | | 4 | |
| | ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅲ | 4 | | | 4 | 4 | |
| | 英語表現Ⅰ | 2 | 2 | | | 2 | |
| | 英語表現Ⅱ | 4 | | 2 | 2 | 4 | |
| 家庭 | 家庭基礎 | 2 | ② | | | 2 | |
| 情報 | 情報の科学 | 2 | ② | | | 2 | |
| 共通教科・科目の単位数の計 | | | 23 | 19 | 14 | 56 | |
| 理数 | 理数数学Ⅰ | 4~8 | ④ | | | 4 | 理数数学Ⅰ終了後に理数数学Ⅱを履修。 |
| | 理数数学Ⅱ | 8~14 | ① | ④ | ③ | 8 | 理数数学Ⅱは1･2･3年分割履修。 |
| | 理数数学特論 | 3~10 | 1 | 2 | 3 | 6 | 理数数学特論は1･2･3年分割履修。 |
| | 理数物理 | 3~8 | ② | ▲③ | ▲3 | 2･8 | 理数物理は1･2･3年分割履修。 |
| | 理数化学 | 3~8 | | ④ | 3 | 7 | 理数化学は2･3年分割履修。 |
| | 理数生物 | 3~8 | ② | ▲③ | ▲3 | 2･8 | 理数生物は1･2･3年分割履修。 |
| | 理数地学 | 3~8 | | ▲③ | ▲3 | 0･6 | 理数地学は2･3年分割履修。 |
| | 課題研究 | 1~4 | | ② | | 2 | |
| 専門教科・科目の単位数の計 | | | 10 | 15 | 12 | 37 | |
| ホームルーム活動 | | | 1 | 1 | 1 | 3 | |
| 総合的な探究の時間 | | | 1 | | 1 | 2 | 2年次は課題研究を履修。 |
| 合計 | | | 35 | 35 | 28 | 98 | |
| 備考 | | | 1. 各学年において◖、▲から１科目ずつ選択し履修する。 | | | | |

平成 27 年度指定　スーパーグローバルハイスクール
ＳＧ課題研究論文集　第 5 年次
令和 2 年 3 月発行

岩手県立盛岡第一高等学校
〒020-8515　岩手県盛岡市上田 3 丁目 2 番 1 号
TEL 019-623-4491　　FAX 019-654-4227
URL http://www2.iwate-ed.jp/mol-h